

飯田フィールドワーク報告書その1

文化とまちづくり

平成 27 年 6 月 3 日

140321062 二年 金井宏憲

このテーマを選ぶに至った経緯

私の親戚は、長野県の小布施町に住んでおり、長野県には関心がある。長野県の中でも小布施と飯田はどのような違いがあるのだろうか。また、自分の住んでいる豊橋市とも比較し飯田市を文化の視点から観ていきたい。飯田市の人口減少等を食い止めるため、観光や文化、協働によるまちづくりを行い、もっと飯田市に人を取り込みたいという思いに至りこのテーマを選んだ。

人口減少によって引き起こされる問題

人口が減少することで、労働力が減少し、公的サービスや民間サービスの機能がなくなっていく。学校や保育園、商店は誰が運営していくのか、従業員や後継者などの人材はどこから確保し、空き家などはどう対処すべきであるかという問題が挙げられる。

人口減少を食い止めるために・・・

実現したい地域や暮らしを考える必要がある。いかなる場合においても、これだけは守りたい、次の世代につないでいきたいなど実現したい地域や経済の姿を考える必要がある。

飯田市の文化の一つに、いいだ人形劇フェスタがある。いいだ人形劇フェスタは、「みる 演じる ささえる わたしがつくるトライアングルステージ」を理念に、人形劇人と市民が交流をしながらもにつくり上げることによって、人形劇の発展、地域の文化の高まり、まちの活性化を目指している。1979年に「人形劇カーニバル飯田」として始まり、「いいだ人形劇フェスタ」に変わってから2015年で17回目になる。この飯田市にしかない文化が、まちづくりの一つになるのではないかと考える。

人形劇（芝居）とは

人形には、飾る人形や遊ぶ人形、演じる人形があり、劇は、戯れる・激しいという意味で、芝居には、人をだますという意味を持っている。この人形劇は、民間の信仰と大きくかかわっており、また、発祥は国や地域で異なっているため、飯田市ならではの人形劇を楽しむことができるだろう。

人形劇の歴史

日本で人形劇が成立したのは、16世紀の室町期で、百太夫ともよばれた西の宮の人形遣いたちが『十二段草子』（別名『浄瑠璃姫物語』）などの語り物を、そのころに琉球から伝わった三味線による音曲と結び、人形浄瑠璃という音楽劇を創造したところからと考えられる。しかしその後も門付や大道の人形芸がなくなったわけではなく、夷や三番叟、大黒の人形を舞わず門付や、首にかけた小箱を舞台に人形を舞わす「箱回し」、座敷芸の「碁盤人形」、花火を仕掛けた「綱火」式からくり人形などが各地で行われた。人形浄瑠璃も大坂や江戸のみでなく、淡路島、阿波（徳島県）のものはとくに有名で多くの人形座があり、三重県の「安乗人形」や長野県の「黒田人形」「早稲田人形」、神奈川県「相模人形」をはじめ、各地に人形座があった。新潟県の佐渡には今日も、古浄瑠璃による演目や、その間狂言である「野呂間人形」を上演する座があり、ほかに「文弥人形」の座もある。九州では、大分県の「北原人形」がかつては大きな力をもっていたが、いまはその流れをくむ「伊加利人形」「千綿人形」などがある。

京都府亀岡市の「佐伯灯籠人形」、埼玉県「尻高人形」「白久串人形」などは1人または2人で遣う串人形で、今日も上演されている。独特なからくり的操作法をもつものとしては、福岡県八女市の「八女福島灯籠人形」は多数の棒と糸のからくりで操られ、群馬県安中市には糸操りのからくりの「鼈灯人形」があり、茨城県つくばみらい市の小張と高岡に伝わる「綱火」は、花火を使用する独特の遠隔操作によるもので、からくり的人形も多様である。「車人形」は東京都八王子市の西川古柳一座などで行われ、秋田県の「猿倉人形」、青森県の「津軽人形」、

山形県の「山辺人形」などはいずれも手遣い人形で、高知県の「西畑人形」は独自の鋼鉄線による棒遣い人形を編み出した。このほか、鳥取県の「益田人形」はかつての江戸系の糸操りを伝えるなど、日本の人形劇の伝統は実に多様豊富で、他の諸民族に比べ大きな文化的特質をもつものと考えられる。

人形劇の定義

・アニメーション作家であり人形美術家の川本喜八郎さんによると、「もしかすると、人間が作ったものの中でいちばん不思議なものかもしれません。あってもなくてもいいものなのに、ないと困る。人間の精神生活の中で、割り切れない部分を埋めてくれるかもしれない。登場人物の一人ひとりがまちがいに人形でしか生きられない性格を持っている。」（アニメーションの魅力：河出書房）と言う。

・昭和と平成時代の人形劇団主宰者であり演出家である川尻泰司さんは、人形劇は人間劇にくらべて、どこでも上演できる大きな利点があり、劇をする場所の条件や、その上演の目的によって、いろいろな人形を使い分けたり、芝居の作り方を工夫したりして、狭い場所なら小さい人形を使い、狭い舞台で行って、広い場所なら大きな人形を使って、様々な劇の作り方を考える。家庭の居間や食堂、食卓の上で糸あやつり人形劇や、空きビンを利用して創ったビン人形劇も上演することも可能。また、つい立てや幕を張ったり、ソファの背を利用して、手づかい人形劇や棒づかい人形で、立派に劇を上演することも出来る。そして、スクリーンを張って光の工夫をすれば、どんな狭い部屋でも、教室でも影絵人形を楽しめる。野外でのページェントにおいても、例えば団地やアパートの二階の窓から、物干しざおを横に突き出して、固定する工夫をすれば、そのさおに軽く作った大きな糸あやつり人形の糸をかけ、下で引っ張れば人形は、空中に浮かんで踊り出す。海水浴のときに使う空気でふくらませるビニールの大きな魚や亀やビーチ・ボールを糸で吊り上げても、容易に空中サーカスは出来る。よって人形劇は、劇場の条件によっていろいろな人形を使って様々な劇の作り方があり、どんな所でもできるが、自分が創ろうとする人形劇は一体何の目的で、誰に観せるのかをはっきり考えることが大切である。病気で寝ている子供を楽しませるためにやる人形劇ならば、寝たままでも見やすいような舞台の作り方を工夫する。夏の夜に団地で納涼大会をやるのであれば、野外にシートを張り、大きな影絵人形で上演すれば、子供たちからお年寄りまで、みんなで楽しむことができる。どこにでも人形劇を作り出すことができる。

人間のものまねではない、人形だからできる劇、つまり、実際の世の中の出来事をそのままうつすのではなく、自分たちの頭で自由に考えてつくりだす世界、それが人形劇の世界なのです。（「人形劇ノート」紀伊国屋新書）

・ミハイル・コロリョーフさんは、俳優が自分自身、自己の本性的手段によって直接的にではなく、間接的に、すなわち、人工的に創造された、物質的用具をかりて舞台造形をするという演劇芸術の一形態である（「人形劇術」晩成書房）この本の翻訳は、大井数雄さんが行った。彼は、1949年東京教育大学在学中に学生人形劇団を組織し、劇団人形座を運営したが、1963年に解散し1967年人形劇団カラバスを創設した。

また、ミハイル・コロリョーフさんは、人形劇は特別なものではない。昔から日常的に「木々がざわめく」「花が笑う」「山が手招きをする」等の比喩的な表現がある。これを目に見える形にしたいものともいえる。「動き・モノ言う造形物」心象を形象化する力、俳優の生々しい演技と異なる魅力。「らしさ」から「らしさの超克」の中での疑念壊しをすることから始める人形劇の面白さは、「らしさ」の壁を乗り越えることから始める。～らしく造る、～らしくしゃべり、らしく動く、～らしく見せる。（照明や効果音など）

現実のミニチュアを造ろうとする、本物に似せることを喜びとすることからは人形劇の面白さは生まれない。「自然物や生活用品と人形はコントラスト的な対置である。」と述べる。

- 飯田が人形劇のまち、人形の大好きな人が多い＝「らしさの克服」ができる。
→様々なものの見方ができる人が大勢いるということになる？
- 「人形劇のまち」とは、「上演の数」「演じる人々の数」「観客数」「施設設備」何を実現しようとしている？

人形劇の様式

●マリオネット（糸操り）：関節が自由に動く人形を、糸受けにつけた糸で吊り下げ、上から操る。糸は通常 9 本くらいで、人形により 1、2 本から 20 本前後まで多様。糸受けは、吊手、コントローラーともよばれ、構造も種々ある。古い形式には、鋼鉄線で吊り下げたもの、鉄線と糸との複合で操作するものもある。語源は、フランスの女性名マリオンの愛称である。日本の江戸時代には、南京操りともいわれたが、舞台的発達には明治以後で、昭和初期、現代人形劇の黎明期には主流であった。（左図）



●手遣い：
人形の体を
直接手に持
って遣う形
式の操り人
形。
影絵：人物
や鳥獣など
に似せた形



を灯火に照らして、障子や壁、白い幕などに写す遊び。

●ペープサート：2 枚の紙に絵を描き、その紙に竹串などを挟んで

貼り合わせて人形を作り、串の部分を手にとって演じる紙人形劇。明治期からあった紙人形劇を戦後、永柴孝堂（1908-1984）が復興させて保育に取り入れる際にペーパー・パペット・シアターを略して「ペープサート」と命名したとされる。台詞に合わせて人形の表裏を動かして動作を表現して演じる。表情、姿勢、持物、服装などを表と裏で変化させ、反転時に観客の関心を誘う演出が特徴である。紙人形だけで実演できるが、物語に合わせた舞台や背景を用意すれば臨場感を高めることができる。幼児や児童・生徒を対象に公共図書館や学校図書館のおはなし会などで実演されることが多い。（前頁 右上図）

●オブジェクト：「モノ」が持っている力を能動的に関与させ、そのオブジェクトが有しているエネルギーそのものを回復し、モノに運動を与えて表現を試みる。（前頁 右下図）

●実物人形 ●伝統・現代 ●日本・海外・アジア・ヨーロッパ

●出遣いか身体を隠すかまた、人形遣いの数（一体の人形を何人で遣うか）

●伝統ということ ●プロとアマ

飯田の人形劇

●飯田市の PR 版から歴史を探る（川本喜八郎人形美術館展示より）

・川本喜八郎の想い（川本喜八郎 人形美術館 寄与メッセージより）

彼が、飯田を初めて訪れたのは、1990 年の夏、人形劇カーニバルに、人形美術を担当した日本の劇団「かげぼうし」と、中国楊州の人形劇団の合作「三国志」が招待作品として上演されることになった時。その折、竹田扇之助氏の竹田練場を訪問し、また、新しく出来た人形劇場などを見る機会を得た。

幸い、「三国志」の公演は好評を得たが、他の人形劇団の公演を見る機会も逸し、また、飯田の町をゆっくり見て歩く時間はなく、その時はただそれだけの訪問にすぎなかった。

1992 年の 2 月、飯田で、川本喜八郎の人形アニメーションの上映会が開催され、沢山の方が見に来た。若い人からお年寄りまで、年齢の幅はかなり広いものであった。上演のあと舞台の上で、彼にインタビューがなされ、観客からの質問に対して答えていた。その時感じたことが、年齢に関わらず、その質問が、大変人形の本質に迫るものであったということ。

それから、アンケートに書かれた感想を読み進むうちに、更にその感を深くした。これは、人形劇カーニバルで訓練された観客だからだろうか、というのがその時の彼のあやふやな結論だった。

その後、飯田から様々な資料が送られてきたが、その中の二冊の本が、飯田に対する川本喜八郎の認識不足を衝撃的に突いた。一冊は、飯田市美術博物館調査報告 1「伊那谷の人形芝居『かしら目録台帳』」、もう一冊は、黒田人形保存会編「伊那谷人形概観と黒田人形」。「かしら目録台帳」に載っている素晴らしい古い首(かしら)の数々。既に現在の文楽の首にも残っていない、享保の雛のかしらを想わせる様なものまでがあるのを見たとき、彼は江戸時代の飯田の活力がまざまざと目に浮かんできた。更に、これだけの研究をなさった現代の飯田の方々の人形に寄せる情熱に感動した。

「伊那谷人形概観と黒田人形」はその情熱を裏付ける人形の歴史であった。彼は江戸時代の伊那谷の農民が、人形の魅力に狂い、幕府の禁令をはねのけて人形芝居を公演してしまうそのエネルギーに圧倒された。古い記録をもとに、このような詳細な人形の歴史を纏められた街が他にあるだろうか。その後、彼は何度か飯田を訪れ、下黒田の天保の人形芝居小屋や人形遣い吉田重三郎の墓などを日下部新一氏に案内され、また、今田人形座を訪問することも叶い飯田に対する想いがますます深くなって行くのを感じていった。

同じ年の 9 月、飯田で再び、彼の人形アニメーションの上映会が開催された。今度は、女優の岸田今日子さん原作の「いばら姫またはねむり姫」を上演して、岸田さんと対談することになっていた。岸田さんは戦争中疎開で、飯田で学生時代を過ごし、同級生の方が沢山見に来た。この日も観客の反応は大変素晴らしいものだった。彼は謎が解けた想いになった。飯田の観客は、長い人形の歴史を反映したものだったということが判ったのである。

彼は、若い頃から演技をする人形を作り続けてきましたが、人形の本質について根本的に教えてくれたのが、チェコの人形のアニメーションの巨人、イジィ・トルンカ氏だ。それまで甘い認識しか持っていなかった彼は、目から鱗が落ちた気がした。イジィ・トルンカ氏は、日本に来たことはなかったのですが、日本の伝統文化について、正確に把握していた。チェコの留学から帰国した後、川本喜八郎は今までとは全く違った目で能や歌舞伎や文楽を観るようになり、改めて日本の先人達の優れた能力に感動した。

彼のもう一人の師は、それらの先人達である。自分の人形の中に先人達の工夫を取り入れ、現代の人形ドラマに生かすことが私の信条となった。

彼の人形アニメーション、またテレビの人形ドラマ「三国志」「平家物語」などは総べてこの信条で貫かれている。彼の人形の美術館が建てられる地は、人形の歴史と、人形に対する情熱を持った人の住む飯田をおいて無い、と殆ど総べての作品の寄贈を思い立ったのは、このような理由からである。一口に「伝統の継承と発展」と言うのは易しいこと。しかし、不易流行の作品は一日で出来るものではありません。

伝統を継承し、発展させてきた私の人形の美術館は、それが建設され、人形が展示され、人々がそれを鑑賞するだけでは、その使命は半ばだと言わなければなりません。将来に向けて更に発展して行くことが、この美術館の真の使命だ、と考えています。継続的なワークショップによる才能の発掘や、組織的な人形に対する学習。そういう組織と指導者と学生が揃って、初めてこの美術館は存在の意義が確立します。

昔、田代斎、渡辺多蔵といった、人形芝居を引き継ぐ天才を輩出させた飯田に、今もそういう才能が眠っていないと誰が言えましょう。私の人形美術館の建設は、飯田の人形のルネッサンスをもたらすものではないか、と私は予感していると述べる。

「紙魚食ひに木偶もの狂ひ名を連ね 喜八郎」

・伊那谷の自然と人形芝居

人形浄瑠璃が飯田に伝えられたのは今からおよそ 300 年前で、当時の飯田のまちは豊かに潤っていたといわれている。山の人々は木を切り出し、農家は桑を育て、蚕を飼って絹糸とり、にぎやかに暮らしていた。農閑期においては、当時お流行の人形浄瑠璃の一座を呼んでおおいに楽しんでいたという。そして、黒田や今田の人たち

をはじめ、多くの人たちが旅の一座から人形遣いを教わり、やがてお祭りと結びついて、地域の人々の手によって現代に伝えられてきた。



※人形浄瑠璃：日本固有の人形劇の一つ。三味線伴奏で語る義太夫節などの浄瑠璃に合わせて人形を遣うもの。語り物と人形の結び付きは古く上代よりあったが、室町後期に起こった浄瑠璃節が、江戸初期三味線と提携して、人形芝居を上演するようになって成立。作者に近松門左衛門、太夫に竹本義太夫などが出て、演劇の様式として確立し、歌舞伎にも影響を与えた。現在「文楽」として傳承されている。

飯田にはたくさんのお祭りがある。自然への畏敬の念を抱いた人々のお祭りには、おみこしや獅子舞、神楽など人形浄瑠璃以外にも様々な芸能が奉納されてきた。

た。それらは、神事であり、楽しみの場でもあり、地域が若者を鍛える場でもあった。このように、飯田の人たちは、昔から芸能をみること、演じること、支えることを楽しんできた。この守り伝えられてきた気質が、今なお現代の人々に受け継がれてきている。

伊那谷には、かつて 20 以上の人形座があり、専用の人形舞台が建てられる程の隆盛をみるが、江戸末期の俵約令、明治政府の鑑札制度、新たに人気を呼んだ地芝居などの影響を受け、衰退する。昭和 10 年代には、廃滅寸前となる。

※俵約令：俵約令において強調されたものは、「身分相応」ということである。近世社会は身分制社会であった。俵約令は、身分制の分限をこえた生活をおさえることに重点が置かれていた。つまり、生活のすみずみにおよぶ細かな規制は、農村の荒廃、本百姓体制のゆらぎをなくし安定した農業生産を維持していくという幕府、諸藩の財政難克服のためのひとつの方策ではあったが、同時に次第にゆるみつつある身分格式を再度しめ直して、身分制社会を守り抜こうとする政策でもあった。

・鑑札制度：鑑札制度が生まれた背景には、明治政府による国有林野政策の展開があり、領主直轄地の官林への編入から山林原野官民有区別そして、官民有地境界査定という段階で進んでいった。それに伴って、近世以来入会だった地域は官林に囲いこまれ、人民が従来のように利用することは、禁じられていった。鑑札制度の目的は、「官林」がおよそ人民の權益となんら関わりがないものであることを意識させるためであった。

30 年代、黒田、今田、早稲田の三座が、59 年には古田を加えた四座が「伊那人形保存協議会」を結成。昭和 50、黒田、今田が国選択無形民俗文化財となる。

伊那谷の人形芝居

諏訪湖から流れ出た天竜川の流域は、東に南アルプス、西に中央アルプスの山並みが連なり、広大な谷筋を形成する。この谷を伊那谷という。古くから、中山道の脇街道として、また天竜川の河川交通路として栄え、東西のさまざまな文物が往来していた。

伊那谷は民俗芸能の宝庫で、人形芝居の密度が極めて高い地域として知られる。江戸時代は村ごとに人形芝居があったといわれたほど、人形芝居伝承地は数多い。その多くはすでに廃絶している。だが、古田人形・黒田人形・今田人形・早稲田人形の四座が現在も活発に活動을続け、伊那人形の伝統を守っている。伊那人形芝居保存協議会を組織して技芸の伝承に取り組み、若い後継者も育ち、各座とも活動は、近年、より活発になっている。また、

創作外題に取り組んだり、江戸時代の芝居情緒を再現するため和蠟燭^{わろうそく}の灯りで上演したりと、新しい試みも行われている（今田人形）。平成六年三月には、国立文楽劇場の第四回民俗芸能公演「ふるさとの人形芝居」に四座が出演した。

伊那谷には八〇〇点をこえる多くのすぐれたかしらが現存している。商業座本にとってかしらは消耗品で、淡路では傷んだかしらや、大型かしらの流行で時代遅れとなった古いかしらは次々と廃棄されてきたが、伊那谷では、かしらは地域の文化遺産として大切に扱われ、全般的により状態で保存されている。かしらが類似化される

以前の多様で表情豊かな造形は、淡路阿波人形や文楽の類似化されたかしらを見慣れた目には、たいへん新鮮に映る。その中には、十八世紀に遡る植毛かしらや、エンバ棒式の遺構を残す古いかしらも多く、また、内部に作者や製作年などの内銘のある江戸時代のかしらもあり、かしらの編年を研究する上で欠くことのできない資料となっている。現在確認されている日本最古の内銘（元文二年・1737）のあるかしらも伊那谷にある（黒田人形）

飯田市上郷黒田の諏訪神社の境内に、天保十一年（1840）に建てられた、日本で最古最大の人形舞台（国の重要有形民俗文化財）があり、早稲田では、人形による神送りという珍しい民俗行事が今も伝承されている。

『人形劇カーニバル』のはじまりから「いいだ人形劇フェスタ」へ

1979年、このような土壌で自分たちのお祭りを創りたいという人形劇人の思いと、当時の市町松沢氏の「まちづくり人・づくり」の思いが重なり、「人形劇カーニバル飯田」が始まった。公演のほか、パレード、人形展など様々な催事が行われ、1988年には「世界人形劇フェスティバル」が開催、フランスのシャルルヴィル・メジュール氏との友好都市提携が結ばれた。公演数、観客数とも上昇の一途をたどったが、1998年の世界大会を機に修了した。その後一年の間に市民によって新しい立ち上げが進められ、翌99年には「いいだ人形劇フェスタ」として、市民による新しい人形劇の祭典がはじまった。「みる・演じる・ささえる・わたしがつくるトライアングルステージ」をコンセプトとして、順調に活動をつなげてきている。この市民による人形劇の祭典が伝統の人形芝居にも新たな風を起し、最近では中高生による伝統の継承者も生んでいる。リニア時代を迎えるにあたって、この人形劇を中心としたまちづくりが重要な位置を占めていくようにも見える。

「飯田人形劇フェスタ」市民がつくる人形劇の祭典へ

人形劇カーニバル飯田は第20回、成人式を迎えた20年を区切りに、発展的に終了することになった。第20回のカーニバル終了後、関係者によって、20の評価と検証が行われ、市民主体の新しい体制で再出発することになった。新しい人形劇の祭典の起ち上げについて急ピッチで検討が進められ、1999年3月には骨子が出来上がり、4月には市民による新しい実行委員会が誕生した。そして8月に市民がつくる人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」の第1回が開催された。いいだ人形劇フェスタは、市民と人形劇人が交流しながら、ともにフェスタをつくっていくことにより、人形劇が向上・発展し、地域の文化がさらに高まり、そしてまちも活性化するようなお祭りを目指している。「みる・演じる・ささえるわたしがつくるトライアングルステージ」、それがいいだ人形劇フェスタである。さまざまな年齢や職業の人が集まり、一人ひとりの思いを実現させ、たくさん感動と豊かなところが生まれる場として、回を重ねる中、いいだ人形劇フェスタは、市民がつくる私たちのお祭りに育ってきた。そして、2008年、人形劇のまち30年を記念して、9日間にわたる「世界人形劇フェスティバル」が、市民の手によって開催された。

「いいだ人形劇フェスタ」の特徴

いいだ人形劇フェスタは、誰でも参加できる日本最大の人形劇の祭典です。毎年8月上旬、飯田市及び周辺の約130会場で、400ステージ以上の人形劇公演が繰り広げられる。全国そして海外から300以上の劇団が一堂に集まり、中学生から大人まで、2000人を超える市民がボランティアスタッフとして、いいだ人形劇フェスタを支えている。

人形劇を観る人も、演じる人も、そして支える人も、みんなが参加証ワッペンを購入し、身につけて参加する。ワッペンは、みんなでフェスタをつくるシンボルである。

フェスタ期間中は、飯田市内20地区の公民館や集会所、神社やお寺、保育園や学校などの生活の場が劇場になる。それぞれの地区で組織される実行委員会によって公演が運営されている。飯田市全域のどこでも公演が行われ、それを地域の住民が支えている、それがいいだ飯田人形劇フェスタの大きな特徴である。

いいだ人形劇フェスタは、参加する一人ひとりの思いを大事にする。市民も劇人も誰でもが、自分のやりたいことが提案でき、皆の賛同を得られれば、皆でその提案が実行できるようにサポートする。これによって、飯田だけの新しい企画や作品が生まれる。

ワッペンをはみんで
フェスタをつくる
シンボル



参加証ワッペン方式
人形劇をみる人も、演
じる人もそしてスタッフ
として働く人も、みんな
が参加証ワッペンを
購入し、身につけて
参加します。その収入
がフェスタを支えています。

みる

400以上ある公演からいくつでもみることができます。毎年、およそ延べ5万人の人たちが観劇します。公演の主体は次の4つです。

- 本部公演 実行委員会が企画運営する公演。
- 地区公演 市内各地区公民館が中心となる地区実行委員会が本部と連携して運営する公演。
- 広域公演 飯田市周辺の町村が、実行委員会と連携して企画運営する公演。
- プレゼント公演 企業や団体、個人が公演経費を負担し、提供される公演。ワッペンだけで見ることが出来ます。

※有料観劇券の必要な公演と、ワッペン提示のみで観劇できる公演とがあります。

演じる

毎年、全国から、世界から、およそ300劇団、1,700人の人形劇人が飯田に集まり、それぞれに自分たちの人形劇を演じます。公演形態には、ABCの3つのタイプがあります。

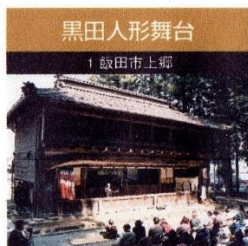
- Aタイプ…専門劇団の自主公演、プロ劇団が意欲的な作品を紹介するタイプ。チケット価格は劇団が設定し、劇団の収入となります。
- Bタイプ…専門劇団の上演希望の作品から実行委員会が選考するタイプ。実行委員会が上演経費を支払います。
- Cタイプ…プロ・アマを問わず参加エントリーができるタイプ。上演経費は支払われません。

ささえる

フェスタは多くの市民・人形劇人・企業や団体・行政によって創り支えられています。フェスタの主催は、いいだ人形劇フェスタ実行委員会、飯田市・飯田市教育委員会ですが、そのほかに、様々な形で応援してくれる多くの方々によってささえられています。

- 2,000人を超える市民ボランティア
中学生から大人まで2,000人を超える市民スタッフの手によって運営されています。
- 自分たちのお祭りとして参加する劇人たち
上演する劇団も観劇だけの劇人もいますが、毎年1,700人を超える劇人たちが自分たちのお祭りとして参加しています。
- フェスタを応援する企業や団体、市民たち
40を超える多くの企業や団体が共催、協賛、後援、協力をしています。
- フェスタを支える行政
飯田市と飯田市教育委員会はフェスタ事業費の一部を負担するとともに、事務局業務を担っています。

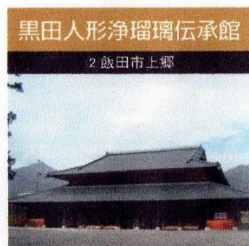
人形劇関連施設



黒田人形舞台

1 飯田市上郷

天保11年(1840年)に建てられた日本最古の人形劇舞台で国の重要有形民俗文化財。
300年以上の歴史を持つ伝統人形浄瑠璃。黒田人形は、毎年4月、下黒田諏訪神社の春祭りで奉納上演されます。



黒田人形浄瑠璃伝承館

2 飯田市上郷

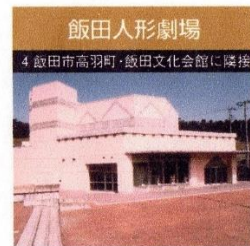
1999年、黒田人形舞台に隣接して建設されました。黒田人形の保存と伝承を行い、伝統人形の研修・後継者の育成の場として活用されています。また、伊那谷四座の交流と発表の場ともなっています。



今田人形の館

3 飯田市龍江

1994年、今田人形芝居の保存と継承を行い、伝統人形劇の研修・後継者の育成の場として活用することを目的として建設されました。毎年10月、大宮八幡宮神社秋季祭典の際に300年以上の歴史を持つ伝統人形浄瑠璃。今田人形の奉納公演が行われています。



飯田人形劇場

4 飯田市高羽町・飯田文化会館に隣接

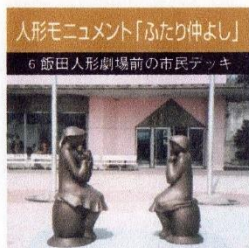
1988年、「人形劇カーニバル飯田」10周年を記念してオープンした全国で4番目の公立人形劇場。
8月に開催される「いいだ人形劇フェスタ」期間中のほか、年間を通じて人形劇の公演や様々な活動に利用されています。



ハミングボール

5 飯田市公民館横

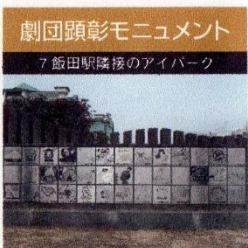
1988年に「人形劇のまち飯田」のシンボルとして設置された人形時計塔。定時になると「時の番人」のファンファーレに続き4体の人形による人形劇「マリオトピア」が演じられます。



人形モニュメント「ふたり仲よし」

6 飯田人形劇場前の市民デッキ

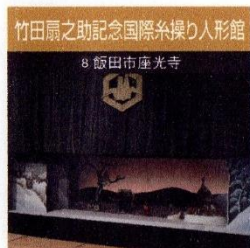
2000年、「人形を操っているお姉さん」と「それを見つめている妹」の人形モニュメントが設置されました。「赤い靴はいていた女の子」(横浜 山下公園)の像などを手がけた、山本正道氏のデザインです。



劇団頭彰モニュメント

7 飯田駅隣接のアイパーク

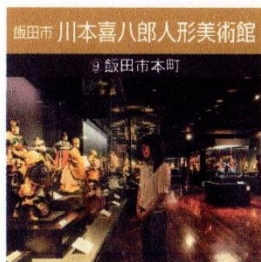
1993年、人形劇カーニバル15周年を記念し、「人形劇カーニバル飯田」に10回以上上演参加した人形劇団を顕彰するモニュメントが設置されました。



竹田扇之助記念国際糸操り人形館

8 飯田市座光寺

伝統糸操り人形芝居「竹田人形座」の功績を記念し、人形劇による国際的貢献の中核たるべく、1998年に開館。竹田人形座の人形や資料をはじめ、竹田扇之助氏が世界中から収集した人形コレクションを収蔵・展示しています。



「人形劇のまち」の新たな拠点施設として、交流人口の創出や人形劇文化の振興を目的として2007年に開館。世界的な人形美術家 川本喜八郎氏が製作したNHK人形劇「三国志」や「平家物語」、人形アニメーションの人形などを収蔵・展示しています。



提携先の概要

アルデンヌ県の県都であり、ムーズ河畔の工業都市で、パリの北東 248 km、人口は 62,000 人。製鉄、機械工業の中心地で織物工業も発展している。1966 年シャルルヴィルとメジエール他 3 町が合併している。標高は、高いところで 600 メートル、雨が多く、霧が深く、冬の気候は厳しい。森林に覆われて、林業と粗放的な農牧業、山麓地帯から鉄鋼石、石炭を産出し、これとムーズ河の運河とが結びついて、ムーズ河流域一体に鉄鋼業、繊維工業が発達した。戦後、プティ・コメディアン・ドゥ・シフォン(布切れでできた役者たち)という人形劇団が誕生。1946 年以降の活動は国内外に目覚ましかった。当時の市長ジャック・ホッジ氏、そして、アルデンヌの文化活動を豊かにする鍵は、人形劇であると信じ、人形劇を理解し情熱を傾けたアンドレ・ルボン市長の努力により、シャルルヴィルにおいて人形劇は確固たる位置を与えられ、世界の人形劇芸術の中心として、認知されるようになった。1972 年に、世界人形劇連盟の総会と世界人形劇フェスティバルを開催した。その後、3年に1度定期的にフェスティバルを開催し、回を重ねるうちにシャルルヴィルは世界の人形劇人が一度は行ってみたいと夢見る都市になった。このまちには、1981 年に開設した国際人形劇研究所、世界人形劇連盟の事務局、1987 年に開校した人形劇の専門者の養成機関である国立高等人形劇芸術学院があり、世界の人形劇の中心地でもある。

リニアの登場



リニア中央新幹線を見据えた将来像を描く「リニア将来ビジョン」は、飯田下伊那地域の将来に向けた地域づくりの指針で、地域住民や有識者による検討会議を経て、平成 22 年 11 月に、南信州広域連合で策定された。リニア中央新幹線の実現は、移動時間の大幅な短縮による産業立地の可能性向上や交流人口の拡大などのプラス効果が期待される。一方で、いわゆるストロー現象などのマイナスの影響も心配される。このように二面性のあるリニア効果に対し、プラス面を最大限に活かし、マイナス面を最小限に抑えるための地域づくりの取組が重要と

なる。飯田市では、リニア将来ビジョンに掲げた地域の将来像実現に向け、第五次基本構想基本計画後期計画に反映させるなどの取り組みを進めている。

ストロー現象とは？

新幹線や高速道路などの交通網の整備によって、それまで地域の拠点となっていた小都市が経路上の大都市の経済圏に取り込まれ、ヒト・モノ・カネがより求心力のある大都市に吸い取られる現象。コップの水がストローで吸い上げられる様子に見立てている。市場規模の格差がもたらす逆流効果の一例であり、大都市へ行く時間の短縮や、運賃が下がることで、買い物客や通勤客が大都市へ流出したり、小都市にある企業の支店が撤退したりすることを指す。

大都市と結ぶ高速交通網の整備は、地方都市が地域発展の起爆剤としてしばしば望むことだが、ストロー効果をもたらす可能性が常にある。交通利便性を向上させることで人や企業を呼び込むことができるのか、あるいは地域を衰退させてしまうのかは結局、その地域にどれだけ魅力があるかによると見られている。

リニア将来ビジョン

リニア将来ビジョンを策定するために、リニア将来構想検討会を設置した。この会議は、各界の有識者が参加する「有識者会議」、地域住民が参画する「検討会議」及び「ワーキンググループ」の三部構成で検討。2010年5月17日に開催された第一回有識者会議を皮切りに約半年の間にのべ22回の会議を行い、様々な視点から将来の地域像を論じて、ビジョンを策定した。今後は、南信州広域連合の広域計画等へ反映する。

リニア中央新幹線飯田駅設置を見据えた将来の地域像

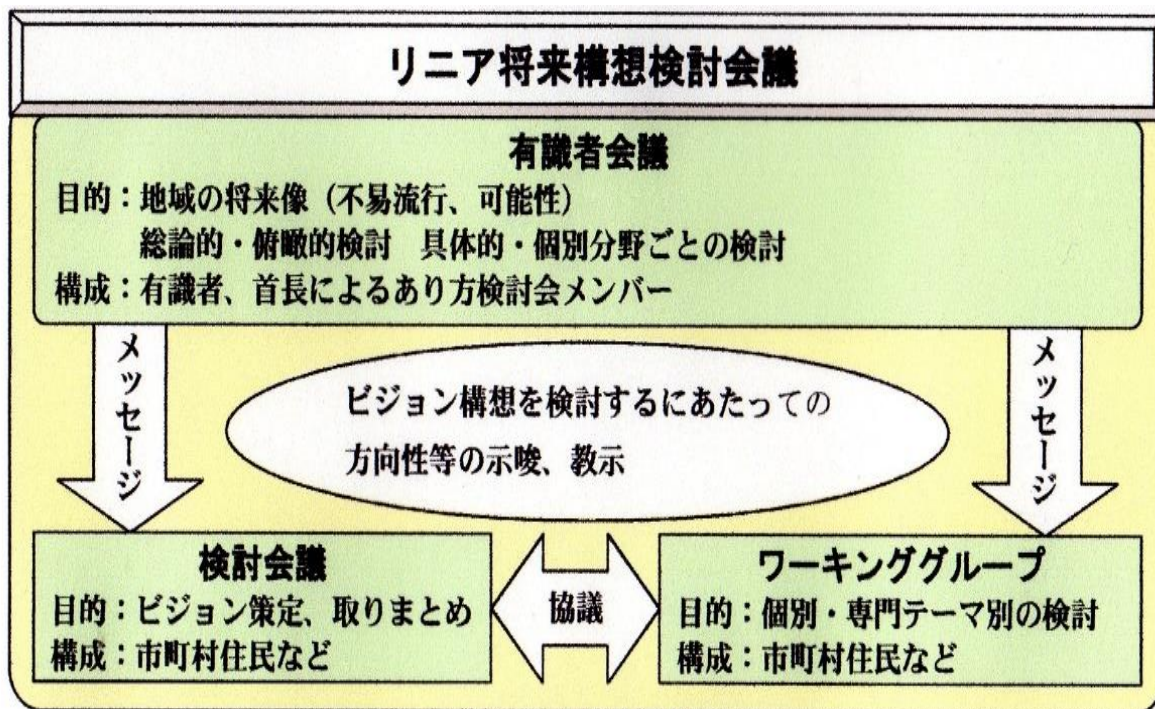


図1 リニア将来構想検討会議

リニア中央新幹線の飯田駅の設置を見据えて、飯田下伊那地域は地域の外と内に対してそれぞれの地域像を明示する必要がある。

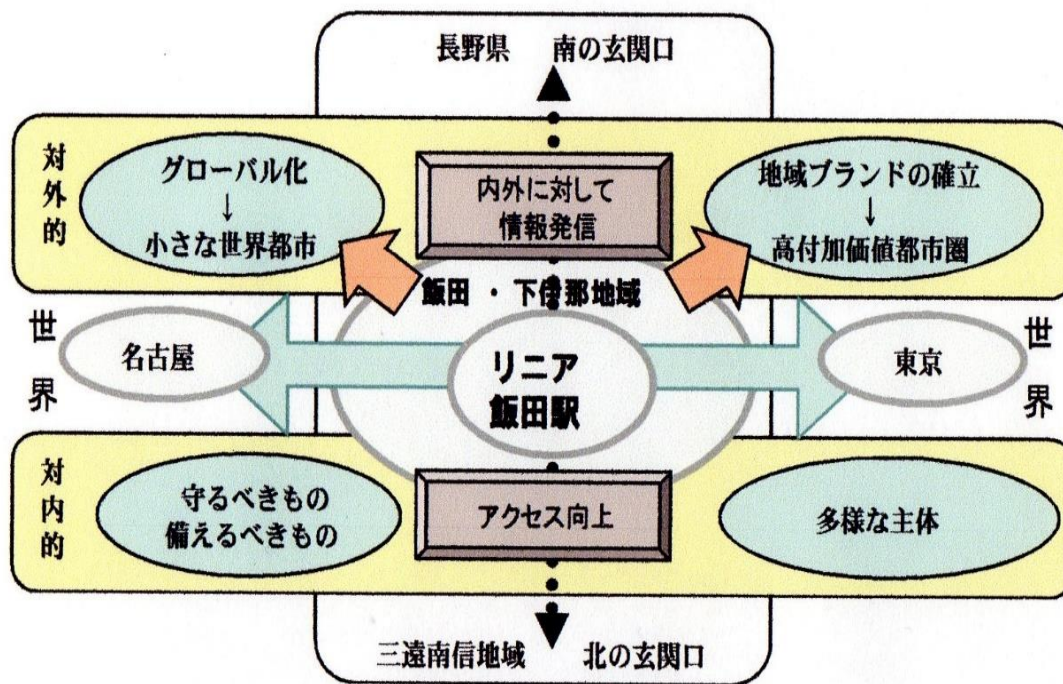


図2 将来の地域像

●対外的に目指す地域像

飯田下伊那地域が、外来者の舞台になることや地域外に情報を発信することにより、日本のモデル的事業の展開や世界で誇れるような地域になることを目指す。

・グローバル化（国際性）～小さな世界都市～

リニア中央新幹線の実現は、国内はもちろんのこと、海外との繋がりもこれまで以上に高まり、グローバル化を活かし、人のつながりを大切にする風土を活かした小さな世界都市を目指す。

・地域ブランドの確立～多機能高付加価値都市圏～

リニア中央新幹線の開通により多くの人と情報が往来する。このことは、飯田下伊那地域として、地域ブランドを確立することの重要性を増すことを意味する。そこで、飯田下伊那地域の地域ブランドを確立し、先駆的なモデル都市になるような多機能高付加価値都市圏を目指す。

●体的に目指す地域像

リニア中央新幹線の開通による地域の変化には、地域が主導権を持って対応することが重要である。先人が培ってきた文化や伝統を守りながら、今後も飯田下伊那地域の住民が、地域のことを自分たちで考えるまちづくりを進める。

・多様な主体

飯田下伊那地域に今も残る「結い」の精神を大切にして、住民が自ら活躍する地域が大切である。また、「地域で活躍する価値観、地域を愛する価値観」など醸成する人材育成に取り組む等、多様な主体が活躍する地域を目指す。

・守るべきもの、備えるべきもの

「守るべきものは守って本来に伝え、備えるべきものは備えていく」という理念に基づいた地域づくりを目指す。

●地域像の現実に向けて必要なこと

将来の地域像を実現するには、地域内外に対して「情報発信」をすることと、駅勢圏がより広く捉える「飯田駅への交通結節性（アクセス性）の向上」と駅を中心としたまちづくりの取り組みが必要である。

リニア中央新幹線飯田駅設置を見据えた具体的なまちづくり案

リニア将来構想検討会議のワーキンググループでは、4つのテーマ「産む・育てる・学ぶ」「住む・交流する」「働く」「環境」について、将来の地域像を議論した。ワーキンググループのテーマごとに、議論された具体的なまちづくり案は、このようになっている。

		産む・育てる・学ぶ	住む・交流する	働く	環境
対外的なこと	小さな世界都市 グローバル化	●海外研究者の来訪の拡大 ●地域の子供の国際交流の場 ●国際交流の拡大への対応	●二地域居住の重点的な促進 ●ライフタウンの推進 ●人形劇のまち ●国際会議のまち ●スポーツの世界大会開催地	●世界とのつながり ●国際会議の舞台 ●外国人労働者	●環境産業とグローバル化 ●文化・人間・地域環境の世界への発信
	地域ブランドの確立 高付加価値都市圏	●人形劇の文化 ●高等教育機関の整備	●日本のふるさと（交流居住） ●日本医療福祉の郷づくり ●広域観光（木曾、上伊那から三遠南信） ●日本アルプスのゲートウェイ ●低炭素社会を目指した鉄道・バスのネットワーク	●地域の資源の活用 ●大学との連携 ●新たな産業の創出 ●トータル戦略	●ないものねだりからあるもの探しへ ●どのような取り組みが考えられるか ・里山共生都市 ・地域に根差したスマートシティ
対内的なこと	多様な主体	●公民館活動の活性化 ●地域にある多様な主体の連携	●結い・公民館ネットワーク（IIDA・YUIの輪） ●住民活動から社会的企業創造への展開 ●地域を愛する教育 ●生活へのIT活用（携帯ネットワーク等） ●伝統への参加 ●食文化の明確化 ●グリーンツーリズム（体験農業・農家民泊発祥の地）の深化	●新たな企業・産業の誘致 ●農林業のブランド化・6次産業化 ●福祉分野の就労機会の創出 ●テレワーク型の就労形態	●どのような主体が考えられるのか ●地域の中の主体をどのように育成していくか
	備えるべきもの 守るべきもの	●地元学（地域学）をとおした「生きる力」、「ふるさと」への思いの醸成 ●子供と大人が楽しく集う地域行事の検討 ●子供たちにワクワクした新たなものとの出会い	●ゆるやかな地域内交通 ●地域の誇りを育む区域指定等 ●作る景観 ●癒しの環境づくり ●各町村の特徴ある生活環境 ●グリーンツーリズム（体験農業・農家民泊発祥の地）の深化 ●日本の風景 ●環境	●文化、伝統、景観 備えるべきもの（地域産業の競争力） ●誘致企業と地域経済のつながり ●地元企業のレベルアップ ●地元企業の合併	●土地・自然環境 ●文化・人間・地域環境
全体に関すること		●生活基盤の整備 ・新たな業態の企業誘致などの職場環境の整備 ・安心して暮らせる住環境の整備 ・産科環境（医療）の充実 ・城内、県内の交通整備	●小さな世界都市総合特区の申請 ●パーチャル大学の設立 ●地域通貨・地域カードの発行 ●パブリシティ機関の設立 ●三代プロジェクト	●人口の維持 ●高齢者の働く場の確保 ●ゆつくりとしたコントロール ●ネットワーク ●情報発信 ●交通機能の強化（ゲートウェイ） ●高等教育機関 ●広域での推進	●情報発信 ●専門家による検討や住民の学習 ●マネジメントの必要性

表1 ワーキンググループの論点



数字に
みる人
形劇フ
ェスタ
開催日
数：毎年
8月初旬
4～6日
参加劇団
数：300
劇団
公演数
：450公
演
観劇者延
：4万5
千
参加劇団数
：1,800
人
ボランティア

：2,200人

内中高生：300人

公演会場数：120

2012年、伝統人形劇、飯田人形劇フェスタ、学校人形劇、アマチュア団体、観光課等々の関係者が集まり、「人形劇のまちいいだ連絡協議会」を結成し、互いに連携を密にし、人形劇を中心としたまちづくりをしていくことを確認しあった。翌年にはその具体策として、「いいだ人形劇センター」を立ち上げ研修や季刊誌の発行等を行っている。

飯田市の人形劇についての位置づけ

飯田市教育復興基本計画（22～28）

課題：「学力の向上」「学校と地域社会の連携」「社会性の確保」

異本目標：「地育力による心豊かなひとづくり」

施策の方向：豊かな心を磨く、文化力を高める

施策の展開：人形劇を活用した情操教育の推進、人形劇のまちづくり、いいだ人形劇フェスタを中心に文化事業への子ども達の参加やいいだ人形劇フェスタへのボランティア参加などを行う

●平成 24 年度市政経営の方向性について～後期基本計画を受けて～

地育力による豊かな人づくりの取り組みのポイント：人形劇を通じた「小さな世界都市」の実現に向けて世界との連携を強めながら、国際社会に貢献できる豊かな人間関係と、新たな文化価値を創造できる「人形劇のまち」を目指し、いいだ人形劇フェスタ実行委員会などの関係する皆さんとの連携による新たな仕組みを進める。

- ・人形劇を中心とした人づくり・まちづくりを推進
- ・学校人形劇を支援
- ・「いいだ人形劇フェスタ」実行委員会とともに主催、活動支援
- ・「いいだ人形劇センター」の設立、支援

飯田市内での人形劇上演および活動の様子

- ・「いいだ人形劇フェスタ」の開催（8月第1週4日間）
 - ・黒田・今田などの伝統人形芝居の上演（春・秋）
 - ・伊那谷文化芸術祭（11月）
- ・「りんごっこ劇場」（2月 地元アマチュア劇団を中心に）
 - ・「7：55 分劇場」（不定期、市民有志）
- ・学校人形劇発表
- ・ワークショップ制作発表会
- ・人形劇センター事業
 - ・巡回公演
 - ・文化会館自主事業

※活動主体は様々である

※これだけの実態があるのに、人形劇の普及・発展の問題

人形劇上演に関する状況

- ① 幼稚園 保育園
- ② 小学校
- ③ 中学校
- ④ 高等学校
- ⑤ 一般

人形劇文化が根付くということは・・・

●「いいだ人形劇フェスタ」各種受賞の理由

「信州ブランドアワード大賞」受賞理由から

志向性(考え方)・・・コンセプト 市民が企画運営する市民参加型

表現性（デザイン性）・・・ポスター、ワッペンなどのデザインの募集の全国展開

情報伝達性（情報の発信）・・・各種媒体での確実な情報発信の実績

地域性（信州らしさ）・・・地域に伝承する人形浄瑠璃の文化に根ざしつつ、現代に通じる「人形劇のまち」としての魅力の創出

将来性（継続・発展）・・・海外の研修生受け入れ、海外の作品の紹介等、国際性の確保と幅広い年齢を対象としている

●人形劇の特性から

●活動の実態から

●幼稚園児の活動風景から

信州ブランドアワード大賞

「信州ブランドアワード」は、長野県から発する優れたブランドを選考して表彰するものである。2004年「信州ブランドフォーラム」の開催を機に、長野県から発するブランドの優れたデザインを選考して表彰する「信州ブランド・デザイン賞」としてスタートした。翌2005年からブランド自体を賞の対象として選考するようになり、「信州ブランドアワード」に改称して今日に至っている。

地域でブランドづくりに取り組もうとする際、そもそもブランドというものを具体的にどう捉えたらいいのかが懸案となる。「信州ブランドアワード」ではそれを検討しつつ選考を行う中で、「志向性」「表現性」「情報伝達性」「地域性」「継続発展性」という独自の5つの指標で捉えるようになった。

選考されたブランドは、何れも当地固有の地域資源を基に生み出された他にはない魅力のある商品やサービスであり、またそれらを提供する事業や事業者であり、更にそれらの拠り所である地域そのものである。一つ一つが今の長野県産業を輝かせる要因であり、後に続くブランドの目標でもあります。このアワードが先達を超えるようなブランドづくりの呼び水になり、今後の地域産業の自立的な発展に寄与することを期待している。

飯田まつり（飯田りんごん）

飯田まつり(飯田りんごん)は「いいだ人形劇フェスタ」期間中の土曜日に開催される市民まつりである。会場となる市街地は、昼間から夕方にかけては「ふれあいアップルタウン」として商栄会の皆さんの企画した楽しい催しを開催。ダンスや太鼓など様々な市民活動の発表もおこない、まつりの雰囲気を盛り上げ、夜は「りんごん りんごん ホイ おいな～」の掛け声にあわせ市民総出で盛大に「りんごん」を踊る。

りんごん踊り（基本）



1.獅子頭
右足、右足、左足、左足×2回
ししを持った感じで舞う
(16呼間)

2.天竜川の流れ
左下から右、左、右！
右下から左、右、左！
(8呼間)

3.夜空の花火
左下からパチ、パチ、パチ！
右下からパチ、パチ、パチ！
(8呼間)

りんごん
りんごん
ホイ おいな～

「りんごん」の踊りは、3つの舞いで構成される地域の特色を表した手作りの踊りである。
1、獅子頭（この地方に数多く伝わる獅子舞の頭をかかげるように舞う）
・・・

- ・・・右足、右足、左足、左足、手は前後に、、、を2回繰り返す。
 - 2、あばれ天竜（天竜川の波をイメージしている）
 - ・・・手は左下から右、左、大きく右。次に右下から左、右、大きく左と8呼間で行う。
 - 3、夜空の花火（打ちあがる花火を表現している）
 - ・・・手を左下から、パチ、パチ、パチッ、上に掲げ、次に右下から、同じ動作を行う。
- 以上を、「りんごん、りんごん、ホイ、おいな～♪」という掛け声で、繰り返し踊る。

東日本大震災義援金へ

平成23年3月11日に発生した、東日本大震災によって被災された皆さんに、飯田まつり飯田りんごんでは、一昨年、昨年に引き続き被災地に対する支援のため、豆しぼり手ぬぐい購入を通じたまつり参加の皆さんからの義

援金の募集を行っている。豆しぼり手ぬぐい売り上げ代金の一部を、義援金として被災地の復興支援のために寄付する。今年もオリジナル豆しぼり手ぬぐいを1枚150円で販売し、売上金1枚あたり20円相当を東日本大震災復興支援金として寄付する予定である。手ぬぐいは、まちなかインフォメーションセンター（飯田市本町1-2川本喜八郎人形美術館1階）で購入可能。

また、飯田りんごん（踊り）では、環境に配慮したまつりを目指しており、参加連は、植林や森林保護、クリーンエネルギー等のために協力し、このカーボン・オフセット飯田りんごんに取り組んでいる。今年も、豆しぼり手ぬぐいを1本150円でご購入し、そのうち5円相当について森林管理費用に充当する。今年も市内の小・中学校へ配布し、生徒の手により土壌改良剤として活用し役立てるほか、環境に配慮したイベント実施の活用も検討している。

このように、飯田りんごん踊り参加連は森林保護、クリーンエネルギー等のために、各参加連あたり1本以上購入して参加している。

・カーボン・オフセット

地球温暖化の原因といわれる二酸化炭素を減らそうとする取り組みのひとつ。日常生活や経済活動の中でどうしても排出してしまう二酸化炭素(カーボン)を、他の場所で行われるCO2削減活動に投資することで埋め合わせ(オフセット)する、というものである。対象となるCO2削減活動は、植林事業、自然エネルギー事業など。イギリスをはじめ欧米で広がりを見せていた取り組みだが、日本でも2008年に入り普及が急速に進み始めた。2月には環境省から「カーボン・オフセットのあり方について(指針)」が出され、企業がCO2の排出量を公表する「カーボン・ディスクロージャー・プロジェクト」も始まっている。

カーボン・オフセットの手法としては、大きく2タイプがある。一つは、消費者がカーボン・オフセットを導入した商品・サービスを買くと、それ自体がCO2削減行動と見なされたり、金額の一部が自然エネルギーや植林事業に寄付されたりするというものである。現在、食品、旅行、ガス、保険、年賀状などにカーボン・オフセットが導入されており、あらゆる分野に広がりを見せてつつある。なおこのタイプは「市場流通型」と呼ばれる。

もう一つは、CO2の排出枠を企業や自治体などが直接的に取引するというもの。一般市場を通さないため「特定者間完結型」とも呼ばれる。

日本では08年、300件を超えるカーボン・オフセットの取り組みが実施されたと見られている。そのうち半数以上が市場流通型。洞爺湖サミットが開催された夏ごろから導入件数が増えている。カーボン・オフセットは法的に決められたものではなく、あくまで自主的な取り組みだが、普及の背景には「京都議定書」による排出量削減目標の達成が大きく関係している。日本では、2012年度までに温室効果ガスを1990年比で6%削減するという目標が設定されたが、CO2排出量は大幅な減少を見せていないのが現状。このような中、京都議定書で提案されている「クリーン開発メカニズム」「排出権取引」が注目されており、自力での削減以外で目標を達成しようという方向性が強まっている。なお、クリーン開発メカニズムはカーボン・オフセットの一種でもあり、途上国に温室効果ガス削減技術の協力や資金援助をすることで、自国の温室効果ガス削減分に充当するという仕組みだ。カーボン・オフセットには、市民が気軽に参加でき、市場を通すことで活動が広範囲に広がるというメリットがある一方、削減目標を自力で達成できないことの逃げ道に過ぎない、本当に温室効果ガス削減に結びつくかどうか不透明、という批判もある

他の市との比較

ここまで、飯田市の文化がまちづくりにおいて、どのような役割を担っているのかということを見てきたが、ここで、自分の住んでいる市などは、どのようなまちづくりを行い、飯田市の発展に参考になるところはないだろうかということを考えてみたい。

まず、長野県の小布施を取り上げたい。冒頭にも触れたが、親戚が小布施に住んでおり、母の出身地でもあるため関心がある。長野県内でもどのような点で異なったまちづくりを行っているのだろうか。

●600年の歴史を誇る栗の名産地

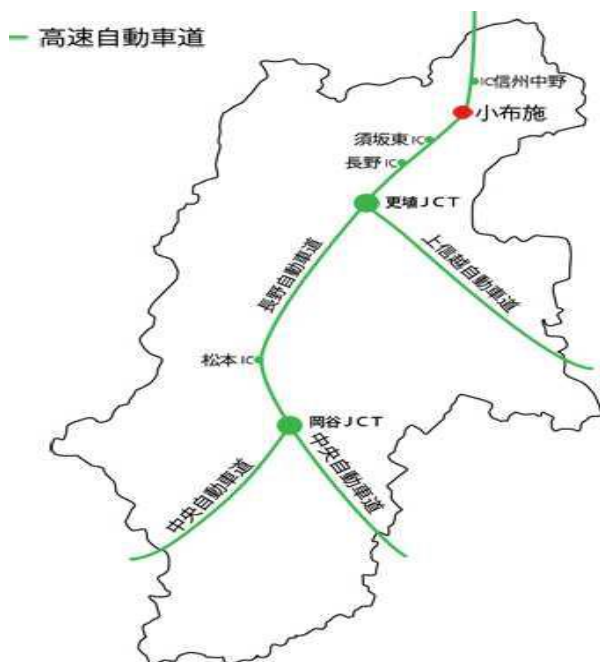
小布施町は、長野県東北部、長野盆地（通称善光寺平）の東縁に位置する標高300～400m、面積 19.07 平方

km、人口約 1 万 2 千人の小さな町である。町域は松川扇状地末端に広がり、北西に緩く傾斜をしている。県都長野市の西に位置し、東西南北を 3 つの川と 1 つの山に囲まれて他市町村に隣接し、飯綱山、戸隠 連山（高妻山）、黒姫山、妙高山、斑尾山の北信五岳を一望できる環境にある。

年間降水量は 1,000 mm 以下で、寒暖の差が激しく、夏は最高 35 度後に上がり、冬はマイナス 10 度前後まで下がる寡雨・内陸性の気候である。かつて松川は、何度も氾濫し田畑を荒らしたが、これが、土壌を栗の生育に適した強酸性の砂礫質に変えることとなり、小布施を栗の名産地にした。

江戸時代後期には、千曲川の水運を利用した流通が盛んになるとともに、越後小千谷・十日町から中野を経て上州に至る大笹街道と、直江津・高田から柏原・豊野を経て山田街道へ抜ける道が物産・交易で賑わい、小布施町は北信濃の経済・文化の中心として栄えました。この賑わいの中から生まれた豪農・豪商たちは、葛飾北斎、小林一茶ら多数の文人墨客を招き、今に続く文化の薫り高い雰囲気が形づくられた。

昭和 29 年の小布施村の町制施行と都住村との合併を経て現在の小布施町となり、平成 16 年には町制施行 50 周年を迎え、現在に至っている。



●歴史と文化のまちづくり

・北斎館周辺の町のにぎわい

昭和 30 年代から始まった高度経済成長期には、それを支える労働力として地方から大都市への若年層の人口の移動が全国的に激しくなり、小布施町でも昭和 40 年代前半まで人口の減少が続いた。こうした人口減少傾向に歯止めをかけようと、積極的な宅地の造成・分譲による人口増加策が行われた。

昭和 51 年には、葛飾北斎の画業を讃えるとともに、肉筆画を保存・展示するため「北斎館」が建設され、小布施町は北斎の町として脚光を浴び始める。昭和 58 年には北斎を小布施に迎え入れた郷土の豪商・高井鴻山の隠宅・然楼を修復保存し、「高井鴻山記念館」を開館、さらに平成 4 年には現代日本画家で、小布施出身の中島千波氏の作品を中心に展示する「おぶせミュージアム・中島千波館」を開館するなど、北斎を中心に芸術文化のまちづくりを進めてきた。

●外はみんなのもの、内は自分たちのもの

昭和 61 年、北斎館・高井鴻山記念館周辺の歴史的建造物の保存と地域の特性を活かしたまちづくりを進めようと、町・事業 3・個人 2 の 6 者により実施された「修然楼周辺町並修景事業」が完成し、その間に栗の木煉瓦を敷き詰めた散歩道「栗の小径」も誕生した。

重要な歴史的建造物の保存、新築建物の周辺との調和、土地は売買せず賃貸か交換することとされ、6 者が対等な立場で面的な整備を行ったこの方法は、画一的な都市再開発の手法とは異なり「小布施方式」とまで言われ全

国的に高い評価を受けた。その後、周囲の景観との調和と美しい町並づくりのための指針「環境デザイン協力基準」を定めるとともに、「住まいづくりマニュアル」などを作成するなかで、「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という意識が住民の間に芽生え、住宅の配置、外観への配慮、さらには通りを行き交う人に安らぎを与える花壇や生け垣づくりなどに発展していった。



●花のまちづくり

昭和 50 年の中学校緑化部から始まった花づくり運動は、育成会や老人会、自治会を通じて全町に広がり、町民グループによる花づくりが盛んに行われるようになった。

・オープンガーデン

平成 4 年には、北斎の鳳凰図をモチーフにした回遊式の花壇や観賞温室を備えた花の公園「フローラルガーデンおぶせ」が開園し、多くの人々が訪れるようになった。さらに平成 9 年には、花の育苗施設「おぶせフラワーセンター」を整備し、農家への花苗の提供による市場への出荷、販路開拓による花の産地化も進めている。

平成 12 年からは、個人の庭園を一般に公開し、来訪者との交流を楽しむ「オープンガーデン」がスタートした。住民と行政が協働によって運営するオープンガーデンは小布施町が全国で初めてであり、平成 18 年は 61 軒の家庭が参加している。

こうした住民と行政が一体となってまちづくりを進める小布施町には、全国各地から年間 130 万人が訪れている。このように、昔から文化志向の高い地域性に加え、歴史と文化の町に暮らすことの誇りがまちづくりの気運を高め、内外から高い評価を受けるに至ったのである。

●自立に向けた将来ビジョンの策定

平成 12 年頃から市町村合併問題が全国で問われるようになった。小布施町でも、町の未来をどうすべきかを住民の総意によって決めるため、市町村合併についてより多くの住民の方が話し合える場を数多く設けてきた。具体的には、広報での特集記事の掲載とともに、3 ヶ年に渡って地域毎に住民懇談会を開催し、情報の提供と町民意向の把握に努め、検討を重ねた。町民 1,000 人を対象に行った合併のアンケートでは「合併を進めるべきでない」が「進めるべきである」を大きく上回った。さらに 100 人の委員による市町村合併問題懇話会でも「自立に向けて進む」が多数を占め、町の将来を担う中学生との意見交換でも 8 割以上の生徒が「合併に反対」と回答、町議会からも「苦しくても合併せず、自立の道を歩むべきである」との報告書が町長に提出された。町ではこれを受けて「自立に向けた将来ビジョン」を策定、平成 16 年 2 月の「これからの自治をともに考えるシンポジウム」で発表し、小布施町の自立宣言とした。

自立に向けてあるべき姿は「町民一人ひとりがそれぞれの役割を担いながら、先人が築きあげてきた小布施町の歴史・文化・自然などをより一層豊かにし、次代に伝えていくことである」と将来ビジョンはまとめている。

●町民との協働によるまちづくり計画の策定

平成 17 年 1 月、4 期 16 年にわたりまちづくりを進めてきた唐沢彦三町長が勇退し、市村良三町長が就任した。市村町長は町政運営の基本方針で「小布施町の自立を将来にわたって確固たるものとし、後世に誇りうるまちづくりの礎となるよう真摯に取り組む」と述べ、まず町民との対話を第一の優先課題として取り組んだ。

折しも、平成 13 年に策定した第四次町総合計画・後期基本計画策定の年でもあり、より多くの町民参加による町民主体のまちづくりを進めようと自治会単位での住民懇談会を開催しました。3 ヶ月の間に 26 自治会で懇談会を開催、延べ 920 人の参加を得て、まちづくりに対する提言、要望、質疑等を受け、これからのまちづくりに向けた熱心な討論、懇談を行った。さらに公募町民約 150 人による「協働のまちづくり懇話会」を組織し、「自立」「健康と福祉」「住みよい環境」「教育と文化」「活力のある産業」の 5 つの部会で半年余の間に延べ 40 数回の会議を重ねました。「今、小布施町のために何を優先して行うべきか、町民一人ひとりは何ができるか」など、熱くまちづくりへの想いを語っていただき、将来に向けた意見交換を行う中で、後期計画への提言をいただいた。

そのほか、15歳以上の町民1,000人を対象としたアンケートの実施など、より多くの町民参加と町民主体の計画づくりを重点に置きながら計画づくりを進め、2回目の住民懇談会を開催し計画の原案を提示、意見を求め、さらに基本構想審議会での審議を経て平成18年3月、これから5カ年のまちづくりの指針となる後期計画を策定した。

時代の変革とともに計画のあり方にも大きな転換が求められている今、施策の重要性や緊急性の視点から、少ない財源を効率的に配分するとともに、今まで以上に町民のまちづくりへの理解と参加が不可欠である。この計画は、町民と行政が一緒になって考え、共に行動し、「協働」していかなければ、実現し得ないものである。しかし「いにしえ」から小布施人に連綿と受け継がれてきた郷土を愛する心と、過去数十年にわたり育まれてきた小布施流の協働のまちづくりの理念があれば、計画は実現できる。

●まちづくりの「第2ステージ」へ

自然と歴史風土に根ざし、地域の活力と個性を引き出しながら、民官一体のまちづくり・地域づくりを進めてきた小布施町の先駆的な取り組みと成果は、全国の自治体などから注目されています。しかし、そうした目に見える現象に注目するあまり、足元が疎かになってはいけない。小布施流のまちづくりをさらに発展させる新たな取り組みが始まっている。

○東京理科大学・小布施町まちづくり研究所の設立

そこに住む人だけでなく、訪れる人にも優しい小布施の景観づくりは、欧米のまちづくりの「真似事」ではなく、そこに住む人々の生活環境の「内側」から問題意識を高めていった成果である。その理念と手法をより確かなものとして成果を内外に問い、さらに日本全国へ、世界へ向けて発信していくための協働研究の場が創設された。

○町遺産・まち歩きワークショップ

まちづくり研究所の中心となる研究室の学生は、月1〜2週間滞在し、町へ出て研究活動を行います。町内に9千棟ある建物から景観要素を探るため町内の道を歩き建物調査を実施する学生に、ぶどうやりんごの差し入れを行い、学生を家に招いて食事をする町民も増え、交流も育まれてきた。

平成17年8月には小学生との「町遺産・まち歩き」ワークショップ、11月には研究室で活動報告の展示と、まち歩きワークショップの発表会、研究報告、シンポジウムが大勢の町民の参加の元で開催された。東京理科大学と小布施町の協働研究はまだ始まったばかりだが、さまざまなテーマで小布施のまちづくり研究に取り組んでいく。

●小布施ブランドの構築

全国でまちづくり活動の激化が予想される中で、自立を目指す小布施町には、独自性を持った自立した経済構造の構築が必要である。町では基幹産業である農業を中心に、それを製造業（農産物加工）とサービス業（販売・飲食）を結びつける六次産業を推進してきたが、従来の「農産物の付加価値と雇用を創出し、加工から販売まで生産者自らが行う」というコンセプトから、さらにもう一步前進して小布施の新たな農産物ブランドを強化したい、という関係者の想いがあった。そこで、小布施町振興公社が核となり、新たなブランド戦略への挑戦を始めていく。

まず、振興公社ブランド「小布施屋」による販売戦略である。商品パッケージやラベルなどのデザインを刷新、販売ブースのリニューアルに着手した。これにより小布施の農産物・商品のイメージアップを図り、販売ルートの拡大を狙います。味はもちろん、売り方、包装、店の構え、接待、挨拶など、一つ一つにこだわりを持たせないとブランドにはならない。さらに振興公社では、従来からの小布施特産品であるりんごなどの一つひとつの品質の確保のための取り組みを進めるのと同時に、新たな小布施ブランドの農産物とすべく市場価値の高い地域の伝統的な野菜に加え、新規の野菜の開拓、研究を進め、小布施独自の栽培・販売を行っていく予定である。

○小布施屋

隣接するフローラルガーデンおぶせには平成18年5月、洋食レストラン「小布施花屋」がオープンした。小布施花屋は、小布施産の採れたての新鮮な農作物や、新たに栽培する新規野菜を料理として提供する「食育」の発信の場でもある。小布施花屋の誕生をきっかけに、「食育」がコンセプトの、民間活力による良質な農村レストランなどが周辺部にも広がり、食育、地域づくり、経済効果の相乗作用、さらに、民泊と連携した交流産業の創出

の期待も高まっている。

●「協働のしくみ」を考える

後期計画の策定の際には、懇話会参加者から、住民と行政の協働を進めるためには、これから小布施のまちづくりをどう進めていくのか、そこに住民がどう携わっていくのか、より多くの住民が語り合い、お互いの情報を共有し連携していくための仕組みと、基本的なルールづくりが必要との提言をいただいた。後期計画でも、そのための場として「町民会議」の創設と「町民活動基本方針」の策定を計画に掲げています。全国の先進地の事例を調査研究しながら、小布施らしい独自性をもった「協働のしくみ」を、平成18年度から19年度にかけて検討していく。

小布施町は従来から、そこに住む人優先のまちづくりを、住民との協働で進めてきた。「協働」とは、あるべき姿の実現に向けて、それぞれの主体（住民、地域、団体、企業、行政など）が対等な立場で共通の目標に向けて協力し合うことではないか。これからの社会には、多様な担い手がそれぞれの役割を果たす新たな支え合いの仕組みの構築が必要不可欠である。また、それこそが自治本来の姿であると確信している。町民の誰もが、このまちに生まれてよかった、住んでいてよかったと実感できる、誇れるまちを創るために、「自立と協働のまち」の姿を確固たるものにしていきたいと思っている。

豊橋市

次に取り上げるのは、自分の住んでいる豊橋市である。自分が約20年間暮らしているが、気づかない点もあっただろう。

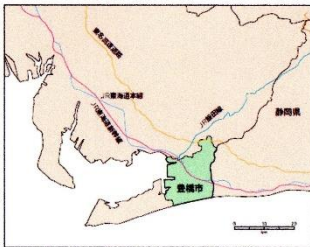
●都市計画マスタープラン

豊橋市都市計画マスタープランは、都市計画の基本的な方針を示すもので、上位計画である豊橋市総合計画や国・県の将来計画などを踏まえて、豊橋市における都市の将来像や土地利用を明らかにするとともに地域ごとのまちづくりの方針を定めることによって、本市における都市計画の総合的な指針としての役割を果たすものである。

「地方都市(コンパクトシティ)」の街づくりと活性化を考える

豊橋市都市計画マスタープラン(H18.3)より

東三河の中核都市



世界発信できる立地・太平洋に面した都市

徳川家康の三河統一時に吉田城を中心とした城下町の形成、吉田湊として栄える
(旧東海道宿場町・二川宿本陣は現存)
戦前は蚕糸と軍都で成長

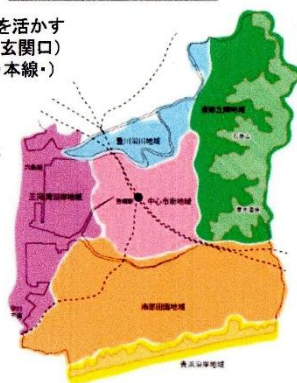
全国トップクラスの農業産出額を誇る産地
地場産業
「筆」「刺子」「帆前掛」

交通施設整備構想図

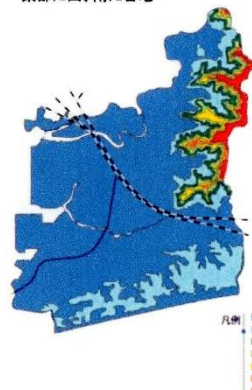


環境・景観形成の方針 地域区分図

広域交通網の社会性を活かす
(東三河地域における玄関口)
JR東海道線(新幹線・本線・)
JR飯田線
名古屋鉄道
豊橋鉄道
国道1号・23号・259号
三河湾(国際貿易港)



自然的条件を活かす
全般的に平坦地(標高50m以下)
東部に山、南に台地

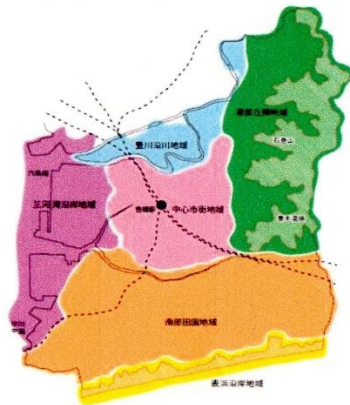


愛知建築士会 青年委員会 開発交流G

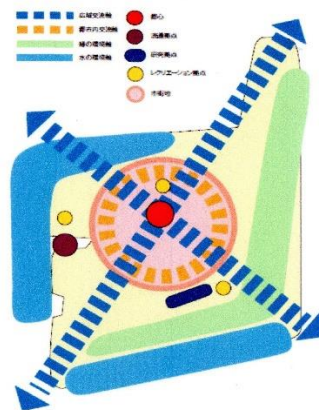
「地方都市(コンパクトシティ)」の街づくりと活性化を考える

豊橋市都市計画マスタープラン(H18.3)より

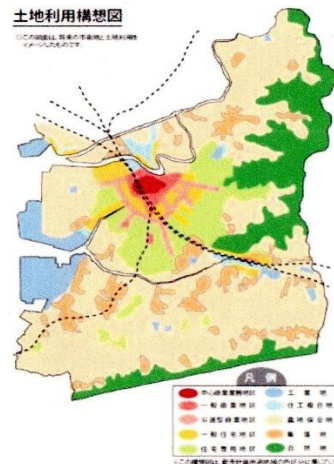
環境・景観形成の方針 地域区分図



将来都市構造イメージ



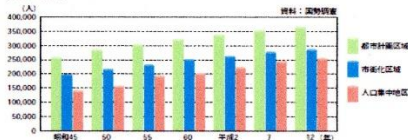
土地利用構想図



就業構造

第1次産業7%/第2次37.4%/第3次54.6%
愛知県3%/37.1%/59.9%

【人口の推移】



三河湾を中心とした国際物流・業務拠点
高生産農業の展開

愛知建築士会 青年委員会 開発交流G

●構成

- ・都市計画マスタープランは全体構想と地域別構想から構成されている。
- ・全体構想は、豊橋市の都市計画区域（行政区域全域）を対象として、都市づくりにおける課題を明らかにするとともにテーマと目標を掲げて、今後の都市整備の方針を定めるものである。
- ・地域別構想は、地域特性と地域活動の範囲から概ね2～3の中学校区を構成単位として、本市全域を9地域に区分し、地域ごとの将来目標とまちづくりの方針を定めるものである。

●都市づくりのテーマ

都市計画マスタープランは、都市空間の将来あるべき姿を描き出すものである。つまり、本市の総合計画で示されている将来都市像を具現化するために必要な、建設的分野における整備方針を明らかにするものといえることができる。

将来目指すべき都市空間とは何か。都市空間は様々な空間、居住空間や移動空間、業務空間などによって成り立っている。各々の都市空間は、多様な都市活動を支えるためのものであると同時に、生き生きとした都市活動があって初めて活かされ、魅力的なものとなる。

では、健全な都市活動は、何によるのか。都市活動は、つきつめれば個人の生活活動の集積である。誰もががのびのびと暮らせる「生活」、誰とでも集える「生活」、どこへでも行き来できる「生活」、そういったことのできる暮らしの基盤が整ってこそ生き生きとした「生

活」が営まれ、生き生きとした都市活動が行われるのである。

豊橋は突出した個性はないけれども、気候も人々も穏やかで安心して暮らせる住みやすいところだと言われている。そこで都市づくりのテーマを「生活」におく。暮らしやすいまちこそ誰もが望むまちの姿だと思うからである。

・将来都市像

[笑顔がつなぐ緑と人のまち・豊橋]



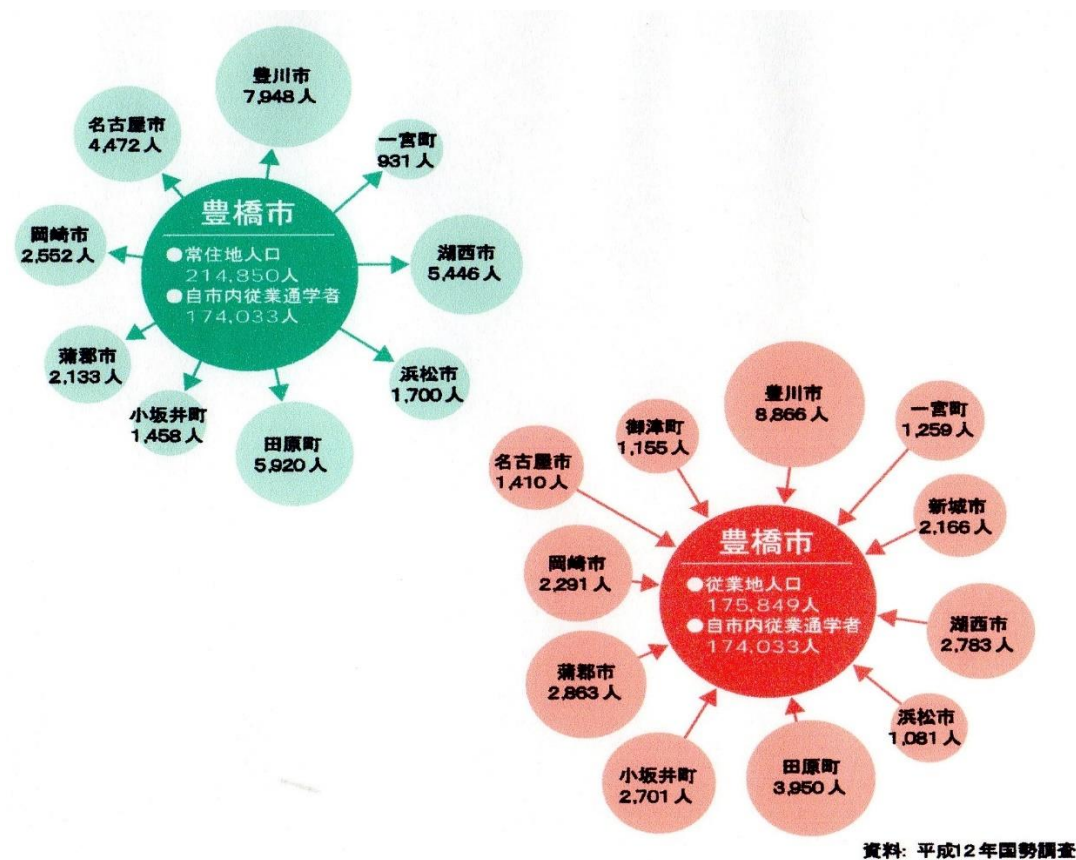
[都市づくりのテーマ]

誰もが生き生きと暮らせる生活都市の実現

◎豊橋市都市計画マスタープランは、誰もが暮らしたいと思うようなまちづくりの方針を定めるものである。

●人口の流出入からみた位置付け

本市における流出、流入の状況を見ると、自市内就業率は81.7%であり、基本的には「独自の都市圏」を形成している。広域的な都市との結び付きを見ると、流出、流入ともに豊川市との結び付きが強いといえる。さらに流出、流入を分けてみると、流出については豊川市の他、田原市、湖西市、名古屋市への流出が多くみられる。また流入についても、豊川市の他、田原市からの流入が多く、ほかに蒲都市、湖西市、小坂井町からの流入が多い状況である。こうしたことから、本市の圏域としては湖西市を含む周辺都市の他に西は名古屋市、東は浜松市にまで及んでいるといえる。



都市づくりの沿革

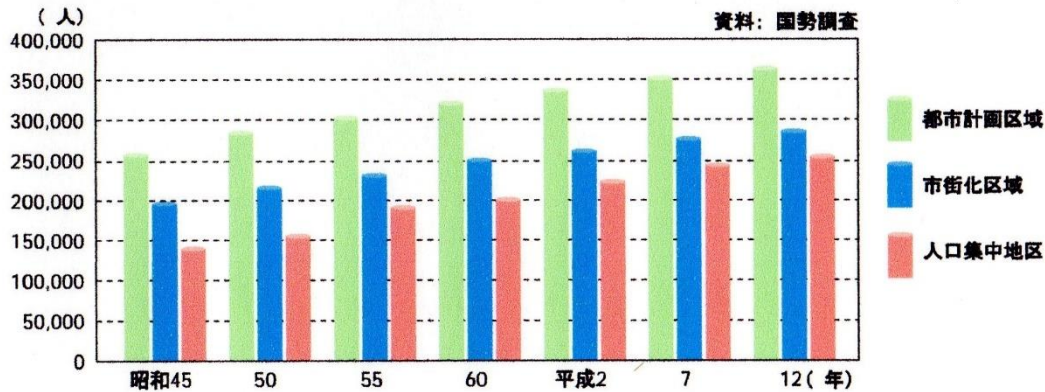
・都市形成の沿革

本市は、徳川家康の三河統一時に吉田城を中心とした城下町が形成され、江戸時代には豊川による水上交通の要として吉田湊が栄えた。明治に入り、東海道本線豊橋駅開設を機に近代都市への第一歩を踏み出し、戦前は蚕糸のまち、軍都として14万人を数える都市へと成長したが、太平洋戦争により市街地の大部分が焦土と化してしまった。戦後は、戦災復興土地区画整理事業により戦前をしのぐ都市づくりがなされ、その後、工・業整備特別地域、農業経済圏整備地域の指定、豊川用水の通水、国際貿易港としての豊橋港の開港（その後、三河港として開港）などにより産業の振興、都市基盤・生活基盤の整備が行われた。また、平成11年4月には「中核市」に指定され東三河地域の中核都市として躍進を続けている。

人口動向

本市の人口の推移は、ゆるやかではあるが、ほぼ直線的に増加しているといえる。増加の割合については、周辺の都市と比較して本市の増加率は高くなっている。また、市街化区域内についても、都市全体と同様に直線的な増加を示している。人口集中地区については、昭和55年にやや増加傾向を示していたが、全体的にはほぼ直線的な増加を示しているといえる。今後は少子化傾向や人口流動の動向、都市基盤整備などの情勢を踏まえると、人口の増加率は減少するものの、総人口については、近い将来までは引き続きゆるやかに伸びていくものと考えられる。

【人口の推移】



都市計画の目標

・都市づくりの基本理念

商業・業務・居住機能を強化し、歴史的な資源等を活かした個性的なまちづくりの展開や三河港周辺の流通・業務、交流機能の強化を図り、三遠南信地域における産業拠点地域の形成、そして、農業生産、観光・レクリエーション機能等を活かした、自然との共生や広域的な交流をテーマとした地域づくり

第4次豊橋市総合計画

・将来都市像：『笑顔がつながる緑と人のまち・豊橋』

この将来都市像を具体化するためのまちづくりの基本的方向を以下のように設定している。

- 環境にやさしく暮らすまちづくり（環境文化都市）：自然環境の保全、自然環境への負荷を少なくするライフスタイルの学習や実践、環境調和型産業の育成
- いきいきと生活を楽しむまちづくり（ゆとり生活都市）：次世代に向けた豊橋の文化を築くまちづくり、生涯学習や生涯健康づくり、多様なライフスタイルを選択し、能力を活かすことができるまちづくり
- 魅力と活力あふれるまちづくり（活力創造都市）：中心市街地の活性化、臨海部の整備、農業や中小企業の活性化

大学と連携したまちづくり

市民の多様なニーズに応えながら地域振興を図るため、大学の地域における知的拠点としての重要性がますます高まってきています。そこで、豊橋市では大学との連携を積極的に進め、大学内の知的資産や人材等を活用することにより、本市の政策推進、および人材育成や個性豊かで生き生きとしたまちづくりを推進している。

・大学との連携・協力に関する協定（包括協定）について

豊橋市は、市内各大学（豊橋技術科学大学、愛知大学、豊橋創造大学）との間で、産業振興、生涯学習、文化、福祉、まちづくりなどの多様な分野で相互に連携・協力し、地域社会の発展と人材の育成を図るための協定を締結している。

平成17年3月30日	豊橋技術科学大学との包括協定締結（4月1日発効） 豊橋技術科学大学との地域連絡協議会設置
平成17年7月11日	愛知大学との包括協定締結（同日発効） 愛知大学との地域連絡協議会設置
平成17年11月8日	大学と地域が連携したまちづくりワークショップ開催 （主催／都市再生本部・豊橋市・技科大・愛大・創造大）
平成18年 2月 8日	豊橋創造大学との包括協定締結（同日発効） 豊橋創造大学との地域連絡協議会設置

まとめ

飯田市と自分の住んでいる市等と比較してみても、まちづくりの構造はほとんど同様であるということがわかった。将来どのような「まち」にしたいのかという計画を立て、その土台を基に政策等を作り出してゆく。この場所にもそこにしかない文化や風土が必ずあり、それをいかに発展させることが出来るかということが課題である。いかにして、より多くの人を呼び込むことが出来るのか。大学や企業数の多い名古屋などの都会に人口が流出するばかりでは、そのこのまちの人口が減少する一方である。私も豊橋から毎日（名城大学へ）通学している。名古屋は、娯楽施設、大学の数の豊富さなど何もかも揃っており何不自由なく生活でき、また、新幹線や近鉄、名鉄などの鉄道が集中しておりどこにでもすぐに移動できる。だからといって、他の所も名古屋と同じようなことを行っても、そのまちの「個性」が無くなってしまう。自分も名古屋の魅力に圧倒されるが、豊橋にしかないものもある。都会に出て行った人が「自分のまちに帰りたい!」と思わせるような政策を行わなければならない。また、観光客にもアピールしなくてはならない。京都と言えば、金閣寺、広島と言ったら、厳島神社というように、飯田市と言ったら人形劇と結びつかなくてはならない。リニアによるストロー現象も懸念されるが、リニア内に広告を貼るなどPRをしていくことで、皆から注目される飯田市になるだろう。また、どこの市でも大学との連携を行っていることがわかった。大学生の豊富な知識が期待されている。実際に現地へ行き、体験することによって新たな発見があるだろう。私は、人形劇などの文化という視点からまちづくりを考えていきたい。飯田市民から直接お話を伺うなど、市民と寄り添い、飯田市のまちづくりに協力したい。

飯田市のフィールドスタディーを終えて（感想・コメント）

八月七日 地域自治と公民館活動【講師：長谷部三弘】

長谷部さんには、飯田市における公民館活動についてのお話を頂いた。まず、公民館の草創期にかえって考えるということであった。郷土を興すよこびや郷土に拓くゆかしさ、郷土に生きる楽しさを持たなくてはならない。興すとは、停滞しているものに、他から刺激して活発化させることで地域にある活動の素材を探し、宝物をみつけ出していくこと。ゆかしさとは、見たい、聞きたい、知りたい、好奇心を持つこと、こころ惹かれる、郷土に関心を持つこと。そして、生きる楽しさとは、他に自慢できるものを創りだすこと、郷土の人々が誇りになるものをつくりだすことであり、自分達の地域に心惹かれ、そこに来て楽しい所だと誇れるものでなくてはならない。飯田市へは、バングラデシュやコロンビア、ブーダンなどの7、8カ国の発展途上国から県知事クラスの人が勉強しに来ている。しかし、村町、市役所クラスの人が来なければ育たず、全体を見る目があっても具体的な政策が生まれない。公民館は、話合う場所であり、昼は子供、夜は大人が使用して共有し合っており、飯田の公民館から学ばなくてはならない。地域とは、お寺の鐘が聞こえる範囲、子どもが歩いて行ける範囲である。また、「宿題で泣かない夏休み」として、六年生を真ん中に置き、下級生が六年に質問し、それでも解らなければ、師匠に

聞き宿題の手助けを行う寺子屋も行っている。そして、風土車をうまく利用すること。風と土を結んで特製品が出来る。自分らで守っていき、市としてではなく、縦の糸を利用し、自分達でやってきたことを評価してもらうこと。仲間の会だから、地域を愛して、嫌な事はやらない。自分らが主体となり、縦糸で横糸を使っていることや風を上手く利用していることが解った。

都市と農村の関係（ワーキングホリデー）【講師：川手洋造】

ワーキングホリデーの目的は、農業や農村に関心を持ち真剣に農業をやりたい、就農を考えているが手探りで何も解らない方と繁忙期の手助けや後継者のほしい農家を結び、都市と農村住民双方が、お互いの足りないところを補い合うパートナーシップ事業である。しかし、受け入れる側は、お客様扱いをしてしまい、気を使ってしまう。女性は、料理のメニュー等を考えなくてはならず、ありのままではいかなかった。だが、農家は小さな会社で、家内労力である。若者を受け入れることで、戦力となり、消費者の立場からの意見も聞くことが出来るため女性もだんだんと慣れた。自給率を高めることで、外にお金を出さなくても良い。例えばマキストーブならば、灯油を買わなくても済むので、自分の家で取れたものを自分の家で消費することが可能となる。また、受け入れられた側も、農家によってそれぞれだが、嫌な仕事でも目先を変え、言われた通りではなくどのように能率を上げるかという試行錯誤の訓練や精神も鍛えることができて、一石二鳥である。農家は、売ってなんぼであるため、土いじりだけが農家の仕事ではないということも知ることが出来た。

農家との交流【民泊農家：野田充夫】

私の民泊した農家は、野田充夫氏のお宅であった。とても親しみやすい夫婦であった。山に囲まれており、涼しいため、エアコンはなく扇風機のみで生活出来ている。夕食は、外の方がより涼しいため、外で準備をした。カレースープにから揚げ、ゴーヤチャンプルであった。お食事中的の会話は、自己紹介などの世間話であった。名城大学は名古屋市にあるという話から、名古屋の話になった。農家さんの子供は、大分などに結婚して出て行った。充夫さんの知り合いの子供は、ネイルの仕事をやりて東京に進出していったという。名古屋に住んでいてどうか？と尋ねられた。名古屋に住んでいて、東京や大阪に行きたいと思う？かということである。農家さんの見解として、名古屋は東京や大阪に勝とうという競争力がないとおっしゃっていた。名古屋はもう発達しており、競争力はなくて独自に発達していると…。次に将来の職の話になり、公務員になりたいと話すと、皆そういうと言われた。安定を求めていると思ってしまうと。名古屋の河村たかしは、公務員の給料を減らすとか言っていたよねという話となった。もしも飯田で、年収20000万稼げたら来るか？と問われた。僕らは、飯田へ来ると返事した。農家の方は、飯田もそのくらいの政策をやらなくては、人が来ないとおっしゃっていた。ままた、お婆さんは、この中山間地域が好きだと言っていた。色々としやべり、後にキレイな夕焼けも沈み、中へ入った。お家の中では、お婆さんが、ウーロンハイや梅酒などを作ってくれた。お婆さんと僕らは、就職活動の話となり、スーツを着て面接するのはいかなものか…大学生なのだから私服で個性を表せば良いのにとお婆さんは話した。その他、たわいもない会話をし、楽しく農家さんと触れ合うことが出来た。朝は、7時50分に集合のため、6時半に起きるつもりだったが、7時に起きて、お婆さんに「もう起きなさい！」と大きな声で目覚めた。45分に出れば間に合うが、有名な田んぼを見るために少し早く出た。そして、お婆さんと握手してお別れし、マッキー（お婆さんの呼び名；牧野市長）の話を聞きに松尾公民館へ移動。

八月八日（土）地方創生に向けた人材サイクルの構築【講師：牧野光朗（飯田市長）】

飯田市長の牧野さんの講義は、皆と一緒に進めたいというのがモットーらしく、皆に色々質問したりしながら、進めていった。飯田の下伊那では、1945年が人口のピークであった。それは、戦時中の大空襲で田舎へ疎開してきた人がいたため、人口が増加したのである。後に高齢化率は、30%となり右肩下がりの時代になっている。飯田市は、戦時中の空襲は逃れたものの、昭和22年の火事で8割が消失してしまい、焼け野原となった。区画整理から始まり、公共の空間が出发点となり、東中学の生徒が、町中にりんご並木を作るのはどうかと提案した。しかし、りんご並木を作るにしても、りんごの苗を買い、肥料も必要で、町中の土なので土壌の改良や近隣の皆さんに同意（説明）もし、どのように管理を行うのかを決定しなくてはならない。また、りんごの育て方が解る技術者も必要である。お金（予算）も考えなくては行けない。一回目は、盗まれたため、収穫がほとんどできな

かった。フェンスで囲っても、視界や景観が悪くなってしまう。条例で盗むなどすることも簡単だが、大人が守り、自分達の地域を自分達で守るということ。持続可能な地域づくりのためには、人材サイクルが必要である。小中学校時代の頃は、地域と関わりがあり想像力も豊かであるが、高校時代からは、部活や塾などで地域の関わりも少なくなり、自分の地域の事を知らず（学ばず）に離れてしまうため、誇りが持てない。パートナーを得て、自分の育った所で子育てをしていくことが必要。大学との連携によって、信号機の交差点からラウンドアバウトが生み出された。警察の管轄だが、東日本大震災などの災害にも強く、すぐに整備してくれた。改めて、大学との連携の大切さを実感した。また、上村地区において、上村保育園の園児数が平成25年4月に1人となり、閉園やむなしという状況であったが、保育園の閉鎖が小学校の閉校にもつながり、地方消滅となり少子高齢化が進んでしまう。それを避けるために、能などの文化でPRし、バスで送るなどの子育て支援を行った。小水力発電によっても地域で稼げるようになり、その利益で自分達のために使える。皆が知恵を出し合い、共に作っていくことを学んだ。

人形劇を通じたまちづくり【講師：高松知子（飯田人形劇センター理事長）】

人形劇に関しては、私も関心を持っていたテーマである。人形劇とは、一言で「動き、モノ言う造形物」である。心象の形象化でもある。人に似せることで面白さがある。1978年に「人形劇カーニバル」が始まる。1999年に市民主導の「いいだ人形劇フェスタ」として新たに誕生する。「みる えんじる ささえる わたしがつくる トライアングルステージ」をコンセプトとして「市民主体」を掲げ17年となる。ワッペンとはみんなでつくるシンボルで、人形劇をみる人も、演じる人も、そしてスタッフとして働く人も、みんなが参加証ワッペンを購入し、身につけて参加する。そのワッペンは、一つ700円であるが、高いと文句を言う人もいた。皆で決めたことであり、それに見合うだけのお金である。安くしろと言う人には、どこを減らしたら良い？どの活動を減らしたら良い？と嘆かせる。でも、実際に人形劇に参加することで、理解される。そうして、皆がワッペンの意味を理解し、支え合っている。

経済自立度に向けた取組【講師：荒尾（産業経済部産業復興課） 上沼さんと同年】

飯田の主な産業は、航空宇宙産業や飯田資産材（林業）、市田柿、買い物困難者への支援（商業）等である。車のプリウスのセンサーの切り替えや医療や宇宙の望遠鏡、自動車などのレンズ、CITEZEN、防犯灯、ラーニングアクチュエーター（飛行機の足を出す時）などを製造。飯田の農産物は、果樹の生産が増加しており、高森の市田柿が有名である。生で食べると渋いため、干すのである。飯田の観光は、田植えやラフティング、酪農体験などである。体験旅行は、本物旅行でなくてはならず、乳しぼりは、朝早くか夕方に行うため、実際に泊まって体験していただく。自立に向けて、自分達のお金や産業でどれくらい稼いでいるか？ということ。経済自立度とは、儲けを分母として、製造、観光、林業などの産業の所得額で割り算出する。その目標値は、70.0%を目指しているが、まずは、2008年のリーマンショックの頃の50%くらいに到達していくことである。より高めるためには、行政と民間がスクラムを組んで、現場で事業を企画し、実行するという現場主義による地域産業復興が大事である。課としては、8つあるが、産業経済部産業復興課のみで残りは現場へ。職員は現場を肌で感じて、生きた感覚を磨くとともに、行政と民間の支援機関である経済団体等が今までのように、ばらばらに支援するのではなく、現場で一緒に行動し、総力をあげることが必要。

飯田りんごん参加

すぐに覚えることが出来て、何度か繰り返しているうちに自然と体に染みついた。数多くの団体が参加しており、とても驚いた。優勝は出来なかったが、それぞれの団体が衣装の工夫や踊りをキレイに踊っており、飯田りんごんを通して、皆がそれだけに集中して、優勝を目指す団結力というものを感じられた。また、他のチームに負けまいという競争力も伝わり、楽しく踊り、チームとの絆が深まる誇れる行事だなと実感した。

八月九日（日）おひさま進歩エネルギーの取組【講師：原亮弘】

10年前から設備や技術が安定していたのは太陽光であった。設備が整っていれば、リスクは低い。2004年2月「環境文化都市」を目指し、NPOを設立。エネルギーの使い方を考え、自分達で作らなくてはならない。食

とエネルギーの地産地消に取り組まなければならない。これは、震災の復興や心臓の移植の募金のようにリターンは、求めている。保育園には、おひさまの力で電気が生み出されている実感をしてもらうために、数字で表さず、保育士の手作業によって量で表すように5つのランプで表示している。曇っている時に5つ、快晴の時に0だったりしないように気を付けなくてはならない。保育園にも設置する目的は、温暖化防止の活動を広げ、小さい頃から節約する意識を持たせなくてはならない。エネルギーを節約することで、コスト削減にもつながる。2004年12月には、市民の出資によっておひさま進歩エネルギーが設立された。CO2削減こそがまちづくりであり、市民共同で発電していく。2009年の余剰電力買取制度によって、24円で売っている電気を、余った電気を48円で買わせることで、皆がより省エネに取り組むようになる。しかし、儲けとなるのは、10年後からで、貸し倒れリスクの可能性がある、お年寄りには普及しないが、3世代や4世代の家庭には使用されている。また、森林の2000、3000mからの落差を使って雪が流れで水力発電を行っている。燃料となる山や水を守り、国との関係ではなく、地域レベルで変えていかなくてはならない。

そば打ち体験【講師：仁科保】

普段食べているそば…。食べ物や僕らの身の回りにある、あらゆるものが完成するには、様々な工程を経て一つの物となっている。そば打ちを体験することで、そばとして仕上がるまでにどんな大変なことであるかという事を改めて実感した。よりおいしいそばを作るためには、当然、熟練が必要である。熟練を通した、技術者が極めて重要であり、そのような技術を僕らも引き継がなくてはならない。そばを始めとする色々な体験をすることで、モノの有難みを実感することもでき、技術も受け継がれる一歩となるだろう。

市民活動【講師：桑原利彦】

成人したら車を持ち、テレビやスマホは一人一台といったように、今日は、当たり前がスタンダードとなっている。ALWAYS三丁目の夕日のように、テレビは皆が皆買えずに、近所の人を買ったら、皆がそのテレビで見ていた。自分の生きがいがないとすれば、死ぬことしか考えない。自分がやっている商店ならば、好きにできるが、企業にはマニュアルや力関係があるが、その人達の考えを尊重すべきである。昔の音楽を聴くのは、レコードだった。端っこを持って、ゆっくり丁寧に扱い、管理の仕方まで考えなくてはならなかった。ジャケットも大きく、美術的でもあった。しかし、CDというものが登場し、ジャケットは小さくなり、レコードのような有難みや大切な感覚が次第に薄れていった。そして、また今の音楽はダイレクトで情報量が多く、スマホからダウンロードさえできるようになった。また、貧乏（金がない）所に生まれた人と金持ちの所に生まれた人では、お金に対する有難みも異なる。便利が過剰になってしまえば、本末転倒である。レコードとして手に入れるようなまちづくりをしていかなくてはならない。リンゴ並木においても、掃除は不便であるが、皆で行うことでまとまる。また、音楽のコンサートを行うとした時、場所を作る人は、飯田のためにと考えていても、中身を作る人（音楽を歌う人）は、自分の歌を聴いて欲しいと思っているかもしれない。この気持ちのすれ違いから思いを一つにしていなくてはならない。3曲演奏するならば、1曲はおじいさん、おばあさんのために。2曲は自分の聞いて欲しい歌を作れば、聞く姿勢を取ってくれる。人と人をどういう風にまとめるのが大切。世の中、白と黒という区別がダメにしており、全てグレーだと思わなければいけない。そして、誰もが知っている牛…。実際に農家民泊することで、牛は熱くてデカイということが体感できる。上下関係を無くすことが、良いとおっしゃっていた。2001年には、いいだWebができた。これを貨活用し飯田へ来てくれることを待っている。

中心市街地への取り組み【講師：三石秀樹】

三石さんと実際に外へ出かけてお話を聞くことで、より理解が深まった。りんご並木の所は、人だけの道かと思ったら車も通り、驚いた。焼けた建物も見ただけで、被害の大きさを実感することが出来た。

八月十日（月）発表・意見交換（公開）

私の班は、4班であった。発表した内容について述べる。私は、人形劇に関して発表した。支える側として700円のワッペン、高くても買わないだろうと予測していたが、実際に人形劇に参加することで、人形劇の楽しさを実感し、皆が理解して支え合っていることが解った。行政と市民、人形劇人の結束型ではなく、市民や劇団、行

政、団体、企業、地域組織の橋渡し型として、成り立っている。

また、食文化については、現状として、飯田は桃の栽培に適した環境で、市田柿が2006年に地域ブランドとして登録され、シカ肉は、駆除されたシカにおいて食べることができるということが挙げられる。しかし、桃は甘くて、身がつまっておいしいことや市田柿は、高級ドライフルーツや高級和菓子などとして、認知されつつあるが、まだ全国で知られているとは言えない、また、シカ肉栄養価も高く、ちゃんと加工すればおいしいことが知られていないことが問題である。解決策として、アピールしていくべきだと考える。具体的に、SNSでPRしTVでクッキング番組を行う、スーパーで実演販売、パッケージで産地を強調していくことが大切だろう。続いて、航空宇宙産業について。なぜ、航空宇宙産業かという、20年間先まで発展する見込みがあり、世界規模での需要が多数で、精密機械工場が飯田には集積しており、航空機産業が盛んな中京圏に近く、多品種、少量生産であるから。Aerospace IIDAでは、航空（民間・防衛）、宇宙の分野で実績を積んでいる。そして、3D CAD/CAM (CATIA) を駆使した精密複合加工技術のプロ集団で、AS/JISQ 9100認証によるQA体制を確立し、部品・コンポーネント一貫性を目指している。エアロスペース飯田の製品は、民間航空機や防衛、宇宙などである。現状の利益は、航空産業は10年間、赤字覚悟で生産しなければならないこと。共同生産しているため負担を分散している。将来性として、全国から注目され、顧客からも期待されているので、これから利益が生まれる。人材育成・人材誘導・企業支援に対する取り組みは、後継者不足の問題に対して、Uターンの促進や専門的な人材育成を行う。就職先の不足は、起業を促進し人材誘導確保に向けた取り組みを行う。雇用のミスマッチは、就職活動の支援をする。実現させるためには、地元高校生を対象にした教育事業に取り組む。地域人教育(飯田長姫高校) 結い(UI)ターンや一般を対象とした各分野での事業、農家民泊などを行う。ビジネスコンペティションの実施やアグリビジネス起業塾 結い(UI)ターンなどの地域産業を求める人材の確保。相談体制の充実のために、ジョブカフェいいだなどを促進していくべきである。次に、住民自治について。住民が自分たちの地域を自分たちで強めていくことで、公民館制度などがある。例えば千代保育園では、千代地区600世帯が1万円ずつ寄付+融資金で保育園を建造。Dayサービスの運営は、市からの補助金2億円を使い、住民が自身で運営している。飯田市の資源として、伝統と現代の融合や人形劇フェスタ、豊かな環境で育った特産品、将来性のある航空産業、飯田の発展につながる人材教育の実施、主体性の高い住民自治などである。多種多様な資源は、住民から愛されている飯田市であるということである。

全体を通して

8月7日から10日にかけて飯田市へ行った。実際に現地へ行くことでより理解が深まった。まず、駅の周辺を歩いてみても、ゴミ箱が少ないという点が気になった。コンビニ等も少なく、駅にもゴミ箱が設置されていなかったため、探すのに苦労した。だが、ゴミ箱がないということから、皆が自分のゴミを持ち帰るようになり、道端などにゴミはあまり落ちていなかった。不便かもしれないが、こうした所から美化にも取り組んでいるということがわかる。農家民泊をさせて頂いた家庭にいた時、ご主人がカブトムシを私達に見せてくれた。自然に飛んで来るのだそう。また、夏でも涼しいため、エアコン無しでも十分生活出来るようだ。奥さんは、大阪から引越してきて10年になるそうだが、この中山間地域が好きだとおっしゃっていた。そして、発展もしていなければ、過疎地というわけでもないその中間な所だとも言っていた。カブトムシも自然にやってくるほどなんて、自然が豊かな所だろうかと感じた。飯田市の気候が生活にも影響していることもわかった。エアコンがなければ、電気の節約にもなる。この家庭は、ソーラーパネルはなかったが、上手く気候を利用している。そして、飯田の行事である、いいだりんごんに参加した。りんごんの時は、大変多くの人でにぎわっていた。屋台もたくさん出ている、周辺のお店大勢のお客さんであふれていた。しかし、りんごんの当日には大勢の人がいたはずが、次の日から人が少なくなっていた。お祭りの時に、人が集まっても普段から人が来るように施すべきだろうと感じた。10日に帰る時も昼食を食べようと店を探していたが、月曜なのにシャッターが閉まっていた。もっと商店街の人も一人一人が店を呼び込もうという姿勢を持たなくてはダメだと思う。常に人が来るように企画を出すべきだろう。観光客が来くなるような、ツアーを企画するのも良いだろう。僕らが泊まった宿も山奥で、コンビニが近くにあったが、唯一の買い物できる所で、山奥に住んでいる人も買い物できるようなショッピングセンターを設立しても良いのではなかろうか。そして、最後にグループで発表を行ったが、井内先生に最後に意見を頂いた。追求が甘かったなと感じた。もっと学んだことをどのように今後の飯田につなげていくのかということを経験した。

来なかったのが残念に思う。飯田市の財政の状況など、きちんと裏付け調査などをきちんと行った上で、その報告がいかん、信ぴょう性があるかというところまで持っていかなければいけなかった。今後のプレゼンに、今回の発表が役立つことを願う。人形劇に関しては、電車の広告でアピールするなど、皆の目に留まる所に宣伝し、観光会社にももっと飯田の行事を取り入れたツアーを考えてもらうなどして、広めていく必要があるだろう。ほとんど講義だったので、そば打ち体験など、体験学習を増やしたら、より楽しく学べると思う。

飯田で学んだことをどのように自分の住んでいる市に役立てるか

飯田と同じような事は出来なくとも、学ぶべきところはきちんと取り入れるべきだろう。今や公民館は、何らかの行事がなければ使われていない。週に一度は、地域の人が集まり、地域に足りない所を意見交換していき、活性化させるべきだろう。そして徐々に回数を増やし、公民館と言えば、意見交換の場であるという意識を持たせていく。まず、公民館に対する意識を変えて、いつでも相談できる場所であると、住民から頼れる場所にならなくてはならない。そして、それぞれの市の特色を生かしたまちづくりを行っていくべきだろう。豊橋市は、新幹線が通っているが、ほとんどの人が通過していつてしまう。豊橋には、こだまとひかりが少ししか止まらない。せっかく新幹線が通っているのに、豊橋で降りてもらわなくては意味がない。新幹線内の広告や雑誌などで豊橋の魅力をアピールしたりするなどして、豊橋に寄ってみたい、行ってみたいと思わせるような事をしなくてはならない。飯田もリニアが通るが、通り過ぎてしまっは意味がないので、リニアの駅が出来る前から、メディアなどを使って大々的に注目させるべきだろう。豊橋出身の有名人は、スケート選手の鈴木明子さんや俳優の平田満や歌手の松平健や松井玲奈がいる。この有名人を使ってアピールしてもらうのも手立てだと思う。それなりに予算がかかるだろうが、成功した暁にはそれ以上の見返りとして返ってくる。色々な手立てを考えていくことが大切だ。きっと、自分の町のことを学んでいない人が大勢いると思うので、飯田市のように大学と連携してよその学生の視点から観てもらい、高校生への授業をしていくことも必要だと思う。自分の住んでいる所に誇りを一人一人が持たなくてはいけない。飯田のフィールドスタディーを通して、自分の住んでいる所との比較が出来た。それぞれ、良いところがある。その良さを取り入れることで、自分の市も、もっともっと良くなるだろう。飯田市の他にも身近な市と自分の市を比較していき、どの点が自分の住んでいる所に足りないのかをチェックして皆から誇られる市にならなくてはいけない。飯田市に学んだことを自分の中だけで終わらさないで、自分の市長にも提案していけるように、飯田市へフィールドスタディーに行く人は、自分の市の代表だと思って参加して、自分の市長などにも報告出来るような体制をも考えるべきだろう。また、市長ではなくとも自治会長などに飯田市への取り組みを報告することで、取り入れようと動いてくれるかもしれない。フィールドスタディーは終わったが、これからも引き続き、より深く豊橋と飯田の比較を行い、機会があれば豊橋市長の所へ出向き、飯田での学んだことを御報告し、今後の豊橋市をよりよくするために、一緒に市長へ協力したい。自分も市役所の一員となれるようにより一層努力し、今回学んだことを生かして、豊橋を活性化出来たらと思っている。

飯田市の産業政策について

平成27年7月31日

壁谷知希（かべやともき）

私のイメージでは長野県は、自然が多いイメージですが長野県の産業について調べてみると、物づくり、精密機械に特化していることが分かりました。その中でも特に有名なエプソンなどがなぜ長野県から発展していったのか興味を持ったため。

また、愛知県と長野県の産業の違い、例えば長野県特産の自然を生かした産業（時計など）についても詳しく調べたいと思ったため。

140321064 壁谷知希

興味を持った理由

長野県は、ものづくり王国。山岳に囲まれ、海に接しないという地勢状の不利を持ちながら、歴史の中を見ていくと、わが国の基幹産業（一般に一国経済の

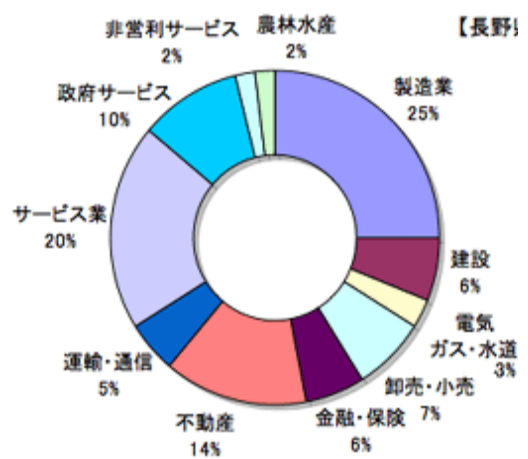
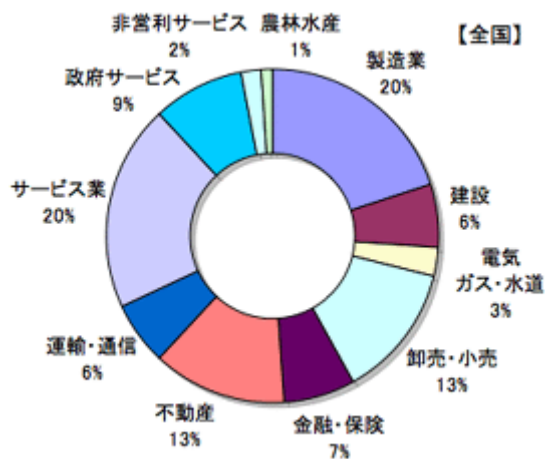
長野県の産業の特徴

発展の基礎をなす重要産業のことを言い、通常、鉄鋼業、電力などのエネルギー産業、機械工業、化学工業などをさし、鉄道、海運業などを含める場合もある）を支えるさまざまな製品を創りだし、国内はもとより世界のマーケットへ送り出している。

厳しい気候条件や自然の恵みをフルに活かし、知恵と工夫を振り絞って高い付加価値を与えてしまうのが、長野県のものづくりの特徴。

長野県は、「全国に比べて第二次産業の比率が高い」とよく言われている。

下記図はよく経済記事などで基準に使われる国内総生産(県内総生産)の数字が、どんな分野の経済活動によってもたらされているかを比率で表したもの。



長野県は、全国に比べ、明らかに「製造業」の比率が高いことが見てとれる。「サービス業」や「運輸・通信」「不動産」「建設」「電気・ガス・水道」といった生活インフラに関わる部分では殆どサイが見られないから、異なっているのは「卸売・小売」という商品流通業と「製造業」との対比である。つまり基本的に長野県は、「ものを売る県」ではなく「ものづくり」の県であるということ。

製造業の中身

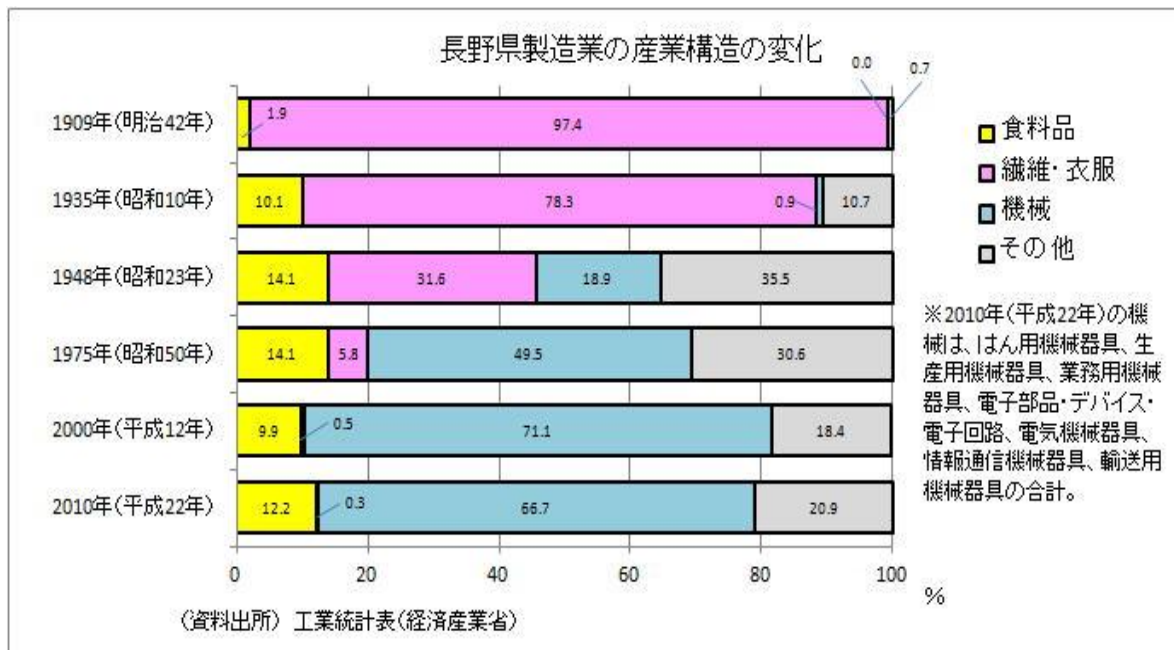
戦後 疎開工場の大部分は引揚げないし解散したが、これら工場の残した技術が地元根づいたうえ、元来の立地条件の良さ（1.良質・廉価な労働力、2.豊かな水資源、3.乾燥した空気）が認識され、諏訪・岡谷地区を中心にカメラ、腕時計、オルゴール等の精密機械工業が発達したほか、県内各地に電気・一般・輸送用機械関連の企業が定着した。

近年 その後もこれら機械工業は順調に発展していったが、昭和30年代～40年代前半の重化学工業全盛の時代には余り注目を浴びなかった。

しかし、昭和40年代後半の第一次石油危機以降、「重厚長大型産業」に代わり、「軽薄短小型産業」が全国的に急成長を示す過程で、長野県の電気・精密機械工業も技術革新の波に乗って飛躍的な発展を遂げ、機械工業先進県として注目を集めるようになった。とりわけ、時計、カメラ等の精密加工技術、電子技術を融合・発展させた分野、すなわちプリンター、パソコン、フロッピーディスクドライブ等の情報機器分野への進出が活発化した。

しかしながら、その後の円高の進展および東南アジア諸国の技術水準の向上を背景に、加工組立型の精密機械や電気機械を中心として、海外へ生産拠点を移す動きが活発化しており、県内の製造業は一段と技術・知識集約型へのシフトが進みつつある。

このように発展していった結果、長野県は情報通信機器器具出荷額が第一位であり、日本をリードする製品がうまれている。



長野県地域別産業

飯田市(南信地域)

地場産業 飯田市は本州のほぼ中央、長野県南部に位置し、多方面にアクセスしやすい地域です。各都市圏にユーザを抱える企業様にとっては、交通の利便性に恵まれた立地条件です。

また、当地域ではリニア中央新幹線中間駅の設置が決定しており、リニアが開通になると、品川～飯田間が40分、飯田～名古屋間が20分で結ばれます。また、浜松・豊橋方面への三遠南信自動車道(三河遠州南信)とあわせて大規模な交通ネットワークが飯田市を中心に整備されます。

豊かな自然と文化風土が、飯伊地場産業の基盤で、古くから三州・遠州・秋葉の三つの街道がこの地を通い、人や物の交流が活発に行われてきた。また、それに伴い、多様で個性豊かな文化が形づくられてきた。雅な街並みの残る山の都・飯田市と、それをとり囲む町や村には、今なお往時の形そのままの、貴重な文化財や民俗芸能を数多く見ることができる。飯田市では、文化財の保存・活用と、飯田市民の文化的向上を目的としています。また、有形、無形の文化財を分類し、その重要性を考慮して、文化財の保護のための経費の一部を公費で負担しています。

文化財として有名なのは人形劇があり300年前から人形浄瑠璃が伝えられた。今なお人形フェスタとして伝えられており、南信州の「人形の街」飯田市で開かれる日本最大の人形劇の祭典で、海外の人形劇関係者や人形劇ファンにも知られています。4日間に渡って400もの人形劇が催され、約4万人の人々が参加する大きなイベントに成長しています。



この豊かな自然と文化の息づく土地で、人々は長い時を重ね、自然とのやりとりを通し独自の生活技術を創り出してきた。それらの技術は時代と共に、地場産業として大きな実を結んできました。江戸時代には水引・染色・織物・漆器等の産業が発達した。戦前戦後には農家の副業が工業化された凍豆腐や漬物・菓子・皮革・メリヤス等が興り、他地域では見かけることができない数多くの地場産業が発達し、現在も地域経済を大きく支えている。

また、当地域は、日本の航空機産業の中心である中京圏に近く、中核となる企業も存在し、精密加工技術の集積地である。

それぞれの産業の特徴

水引

飯田の水引生産は、元禄時代に飯田藩主の殖産興業として始まり300年近い伝統を持ち、現在では全国の70%を生産しています。信州の清澄な自然と飯田地方の上品で繊細な感覚を活かし、心のこもった品として全国から厚い信頼を受けています。

家具・木工芸品

豊富な森林資源を背景に、明治時代には漆器製造が最盛期を迎えました。人間の優しい思いやりに溢れて手作りの良さ、自然の恵みである木材本来の美しさを生かし、消費者ニーズを確実に捉えた、付加価値の高い家具・木工芸品が造られています。

皮革

飯田の皮革は昭和20年頃から始まりました。欧米の最新鋭設備を積極的に導入して次々と新製品を開発し、クツ用・袋もの用・カバン用・椅子張り用と多様な皮製品に対応し、業界のトップに育っています。

紬・絹織物・染色

飯田紬は江戸時代製糸用繭を出荷した後の屑繭をつむいだ糸で織った地織紬で、昭和50年に伝統工芸品に指定されています。無地、色縞、緋柄模様は素朴な飯田紬の三大特長です。また、飯田地方の染色は寛政3年、今から200年前「鮫小紋」という微細型染めが始められ、養蚕景気による地元消費の拡大と共に発展しました。伝統工芸的な製造方法を継承し、本場京都にもない古い技法が残されています。

ニット・メリヤス

多品種少量生産に対応するため、全国に先駆けてコンピュータ編機の導入を行い、合理化・省力化を図り、消費者ニーズにマッチした製品づくりが行われています。

焼物

慶長14年（1609）頃から始まった焼物は、江戸時代から明治にかけて管内に10を超える窯が生まれ、日用雑器が焼かれていました。現在は天龍峽焼・阿南焼などがあります。

凍豆腐

豊富で良質な水と、冬の厳しい夜間気温。凍豆腐の生産は、この自然条件を活かし、約130年前の江戸期に、農家の副業として始まりました。その後たゆまぬ技術革新により、食品工業として確立し、現在では全国シェアの60%を生産しています。

航空宇宙産業クラスター

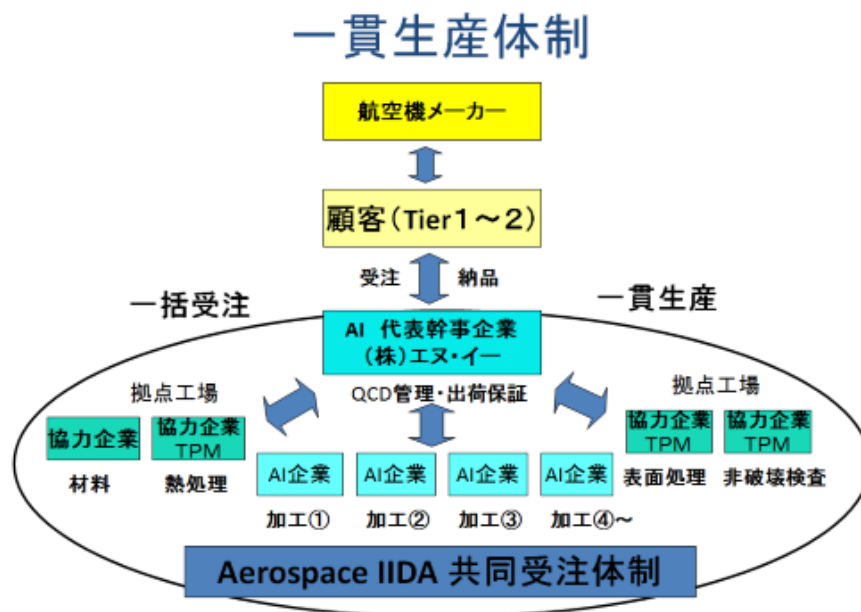
初めに産業クラスター計画とは、持続的なイノベーション創出のカギである「融合」を効果的に誘発するための基盤となる産学官金のネットワークを形成するとともに、イノベーション創出に必要な仕組みの構築、施策の

投入を重点的にを行い、地域における産業集積の質的転換を目指してきたもの。

(公財) 南信州・飯田産業センターは、今後成長が期待される航空機産業に着目し、「中京圏に近いという地の利」と「当地域に厚く集積している精密加工・電気電子技術の基盤」を活かして、平成18年5月より「飯田航空宇宙プロジェクト」に取り組んでいる。昨年は「アジアNO.1航空宇宙産業クラスター形成特区」に飯田市の航空宇宙部品製造に携わる中小企業21社が区域指定をうけた。このたび、航空宇宙産業クラスターを強固なものとするため、航空機産業における特殊工程技術（熱処理・表面処理・非破壊検査）機能を有する「航空宇宙産業クラスター拠点工場」を整備した。

地域内全体の実施可能な工程幅を広げ、地域内一貫生産体制を確立し、国内外の航空宇宙関連コンポーネントや部品メーカーからの受注獲得を目指す。コンポーネントとは部品あるいは成分を表し、機械を構成する部品のことで、その機械専用に製作されたものから汎用の機械要素などが含まれる。また、国際戦略総合特区「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」へ貢献し、強い地域産業の形成を目指す。

国内製造業の海外シフトと空洞化にあり、そうした長期的趨勢（傾向）に対して次世代産業を育成し、併せてそのための人材育成をはかることにあり、成長性と技術の先進性を兼ね備えている航空機産業がそこで注目されたようである。



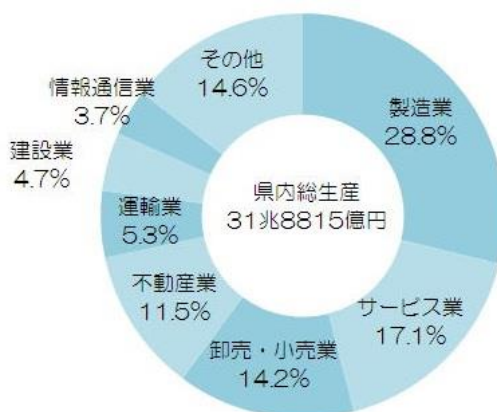
その中でも有名な企業があり、代表としては多摩川精機がある。多摩川精機では航空産業に使用される各種制御機器やMotortronics製品の設計製造を行っており、修理オーバーホールも含まれています。また一部民需品を含めた種々のジャイロ、さらに航空機等に搭載される燃料ポンプ、バルブセンサ、モータや電動アクチュエータ機器の製造もしております。宇宙関係機器では、ロケット・宇宙ステーション等に搭載される、回転センサ、駆動用モータ、アクチュエータ、各種機構部およびそれらの制御駆動装置などの製作をしております。これらの航空機、宇宙機器、船舶・防衛関連機器等に搭載される当社製品は技術の先端を自負すると同時にスーパークリーンルーム等の設備と環境下で徹底された品質・信頼性の管理のもとに生産を行っています。

愛知県の産業の特徴

自動車に代表される輸送機械が有名で、工業県のイメージが強い愛知県ですが、商業や農・水産業も盛んです。

本県の県内総生産は31兆8815億円で、東阪府に次いで全国第3位です。産業別では、業を始めとする第三次産業の割合が約3分

京都、大サービスの2を占約3分の全国に比ています。



飯田市の取り組み

飯田市の現状

国内産業の空洞化が深刻となる中、優れた技術をもつ中小企業が集積する当地域の製造業を今後も持続可能とするために、航空宇宙クラスターやネスクーイダの取組を先例とし、地域内外の連携・共同・統合により付加価値の高い産業集積づくりを進める必要がある。

地域経済活性化プログラム

経済の経済自立度を70%にするために産業界、市民、経済団体、行政がスクラムを組んで（地域ぐるみで）実施する事業を具体的に明示。

現場主義の徹底により現場の改善から生み出される効果的な施策を立案、実施

産業界、市民を交えた評価、点検を行い、毎年プログラムを見直す。（PDCAサイクル）

地域活性化プログラム2015

1 重点戦略・重点プロジェクト

(1) 人材誘導・人材育成・起業支援

実現方法

U・Iターン者を対象とした求人情報の収集・提供、人材バンク制度による就業のあっせん、就職ガイダンス開催による大学生等への地元企業就職支援等により、地域産業が求める人材の確保に取り組む。まち・ひと・しごと創生長期ビジョン・総合戦略に基づく施策や空き家バンク、地域おこし協力隊の活用など、他部署と連携した人材誘導策を検討する体制を構築する。などがある。

(2) 異産業連携による地域資源の活用・創造

実現方法

メディカルバイオクラスターの形成支援（専門コーディネーターやアドバイザーを活用し、医療機器系・食品系分科会の活動を支援する、信州メディカル振興会、長野県次世代ヘルスケア産業協議会（新規）への参加）

(3) ブランド力の向上、いいだファンの拡大

実現方法

首都圏との交流事業により都市間連携の基盤強化を進める。また、広域的な連携による観光情報の発信、誘客促進を進める。元善光寺御開帳や飯田お練りまつりに訪れた全国の観光客に対して積極的なPR活動を行い「飯田のファン」を増やしていく。ブランド力向上に向けてチャレンジ意欲のある事業者及びグループが行う事業を優先的に支援する。

(4) 連携・共同・統合による産業集積の創造

実現方法

航空宇宙産業クラスター形成を支援する、産業集積化を加速するために企業誘致活動を推進する、産業集積化に向けて事業環境を整備する。

(5) 新たな担い手による農地の有効活用と生産基盤の強化

実現方法

全国規模で開催されている新規就農相談フェア等を利用して飯田市の一体的な支援内容や地域の受入環境を広報し、市田柿生産等との複合経営を中心に、飯田での就農を提案する。国の助成要件に該当しない農業後継者に対して新たに研修助成を行い、後継者の就農を支援する。

(6) 持続可能な森林づくり

実現方法

飯田の木で家を建てるプロジェクト事業の工務店等へのPR活動や飯田市産材の魅力等の情報発信、公共建築物の建築や改築、公共土木工事において飯田市産材の利用に取り組む。森林組合等の計画による作業路網開設や高性能林業機械の導入を支援する。また、林道改良事業等による安全な通行確保を行う。

(7) 観光誘客推進の基盤づくり

実現方法

飯田市観光振興ビジョンを指針とした具体的施策を進めるため、関係する各主体について方向性と役割を明確

にしてビジョンを共有し、ロードマップを作成する。観光拠点のまちなか・天龍峡・遠山郷エリアにおける観光誘客の取組を強化するとともに、潜在する地域資源の掘り起こしや南アルプスユネスコエコパークのような貴重な観光資源を活用し、それらを周遊的につなげる一体的観光戦略に取り組む。

(8) 地域商業機能の維持強化

実現方法

買い物困難者及び高齢者に対応した移動販売「しあわせ市場配達便」事業を継続実施し、地域にあった事業モデルの構築を目指す。地域全体の消費拡大を目的として、商店街や地元小売店等が連携協力した「買い物が地域貢献につながる合同売出し」事業を実施する。

長野県ものづくり産業政策プラン

今後、成長が期待される「健康・医療」、「環境・エネルギー」、「次世代交通」等の分野や、拡大するアジア新興国市場等への展開を目指して、中長期的な視点から本県産業の目指すべき方向を示すとともに、具体的な方策に取り組む。

目指すべき方向

「未来を拓く次世代産業の創出～有望な分野・市場への展開を重点的に進める～」

- ・ 目指す分野：「健康・医療」、「環境・エネルギー」、「次世代交通」の3分野
- ・ 目指す市場：「アジア新興国市場」、「先進国の需要が拡大する市場」

航空宇宙プロジェクト

世界の航空機（ジェット機）需要は今後20年で2倍以上になると見込まれるなど、航空宇宙産業は今後大きな成長が期待されている産業である。その今後期待される航空機産業に着目し、地域の強みである中京圏に近い地の利と、精密加工・電気電子技術の基礎を活かして、2006年に「飯田宇宙航空プロジェクト」を設立した。

主なテーマは次のとおり。

- ・ 大手顧客窓口開拓・共同受注
- ・ 受注システム構築・受注体制構築
- ・ 生産技術・行程設計
- ・ 加工分担・生産管理
- ・ 品質保証 トレーサビリティ
- ・ コストダウン・採算管理
- ・ 納期管理

航空宇宙プロジェクト参画企業のうち10社が共同受注グループを作り、積極的に活動を展開している。国内外へ直接アプローチを行ない、見積もりや試作依頼も活発になってきている。ただし、本格受注までには長い時間を要している。

健康医療産業

健康長寿社会を支える新たな産業の創出を目指して産・学・官等の連携にとり「飯田メディカルバイオクラスター」を立ち上げ、「医療機器分科会」「食品分科会」による取り組みを行った。

「飯田メディカルバイオクラスター」とは

飯田下伊那地域の民間企業や行政、農業、医療機関、大学などの連携により、健康長寿社会を支える新たな地域産業の創造を目指す。

クラスター内には「食品系」と「医療機器系」の2つの分科会を設置。食品系では、企業とJAや森林組合、大学などとの連携により、飯田下伊那地域の農林水産資源を原料に食機能性の優れた食品や高齢者の食生活に適した地域独自システムの開発などを旨とする。一方医療機器系では、高齢化の進展により市場規模の成長が期待される医療機器について、企業、医師会、大学、行政などの連携により、新たな医療・福祉・介護機器、システムの開発を目指すという。

また食品産業についてはリニア時代を見据える中でのあるべき姿を具体的に考えるためのプロジェクト会議の設置に向けた準備を進め、水引業界や菓子業界では「飯田市産業親善大使」を活用した取り組みを行った。

「飯田市産業親善大使」とは

文化、芸能、スポーツ等のさまざまな分野で活躍されている飯田市の出身やゆかりのある方に、産業親善大使を委嘱している。

ご自身の活動のなかで市の産業や観光資源の魅力を広く紹介していただき、市の知名度やイメージアップを図るための活動を行っていただいている。

平成25年3月に始まり、現在2名の方をお願いしている。(小掠ケンイチさん、小沢亜貴子さん)

産業親善大使の活動分野をわかりやすくするため、愛称を使用することがある。現在は、飯田水引大使、市田柿大使、飯田菓子大使の愛称も使っている。

飯田フィールドスタディに参加して

平成27年8月12日

経済学部・経済学科140321064壁谷 知希

地域自治と公民館活動

行政は縦糸とし、地域は横糸として考え、独自の自治を目指している。

飯田市の町の特徴

1市2町と13村が合併した人口10.3万人、3.8万世帯の町、20の自治区と20の公民館を設置している。

また行政と自治区、公民館の連携による町づくりが特徴で行政は縦糸で施策のトップダウン、首長や職員の質が課題としてあげられる。住民は横糸で地域の課題をボトムアップ、自主的な実践の自治能力が課題である。公民館は社会教育の機関で住民の自治能力を育む「学びの場」とされている。

また地域の自立・個の自立・自給自足の奨めを目的としたひさかた風土舎が設立された。

ひさかた風土舎の実践活動

特産品づくり

雑穀の栽培と奨励（こきび、古代米、こんにやく等）

ワイン、清酒の企画（ブルーベリーワイン、清酒ひさかた）

学習文化

風土舎通信の発行（毎月一回400部発行）

自給自足学習会（風土舎村塾の開催）

交流活動

日本福祉大学

京都大学農学部（学生自治会との交流）

法政大学人間環境学部

JICA（国際協力機構）

内外のまち・むらづくりグループとの交流

などがあげられ、実際に話を聞いてみると、地域の人たちは自分たちのやりたいことだけをやっていると分かった。しかし地域の人の意見が行政の承諾を得るのはなかなか難しいということが分かった。

都市と農村の関係（ワーキングホリデー）

ワーキングホリデーの目的は農業や農村に関心を持ち真剣に農業をやりたい、就農を考えているが手探りで何も解らない方と繁忙期の手助けや後継者のほしい農家を結び、都市と農村住民双方がお互いの足りないところを補い合うパートナーシップ事業

事業創設の動機

都市住民の田舎志向や就農志向の高まりが顕著となり、相談に訪れる新規就農希望者が多数となってきたが、あこがれだけで実際の農業を勉強したこともない希望者が多く、また研修場所がないため苦慮していた。

農村においては担い手の不足が顕著となり兼業化や離農するケースが増加し、農業農村の存続や地域文化の継承が困難になりつつあった。

このような事から観光目的でない「田舎で暮らしたい」「農業をやりたい」といった層にターゲットを絞り都市から農業サポーターの募集を募った。

基本的な考え方

「労力補完」がメインであり、「観光」でないことを受入農家・参加者双方へ明確に情報発信する。

受入農家は農作業の手伝いのお礼として農家の生活や農業を教えることに心がける。

客として迎え入れるのではなく家族同様の普段の生活で滞在してもらう。

しかし話を聞くと、ワーキングホリデーを始めた最初の数年間は参加者へ気を遣ってしまいもう受け入れたくないとする農家もいた。

参加者は農作業と農村生活の体験、農業技術や就農、定住等について農家より直接話が聞けるというお互いメリットが出る、あくまで対等な関係づくりをめざす。

このため金銭の授受を発生させないこととしている。

農業振興効果

農業労働者の確保により適期作業の能率が上がり、生産性の向上と品質の向上が見られた。

高齢農業従事者のモチベーションアップにより農業経営の維持継続が図られた。

参加者と産直等の経済行為の発生が多くみられ農家の取得アップが図られている。

また定住促進効果や観光振興効果も得られている。

農家の人の話を実際に聞いてみて農家は労力としてだけでなく参加者（消費者）の意見を聞いて商品の企画をしていたり、参加者が飽きないように能率のいい方法で体験させていることが分かった。

地方創生に向けた人材サイクルの構築

飯田・下伊那では全国よりも早いペースで人口が減少している。そこでりんご並木や観光拠点の天竜峡など都市の再構築によって人口減少に対応しようとしている。

次に持続可能な地域づくりのために、持続可能な地域社会をつくる主体を「人」とし、将来を担う人材が確保できなければ、地域の持続はなしえないとしている。

そこで飯田の目指す都市像として

- ・帰ってこられる産業づくり
- ・帰ってきたいと考える人づくり
- ・住み続けたいと感じる地域づくり

をテーマとし実現には長期的な「人材サイクル」が必要とかがえている。

人材サイクルの現状として小学校から中学校、高校になるにつれて地域との関わりがうすくなり、また大学進学や就職によって約8割の人が一度地域を離れてしまう。これによって地域を担う人材が不足し地域の活力の低下につながり人材のサイクルが構築できない。

そこで高校卒業までに地域の愛着と誇りを持てる人材の育成を一貫して実施することが重要であると考えている。

地域による心豊かな人づくり

飯田では**地育力**（飯田の資源を活かして、飯田の価値と独自性に自信と誇りを持つ人を育む力）による心豊かな人づくりを目指している。

そこで地域を愛し、理解して、地域に貢献する人材育成の地域人教育に取り組んでいる。他にも地域に愛着と誇りを持ちながら、グローバルな視点で飯田を捉え、地域の将来ビジョンを描ける人材の育成を目指す高校生講座なども行っている。

市長の話を通して飯田市は他の地域よりも少子高齢化がすすんでおり、その問題をどう解決するかが一番の課

題である。また若者の地域離れも問題になっている。

人形劇を通じたまちづくり

なぜ飯田市で人形劇が盛んになっていったのか、理由とし

- ・飯田とその周辺、自然。産業・暮らし・気質・信仰など
- ・伝統芸能の宝庫であり、それが継承されてきたこと
- ・市民、劇人、行政 三位一体を旗印とし成長、終結、再

などがあげられる。

1978年に「人形劇カーニバル」がはじまり、「みる えん える」をコンセプトに「市民主体」を掲げ17年を迎えた。



て
の関係

起したこと

じる ささ

経済自立度向上に向けた取り組み

経済自立度とは「地域産業がもたらす波及所得額と、地域
る所得額を比較することにより、飯田・下伊那地域が地域産業により経済的に充足している度合いを示す指標の
こと。

飯田市の多種多様な産業

製造出 荷額	農業生 産額	林業生 産額	観光消 費額
3624億 円	248億円	5億円	112億円

(2012)

このように飯田市は**製造業**に特に突出していることがわかる。

飯田市では地域の経済自立度を70%にするため産業界、市民、経済団体、行政がスクラムを組んで（地域ぐるみで）実施する事業を具体的に明示している。

そこで現場主義の徹底により現場の改善から生み出される効果的な施策を立案、実施している。現場主義によって職員は現場を肌で感じ、生きた感覚を磨くとともに、行政と民間の支援機関である経済団体等が今までのようにバラバラに支援するのではなく、現場で一緒に行動し、能力を上げることが必要で、そのため合同事務所を設置している。

他にも飯田航空宇宙プロジェクトや市田柿のブランド化などに取り組んでいる。

地域活性化プログラム2015

人材誘導、人材育成、起業支援

地域資源の活用・創造

ブランド力の向上、飯田ファンの拡大

連携・共同・統合による産業集積の創造

新たな担い手による農地の有効活用と生産基盤の強化

持続可能な森林づくり

観光客推進の基盤づくり

地域商業機能の維持強化

おひさま進歩エネルギーの取り組み

2004年「環境文化都市」を目指す飯田市を中心にした地域南信州、**エネルギーの地産地消**で循環型社会構築のため、市民ができること市民でないとできないことがあるはずとNPOを設立した。

「南信州おひさまファンド」

出資者からのおひさまファンドへの出資金を元に、太陽光発電を中心とした自然エネルギー設備の導入事業及び自然エネル
ギー事業を行



う事業者への匿名組合出資を行い、事業の収益及び出資の分配金から、出資者に元本の還元と利益を還元する仕組み。

おひさま0円システムの仕組み

一般の家庭に0円で太陽光パネル設置

9年間月々定額の料金を支払う

10年目以降は譲渡となり、発電分すべて収入になる



飯田航空宇宙プロジェクトの取り組み

背景

中小企業の下請け型、加工工程外注型の体質により景気の波に左右されやすく、受注減、働く場の減少、人口の減少が起こった。

そこで新産業の育成や人口減に歯止めをかけるため飯田航空宇宙PJが設立されたり、飯田産業技術大学（バーチャル大学）が開講された。

なぜ航空宇宙産業なのか

高い技術へのチャレンジと波及効果、長期成長産業であること、飯田が精密機械工業の集積地であるなどがあげられる。

このPJでは地域内に企業間の協力風土を育て、主体性を持った共同受注体制を確立することや、工程外注から部品・ユニット一貫受注、航空宇宙産業の一角を担う核づくりの推進などを目指している。

特徴

共同受注体制の確立、一貫完結形の生産を目指す、高精度で複雑な加工を得意とする、小回りの利く集団、長年の実績を誇っている。

AerospaceIIDAの体制強化と実績作り、一貫生産の実績づくり、世界に通用する人材の育成などが課題としてあげられる。

中心市街地活性化の取り組み

再生への5つの視点

- 1生活と交流と仕事等の都市型機能を併せ持った安全で便利で快適な暮らしよい環境を目指す。
- 2中心市街地全体が一つの共同体であり、公共性を持った市民財産である。
- 3中心市街地の土地、建物の所有と利用に関して、生活者の立場に立ったより合理的な権利関係の調整、マネジメントを行う。
- 4土地建物の所有者及びそこに生活する人々の利益、商業地、生活地としてのポテンシャルを向上させる。
- 5住民の合意形成を大切にした市民主導の視点

飯田市フィールドスタディに参加して

今回フィールドスタディに参加してみて、飯田市には自分の地域には無い多くの取り組みがあると分かった。また自分の地域について知っているようで知らないことがたくさんあると思った。岡崎市もやはり少子高齢化の問題が課題としてあげられると思う。大学進学を機に若者が離れていってしまうので、飯田市のように地元に戻ってきたくするような取り組みを行わなければならない。そのためにはやはり自分の地域について知っておかなければいけないと思うので、小さい頃から自分の地域について知れる取り組み（小学校の授業に組み込む等）を活発的に行っていかなければいけない。

また市長の話にもあったように小中高校と年齢を重ねるにつれてやはり地域との交流が少なくなっている。自分自身、小学校のころは地域のお祭りに参加していたが中学からは参加していない。そのため、どの年齢層の人でも気軽に楽しめるような取り組みを行って若者と地域のつながりを強めていけたらいいと思う。

飯田市の産業政策について

140321034 井村将之

○選んだ理由

私が飯田市の産業を調べる前までは、なんとなくのイメージとして農業が一番さかんな産業で、その他には以前聞いたことがあった天竜峡などを訪れるような観光が産業のメインなのかなと考えていました。しかし、確かに市田柿や飯田市の風土を活かした農作物は作っていますが、それ以外にも、飯田市にしかできないようなたくさんの工業製品を作っていることを知りました。調べる前まではわからなかった飯田市の産業政策の意外性に興味を持ち、調べてみたいと思いました。

○産業政策とは

そもそも地域の産業政策とは、地域の自立的発展の基礎となる産業振興のための政策のことです。そして飯田市の産業政策とは、例えば「地域経済活性化プログラム」を策定し、政策をわかりやすくひとまとめにすることで、実践的な取り組みを行っています。さらに飯田市は先端技術を活用した地場産業の支援として、地場産業振興センターという地域資源を持っています。これは既存の地域企業の振興をはじめ、新企業立地に関しても大きい意味を持っています。今後は、企業立地に関する制度の活用、地場産業振興センターの活用、三遠南信地域における連携の強化を行うことで、さらなる飯田市の発展に貢献することができると考えられます。

○飯田市

飯田市の産業としては、2011年の時点で、製造品出荷額が3367億円、農業産出額が239億円、林業産出額が6億円、観光消費額が117億円でした。そして産業別就業者の割合は第一次産業が8.8%、第二次産業が30.5%、第三次産業が54.8%となっています。観光・サービスの次に農業ではなく製造業が盛んであることがわかります。

○地域活性化プログラム

飯田市は、少子高齢化が進む地域において、「若者が故郷へ帰ってこられる産業づくりをめざして」というコンセプトのもと、毎年「地域活性化プログラム」を策定しています。これは、行政、市民、事業者が一丸となり、飯田市の持つ地域資源や自治組織の確立に焦点を当て、1年毎に明確な支援を提案しているプログラムです。その目標としては、飯田市における地域経済の再生や文化経済自立都市の実現といったものが挙げられています。この経済自立とは、経済自立度という言葉で表され、経済自立度とは「地域住民の生活費および社会負担額を自分たち『地域産業の力』でどのくらい稼ぎだせているのか」ということを表したものです。つまり飯田市は、「地域活性化プログラム」を通して経済自立度を高めることを目標としており、そのために飯田市の持つ工業の技術力の高さや風土をいかして「若者が帰ってこられる産業づくり」を進めている。

○高速交通網を見据えて

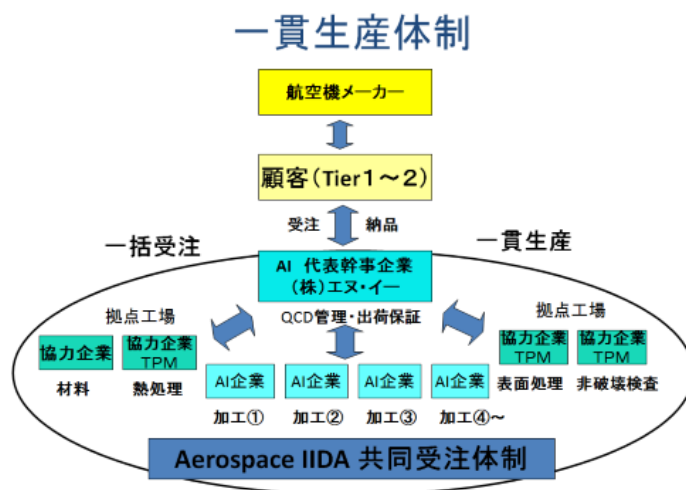
リニア中央新幹線と三遠南信自動車道の整備を見据えて、いろいろな視点から具体的な事業を進めている。たとえばモノづくりの視点では、地域に航空宇宙産業が集積していてサプライチェーンの一翼をになう一大製品供給地となっていることが目標となっていて、新エネルギーの視点では、地域の地形等をいかして自然エネルギーを有効活用したシステムを開発すること、住民主体の新エネルギー事業が育成されていることを目標としている。これから、今後注目されている航空宇宙産業を調べていく。

○航空宇宙産業・エアロスペース飯田の形成

世界の航空機(ジェット機)需要は今後 20 年で 2 倍以上になると見込まれるなど、航空宇宙産業は今後、大きな成長が期待される産業である。その今後期待される航空機産業に着目し、地域の強みである中京圏に近い地の利と、精密加工・電気電子技術の基盤を活かして、2006年に「飯田航空宇宙プロジェクト」を設立した。

昨年は、「アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」に、飯田市の航空宇宙部品製造に携わる中小企業 21 社が区域指定を受けた。さらに、特殊行程技術を担当する「航空宇宙産業クラスター拠点工場」が完成したことにより、これまでの機械加工に加え、特殊工程（熱処理・表面処理・非破壊検査）も可能となり、地域内一貫生産体制が確立され、内外からの受注体制が整った。この受注体制のことを「エアロスペース飯田」呼ぶ。「エアロスペース飯田」の目指す方向性は、

- 1 航空宇宙産業を担う新しい核づくを進める。
- 2 地域内に企業間の協力風土を醸成主体性をもった共同受注体制を確立す
- 3 地域内ユニット一貫体制の確立にり、顧客満足度の高い QCD を実現す
- 4 飯田地域に航空宇宙産業クラスタ



国
注
と
方

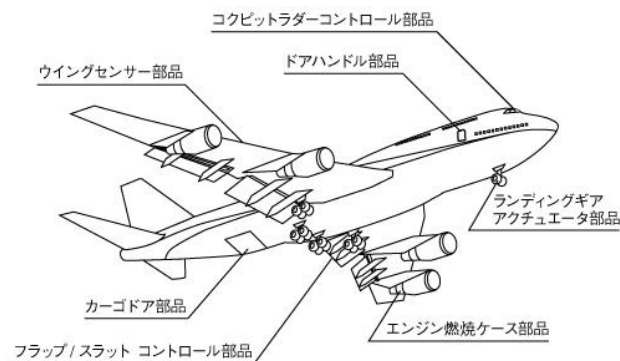
り

し、
る。
よ
る。
一

を形成し、地域の自立化と発展に寄与する。ことである。

○飯田航空宇宙プロジェクト

「飯田航空宇宙プロジェクト」は、航空産業向けの製品やサービスの品質と信頼性を高めることを目的とした、その商品の品質を証明する証である JIS Q 9100（品質マネジメントシステム規格）にほとんどの企業が認証され、高い技術力と品質が認められている上田市が進める航空宇宙プロジェクトのこと。での実績としては、右図の部分の部品には、市が作ったものが使われている。



宇宙を高保証としておで飯今飯田

求事

JISQ9100 とは、航空宇宙産業特有の要項を織り込んだ、日本で制定された世界標準の品質マネジメント規格のこと。JIS Q 9100 審査を行うことで、組織の価値向上に加えて、航空宇宙産業界の中で組織の存在をアピールでき、新たなビジネスチャンス獲得が期待できる。

愛知県(23社)	株式会社 松原製作所
	三菱重工業株式会社 名航地区防衛及び名古屋航空宇宙システム製作所
	三菱重工業株式会社 名誘地区防衛及び名古屋誘導推進システム製作所
	東洋航空電子株式会社
	輸送機工業株式会社
	名古屋品証研株式会社
	中部日本マルコ株式会社
	株式会社 フジワラ
	株式会社 三光製作所
	東明工業株式会社
	株式会社 小池製作所
	株式会社 エムエイチアイロジテック
	玉川工業株式会社
	株式会社 エアロ
	株式会社 瑞木製作所
	株式会社 MHIエアロスペースプロダクション
	株式会社 高木化学研究所 本社
	東明エンジニアリング株式会社
	中菱エンジニアリング株式会社 小牧事業部
	名古屋特殊鋼株式会社
	株式会社 中村鉄工所
	加賀産業株式会社
	三菱重工航空エンジン株式会社

長野県(9社)	多摩川精機株式会社 [本社・第一事業所・第二事業所・第三事業所]
	飯田精密株式会社
	株式会社 乾光精機製作所 本社工場 精密部品加工事業部
	有限会社 愛光電子
	株式会社 ティービーエム
	大和電機工業株式会社 工機事業部 航空宇宙関連部門
	多摩川エアロシステムズ株式会社 飯田事業所
	有限会社 野中製作所
	多摩川パーツマニュファクチャリング株式会社本社工場

図2 愛知・長野 JISQ9100 登録企業

上の表は、JISQ9100 を持っている愛知県と長野県の企業名と企業数である。比べてみると、かなり愛知

県の方が多いのがわかる。中部地域は、全国の 5 割の航空機部品を生産するなど、航空宇宙産業の集積が厚く、国産ジェット旅客機「MRJ(三菱リージョナルジェット)」の開発・生産や次世代旅客機 ボーイング 787 型機の増産、国産ロケット(H-IIA、H-IIB)の生産・開発などの動きもある。

さらに、宇宙航空研究開発機構(JAXA)と航空機産業の振興による地域のさらなる発展を目指す愛知県との間では、わが国における航空分野の科学技術の発展を目指し、航空分野に関する研究開発の推進、その成果の普及及び研究者・技術者の養成、愛知県飛行研究センター内に JAXA が設置した「名古屋空港飛行研究拠点」の活用等、愛知県と一層の連携協力の強化を図るため、「愛知県及び宇宙航空研究開発機構の航空分野に係る連携協力協定」を締結しました。

主な連携内容としては、

(1) 航空分野の研究開発を推進するため、愛知県飛行研究センター、JAXA 名古屋空港飛行研究拠点を活用する等、産学行政の連携を強化する。

(2) 愛知県及び JAXA の宇宙航空分野の取り組みを多くの皆様に理解、支援してもらうため、連携した情報発信活動を行っていく。

(3) 大学、企業等との共同研究や人材・情報交流により、将来の航空機産業を担う人材を育成する。

また「名古屋空港飛行研究拠点」とは、県営名古屋空港に隣接した、高速・高度の飛行実証を能とする実験用航空機「飛翔」を用いた研究開発の拠点であり、日本の飛行実験研究の中核を担施設のことである。3 機収容可能な格納庫や飛行実験をリアルタイムモニタできる飛行実験統室、各種機材の地上試験が行える試験準備室とった飛行実験研究に適した環境が整備されている。長野県もここまでではないものの、愛知県と同じく国から「アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定されている。この国際戦



名
可
発
う
行
制
い
い
と
ス
略

総合特区に指定されている区域では、規制の特例措置、税制・財政・金融上の支援措置が活用できる。最初「航空宇宙産業クラスター形成特区」に指定されていたのは日本の航空機・部品生産額の約 5 割を占めていて、国内最大の航空宇宙産業集積地の愛知・岐阜・三重だった。ここにさらなる産業の集積と機能強化をはかり、研究開発から設計・開発、飛行試験、製造・販売、保守管理までの一貫体制を構築し、アジアの新興国等をつきはなすような、一大集積地を形成するため、長野県・静岡県にまで新たに区域を拡大した。

○長野県 JISQ9100 登録企業



多摩川精機

資本金 1 億円

→飯田市近郊の山村出身である創業者、萩本博市(1906~1974)は、昭和の初めに上京し、当時の東京高等工業学校(現 東工大)で学び、同校を卒業後し、元(株)北辰電機製作所に入社した。

昭和13年、農業中心の郷里の発展はそのスイスにも似た自然環境からしても精密機械工業の導入振興しないことを萩本さんは確信し、独立、昭和17年飯田市に飯田工場を開設した。今でこそ農村の振興は工業化が一般的な施策として常識となっているが、当時萩本さんは時代を先取りする先見性とその実行力により日本における農村工業振興の第一人者となり、長野県南端の当地にメカトロ化の第一歩を踏み出している。その後自ら鍛えた優秀な若者を次々に独立させ、着々とその創業目的である当地方の工業振興を推進、多大な貢献をしました。これらの数多くの協力工場が多摩川精機の原動力となり、さらに伊那テクノバレー発展の大きな推進力となり現在に至っている。

トヨタ「プリウス」を代表とするハイブリッドカー搭載の角度センサは、世界シェア100%を維持している。(2010年度納入実績520万個)

また、電管用速度センサ、エレベータ用センサなどは世界トップシェアとなっている。

多摩川精機は創業以来、高精度センサ・モータ・ジャイロなど、その時代に必要とした制御装置の角度精度に挑み、商品として販売している。現在、2次元の位置・角度センサと3次元（空間）の位置・角速度センサを開発および製造する世界でも数少ないメーカーとなっていて、これら的高精度センサ技術を応用したモーションシステムは、さらに宇宙産業分野へと活躍の場を拡げている。つまり多摩川精機とはセンサー・モーター・航空・宇宙・防衛関連の製造を行う精密機器メーカーであり、戦前より続く航空宇宙防衛関連の精密機器や、モーター、センサーの生産、開発を行い、社員の3割以上が技術・開発職という技術者集団で、社員680人のうち約200人が技術者。

事業所内に研究所があり、工業用ロボット、ハイブリッドカー、新幹線、航空機、医療機器などの最先端技術分野で事業を展開している。

また、社会人大学院入学など技術者を養成している。

「創造的企業活動を通して、21世紀にふさわしい産業づくりをめざし、もって地域の経済振興に貢献する」という経営理念のもと、多摩川精機株式会社は、あらゆる企業活動の場で環境改善活動にも取り組んでいる。

1. 緑豊かな美しい自然環境に恵まれた地で活動する企業として、法規制及びその他の要求事項を遵守し、汚染の予防に努める。

2. 事業活動・商品・サービスにおける以下の活動において、目的・目標を設定して定期的に見直し、継続的な改善に取り組む。

- (1) 地球環境と調和する商品・サービスの提供
- (2) 資源・エネルギーの有効利用
- (3) サプライヤーと連帯した環境負荷の低減

3. 地域の責任ある企業として、他の企業・団体と連携し、革新的な取組に挑戦し続け、持続可能な地域づくりに貢献する。



飯田精密株式会社

→飯田精密株式会社は、航空・宇宙分野、分析・医療分野、半導体・液晶分野等に高精度機械加工部品から、完成品まで幅広く生産している。生産技術と製造技術の両輪を持ったテクノロジーはひとつひとつの高度な技術が結びつき相乗的に発展し、更に広く伸びや

かに成長している。

主に精密機械加工を中心に、組み立てまでトータル生産していて、精密板金や処理外注をかかえている。また、小ロット多品生産をしています。特殊金属（モリブデン・タングステン・インコネルなど）の加工も得意としている。加工部品は、独創性を生かし、信頼できる確かな製品を提供している。さらに優れた設備と長い経験から、高精度部品を確かな品質で供給して、試作や多品種少量生産から量産まで、小物から大物、2D・3Dと幅広いニーズに応えることができる。アルミ・ジュラルミン・ステンレス・チタン・タングステン・マグネシウム・樹脂と、あらゆる素材からミクロンオーダーの製品を創作している。

飯田精密株式会社でも、環境に対しての取り組み目標を設定している。

1. 廃棄物の削減、省資源、省エネルギーの推進

コストの削減及び生産効率の向上並びに納期遵守

2. グリーン調達の推進

顧客要求事項の遵守（環境負荷物質（環境影響物質）管理）

3. 環境保全活動の推進

地域環境保全活動の実施、労働安全衛生活動の実施、環境教育・啓発活動の実施



乾光精機製作所

設立 1961年8月20日

資本金 1,000万円

→乾光精機は、切削を得意としていて、これは部品の形状をつくりこむ上でもっとも金属劣化が少ない技術のこと。高い品質の素材特性をそのまま活かし部品化することができる。

この分野で高い評価を受けている部品加工メーカー。先新の加工機器の導入と、人の持つ技術の可能性によって、産業社会が求めるあらゆるニーズに応えることができる。プレスや鋳造からの変更、あるいは不可能と思える形状のオーダーなど、幅広く対応している。さらに、6つの最新プラントを保有している。このため、生産規模などによってそれぞれが特化した技術を発揮し、幅広いオーダーに応えることができている。さらにこれら先端マシンの精度をさらに向上させる原動力となるのがスタッフのスキルアップであり、進化し続ける技術の習得に努め、分野技術の熟練化を図っている。

さらに乾光精機が手がける実装部品は、航空機器をはじめ、とくにその形状が特殊なもの、あるいは精度要求が厳しいものが特長としてある。この技術を量産化するノウハウも保有し、実にさまざまな分野へ部品供給している。



有限会社愛光電子

設立 1971年（昭和46年）9月

従業員数 47名

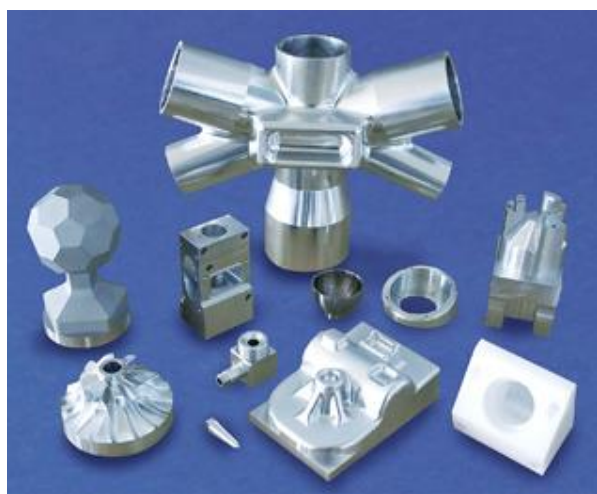
→1971年（昭和46年）9月多摩川精機株式会社の協

力会社として創業以来、電気・電子ユニットの配線、実装を担い、航空・宇宙、鉄道・自動車・輸送機器そして民需産業機器業界で、成長を続けている。この原動力は、多摩川精機株式会社の協力会社として様々な経験と改善で培った製造力をベースに、顧客の変化・要請に素早く対応し、それにフィットした組織生産体制を形成できる柔軟で機動力の富んだ社風だからである。また愛光電子は、多摩川精機株式会社協力会社として、そして JISQ9100 の認証を基盤に、今後ますます多様化する顧客のニーズに応えられる製造力、組織生産体制創りを求め続け、顧客に貢献できる企業活動を行っている。社屋から南アルプスが一望できる、環境のよい地域に立地していて、この環境を次世代に引き継ぐため、南信州いいむす21の一員として環境にやさしい企業であり続ける努力をしている。愛光電子はこれからの新たな需要構造の変化に対応し多様な試みと社員ひとりひとりの技術・技能研鑽で顧客に対する満足度を高め続けることを目標としている。さらに南信州環境文化都市飯田で事業する企業として、次の事項に優先的にとりくみ、環境負担の低減に努めている。

- 資源の有限性を認識する
- 廃棄物の削減に取り組む
- 有害物質の適正管理と使用、発散の抑制に努める
- 社員の環境意識の高揚に努める

株式会社ティービーエム

→各種タービン用ブレードの専門メーカーとして、このブレードを40年以上にわたって生産し続けている国内のトップメーカー。航空機器部品としては、昭和63年以降石川島汎用機械(株)で生産するV2500ジェットエンジン用ブレード及びアルミ鋳物部品の仕上げ作業を担当している。このエンジンは、世界5ヶ国(日本、イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリア)共同開発による150人~250人乗りクラスの民間航空機用ターボファンジェットエンジンで、多くの優れた性能上の特長を持ち、すでに多数がエアバス等に搭載されて世界の空で活躍しているが、中でもブレードはジェットエンジンの最重要部品であり、品質の維持向上には最大の注意をはらっている。



大和電機株式会社

資本金 9,000 万円

創 設 1944 年 4 月 27 日

→強み

- ・豊富な機械種類と台数の所有により少量ロット品の短納期対応
- ・金属（アルミ、鉄、SUS系全般、チタン）、各種樹脂等多様な材料への加工対応
- ・5軸加工機による、多面体構造品への対応
- ・諏訪地方の強みを活かし、近隣メーカーとの共同によ

り、多様な加工・処理に対応（レーザー、板金、印刷、熱処理、研磨、塗装等）

- ・表面処理メーカーの強みを活かし、各種表面処理に対応
- ・設計からの部品製作も対応
- ・めっきメーカーとして従来から精密樹脂加工を行ってきた強みを活かし、樹脂系加工及び治工具製作も受ける

2015 年度環境方針

◇エネルギー資源の使用量の削減【2016 年に 2013 年度実績の 1.0%減】 減

◇めっき工程の水使用量の維持

◇特別管理産業廃棄物の排出量の削減／維持

◇産業廃棄物の排出量の削減【2016 年に 2013 年度実績の 5.5%減】

◇事業系一般廃棄物の削減【2016 年に 2013 年度実績の 14.2%減】

◇廃棄物のリサイクル化の推進

- ・環境に与える負荷が最小限となるよう危機管理・安全面項目の予防処置および対応方法を定め訓練を実施する

- ・環境改善を実施し維持する為の環境教育を各サイトで全従業員に実施し、本方針の理解と環境に関する意識向上を推進

TAS

本社・工場移転のご案内



Small, but Excellent!
小さくても輝く企業

多摩川エアロシステムズ 株式会社
Tamagawa Aero Systems Co., Ltd.



多摩川エアロシステムズ株式会社

(多摩川精機株式会社の子会社)

→1952 年に航空事業の再開に合わせて航空機の電装品を修理したのが始まり。創業から 60 年以上にわたり、国内外のエアライン・防衛省・全国の官公庁・ゼネラルアビエーション等に航空機電装品の修理を提供している。その実績を生かし、販売から修理、製造に至るまで顧客のニーズに応えるべく航空電装品を幅広く取り扱っている。

有限会社 野中製作所

設立 1978 年

資本金 300 万円

- ・事業内容は主に、航空宇宙関係部品の製造加工、各種設備関係部品の製造加工
- ・高精度複合加工、及び、難削材加工、多品種少量生産に対応している

多摩川パーツマニュファクチャリング株式会社

設立 2013 年 11 月 21 日

資本金 800 万円

- ・業務としては、部品加工（機械加工、表面処理、熱処理および試験等）が専門
- ・多摩川精機が 2013 年に設立した、多摩川精機の子会社

～まとめ～

- ・ JISQ9100 に登録されるのは簡単ではなく、認められた企業しか認証されない。
- ・ 長野県には 9 つの JISQ9100 を持った企業がある。
- ・ 長野県の航空宇宙産業の中心的存在は多摩川精機で、JISQ9100 に登録されている企業の中には多摩川精機の子会社がいくつか入っている。
- ・ 愛知県にはまだかなわないが、長野県も「アジア No. 1 航空宇宙産業クラスター形成特区」に入ってきている。
- ・ 愛知県には愛知県の、長野県には長野県の風土の特徴を生かし、航空機部品を生産している。
- ・ 長野県のいずれの企業も、環境対策を行っているという特徴がある。愛知県の企業たちは自分たちの生産技術の特徴をたくさん主張しているが、長野県の企業は必ず環境に対して配慮していることを主張している。

社会フィールドワーク まとめレポート

・地域自治と公民館活動

→飯田市には公民館活動という活動があり、全国の公民館より大きな役割を担っている。飯田市の特徴としては、分散行政施設と行政、自治区、公民館の三位一体まちづくりに、「ムトス飯田」という、住民一人一人の意思が反映されやすいまちづくりを行っている。行政は縦糸と考え、地域は横糸として考えるとしている。そのためその糸はどちらも柔軟である必要があるという飯田市の考えで、町のたくさんのことに柔軟に対応している。公民館活動もその一つで、公民館を教育の機関という位置づけにしている。公民館とは、社会教育の機関で住民の自治能力を育む学びの場であるとしている。

→話を聞いて思ったことは、住民の方一人ひとりが自分の街をよりよくしようと努力していて、自分の住んでいる地域に誇りを持っている人が多い、ということでした。

・都市と農村の関係（ワーキングホリデー）

→この授業を受けるまで、私たちが行った農家民泊とワーキングホリデーの違いがよくわかっていなかった。農家民泊は、農家の家に泊まることで実際に生活を体験してみることを目的としている。ワーキングホリデーとは、泊まるだけではなく、農家の仕事などを体験することで農家の方々がどのように生計を立てるために仕事しているのかを体験することができる。ワーキングホリデーの長所としては、農家の方はご飯や寝る場所を提供する代わりに、若い働き手を確保することが出来る。学生としては農家に興味のある場合、実際の農家の方の意見や話を聞くことができるため、貴重な体験ができるという利点がある。短所としては、農家側は受け入れを始めた最初のころは学生に気を使ってしまうことが多々あり、3～4 日受け入れるだけで、かなり精神的にも体力的にも疲れてしまう傾向にあるらしい。気を使わなくなるためには多少の馴れが必要である。

・地方創生に向けた人材サイクルの構築

→飯田市には 4 年制大学がなく、高校を卒業した学生のほとんどが他県へ出て行ってしまう。そうして、そのでていった土地で就職しそのまま飯田市へは帰ってこなくなるという人口流出が課題になっている。飯田市下伊那地域では全国よりも速いペースで人口が減少しており、1945 年が人口の最も多かったピークである。これは戦争による疎開者が多かったからである。さらに戦争による影響はほかにもあり、戦時中更地になってしまった場所に道路を造りリング並木をつくった。リング

並木は今飯田市の中心的な場所になっている。道路の脇にリンゴの木を植えることは中学生が提案し、市が協力して完成させた。

・人形劇を通じたまちづくり

→人形劇とは、一言でいうと「動き、モノいう造形物」とされている。講義の間にアンケートを取ったところ、ほとんどの人が生で人形劇を見たことがなく、まだ飯田市が人形劇で有名な町であることは、全国的には浸透していないと感じた。「いいだ人形劇フェスタ」とは世界各国の人形劇を披露するチームが飯田市に集結し、飯田市のいろいろな場所でたくさんの種類の人形劇を披露する、というものである。市役所の中にも人形劇で使われる人形が展示してあり、それだけでも、飯田市にとって人形劇がどれだけ大きな存在か知ることができた。

・選択（産業）経済自立度向上に向けた取り組み

→飯田市の下伊那地域の自立へ向けて、観光業や産業などをより活性化させていく必要がある。飯田市では産業の中心に航空機部品を置き、ほかには農業、精密機械、時計などがある。例えば産業の面では、トヨタのプリウスのモーターを造っていたり、LED 防犯灯、衛星の部品から航空機の部品まで造っている。航空機部品とはドアハンドルであったり飛行機の足を出すときに使う部品である。時計とは CITIZEN などの時計部品である。飯田の農産物としては市田柿をはじめ、桃、梨、リンゴ、ブドウなど一年を通してたくさんの農産物がとれる。これを中心にして経済自立度を高めようとしている。

・おひさま進歩エネルギーの取り組み

→「環境文化都市」を目指す飯田市を中心とした地域南信州で、エネルギーの地産地消で循環型社会構築のため、市民ができること、市民でないとできないことがあるはずと NPO（NPO 法人南信州おひさま進歩）を設立。第一号のおひさま発電所を飯田市内の明星保育園に設置し、子供たちにとって太陽光発電を身近なものにした。そのせいなのか、私が飯田市を移動している最中に感じたことがあった。それは一般の家庭の屋根を見てみると、太陽光発電を設置している家が多いことだった。もちろん名古屋市内にも太陽光発電をしている家庭はあるだろうし、世帯数が多い分飯田市よりも太陽光の設置数は多いかもしれないが、それでも飯田市の人たちは、確実に名古屋市内の人よりも太陽光発電がいかに重要であるか知っているだろうなと思った。

・選択（産業）「伊那谷の魅力と地域活性化」～航空機産業への取り組み～

→飯田市は飯田航空宇宙産業クラスター形成を目指して、航空宇宙プロジェクトへ取り組んでいる。これは若者の夢を育て、働く場を作り出すことと地域を活性化することで人口減少へ歯止めをかける狙いがある。さらにこの航空宇宙産業の魅力としては、20 年先の仕事まで見通せると言われていて、長期成長率が一年で 5%と、非常に将来に期待することができる産業と考えられている。さらに長野県という地域には優位性がある。精密機械工業の集積地である飯田市にはオムロン・TDK・多摩川精機の工場があり、精密機械の技術に関しては高いレベルを誇っている。さらに日本の航空宇宙産業の中心地である中京圏に近いことで、愛知県などから連携を取りやすいこともプラスとなっている。しかしいくら有利な点があっても、一社の力では限界がある。多摩川精機のような大規模の企業であろうと、一社だけで全ての航空機部品を作り出すことは負担が大きすぎる。そこで、今まで地域内の企業間で敵対していたライバル関係をやめ、お互いに協力しあう協力風土を育て、主体性を持った共同受注体制の確立を目指した。

・中心市街地活性化の取り組み

→飯田市のシンボルでもあるリンゴ並木は、戦争によって更地になってしまった街を復興しようと、地元の人たちが美しい街の復興を願い、40 本のリンゴの木を植えた。さらに講義が終わってから町に

出て実際に中心市街地を見て回ったときに、リンゴ並木にあった三連蔵も、市が買い取って残している事実を知った。

更地になってしまった土地を直しながらも、戦争によって焼けてしまった三連蔵を守るような行動をした飯田市に少し不思議だと思った。

・レポート発表・意見交換

→みんなの発表を聞いていて思ったのは、飯田市をよくするような案はたくさん出ていたが、自分の生活に学んだことをどう生かしていくのか考えた班は少なかったと思う。先生の指摘で気づかされたし、名古屋市に足りなくて飯田市に足りていることはたくさんあると思う。例えば公民館でも名古屋市にはたくさんあるが、実際に活用されている地域はほとんどないだろう。これは地域の人自分たち地域のことは行政まかせで、飯田市のように自分たちで自分たちの町をよりよくしようという意識が少ないことの表れかもしれないと思った。まず名古屋を変えるためには、住民の意識から変える必要があるし、飯田の「ムトス飯田」の精神を見習う必要があることを、今回のフィールドスタディで学んだ。

そしてその後も、自分の地域のことを考え続けることが飯田でお世話になった人に対する恩返しだと思う。

町おこし 加藤雄也 140321059

動機

飯田市ではリニア開通にともなって中心市街から活性化している。リニアの開通によって飯田市の人口にも大きな変化があると思う。今より短い時間で手軽に飯田市に行くことができるようになったため観光や居住などで飯田市にやってくる人もいれば、ストロー効果によって人材が大都市に流出してしまうことも考えられる。そのマイナス面をカバーするために具体的にどのようなまちづくり（中心市街活性化のための計画や事業、条例など）が行われているのだろうか。

中心市街について(飯田まちづくりカンパニーの声)

飯田市は「丘の上」と呼ばれた中心市街地から、昔から商業や文化など情報発信の中心地としてにぎわいを見せてきた。しかし、車社会の普及によって、中心市街地から郊外への商業施設の移動、それに伴う商店街の顧客の流出、さらに市街地人口の減少、高齢化などで、「街の魅力」は半減し、もはや昔の中心性は失われつつある。幸いなことに行政施設、公共機関、文化施設、商店街、りんご並木、基盤の目に整備された街路など、先人たちが残してくれた都市としての資産が多く残されている。いまならこれらの都市基盤に手を加え、新たな機能を想像していくことができる。そして街の魅力を取り戻すことが可能である。

少子化および高齢化、人口減少について

飯田市では少子化、高齢化と人口減少、コミュニティ機能の低下が中心市街地においても顕著にみられる中、まちの定住人口の増加策と、その生活基盤となる健康・医療・福祉の複合 的施策が必要とされている。その実現のためには、子育てしやすい環境整備、高齢者が安心して生活するための生活支援機能、若い人たちのニーズにも

対応した居住環境整備や当地域にふさわしい居住のあり方を追究、さらには自己実現の場を充足させるためのコミュニティ機能を高めていくことが課題とされる。

中心市街における商業・観光等の集客・交流機能の現状

今日、集客エリアが中心市街から郊外型商業施設へとシフトしてきている。またネット販売も多く普及してきているため中心市街の集客はさらに減ってしまっている。集客が伸びないため中心市街における商店の数も減ってきている。

	中心市街地商店街			中心市街地 商店街増減率
	平成9年	平成14年	平成19年	平成19年 /平成9年
商店数(店)	420	329	261	62.1%
従業者数(人)	1,677	1,329	996	59.4%
年間販売額(百万円)	26,497	16,540	11,701	44.2%
売場面積(m ²)	36,454	29,910	23,659	64.9%

(資料：商業統計)

それを変えていくためには、特徴のある店づくりや質の高いサービス、憩いや楽しみの場を設けることが求められてきている。既存の商業や観光に捉われることなく、起業支援、新たな産業や人材の誘導を図ることが課題とされる。

第二期飯田市中心市街地活性化基本計画について

飯田市の中心市街地を活性化させる運動として「第二期飯田市中心市街地活性化基本計画」が実施させている。この計画では中心市街地を魅力的なものにするためにりんご並木、桜並木など、いくつか拠点をおいて各地が役割に応じて機能分担がなされ、有機的に相互連携した「拠点集約連携型都市構造」を目指している。

第二期飯田市中心市街地活性化基本計画概要

1. 計画認定 平成26年3月予定 内閣総理大臣認定
2. 計画名称 第2期飯田市中心市街地活性化基本計画
3. 計画期間 平成26年4月～平成31年3月
4. 基本理念 都市経営一再生へのマネジメント（第1期計画と同一）
5. 計画区域 約151ha（第1期計画と同一）
6. 計画事業 60事業
市街地の整備：21事業、都市福利の推進：8事業、まちなか居住の促進：4事業、
商業の活性化：21事業、公共交通機関の利便性の増進：6事業

中心市街とリニアの関係性

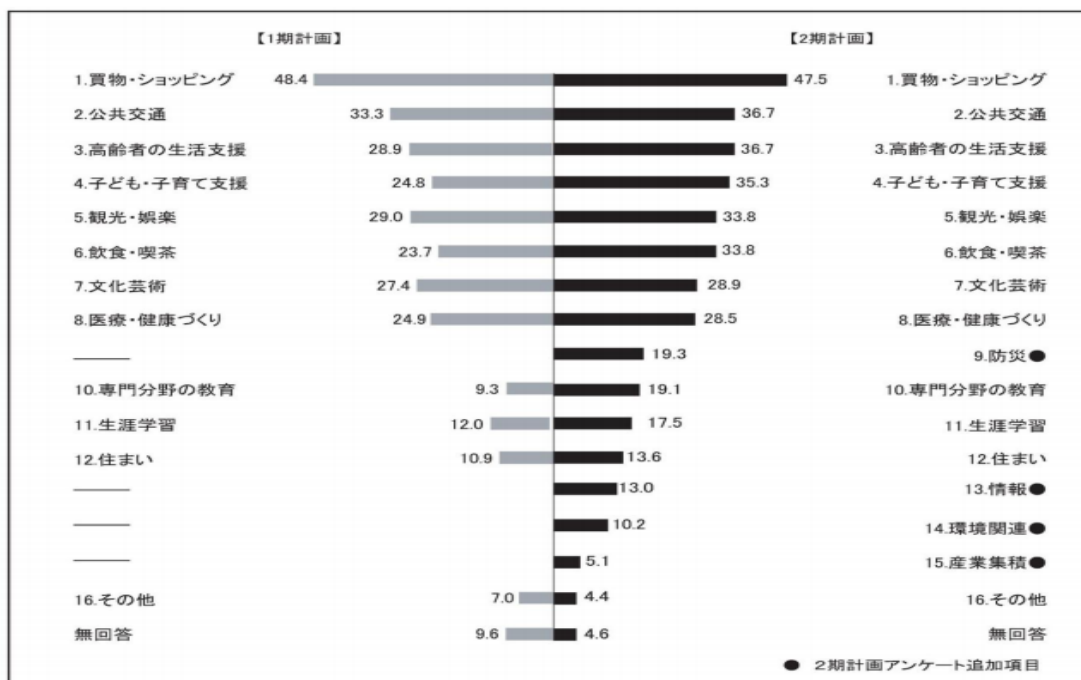
都市機能が拡散され地域の求心力や中心性を失い、地域全体の魅力が低下しないように、飯田市の土地利用基本方針及び南信州広域連合（1市13町村）策定のリニア推進ロードマップにより、郊外駅となるリニア駅周辺は、広域交通拠点として位置づけ、交通結節点（トランジットハブ）としての機能に特化した整備を推進し、新たな市街地は形成しないこととし、当地域の中心拠点は、これまでも、これからも現在の中心市街地であることが明確に位置づけられた。

飯田市民が求める将来像について

充実させていくべき機能

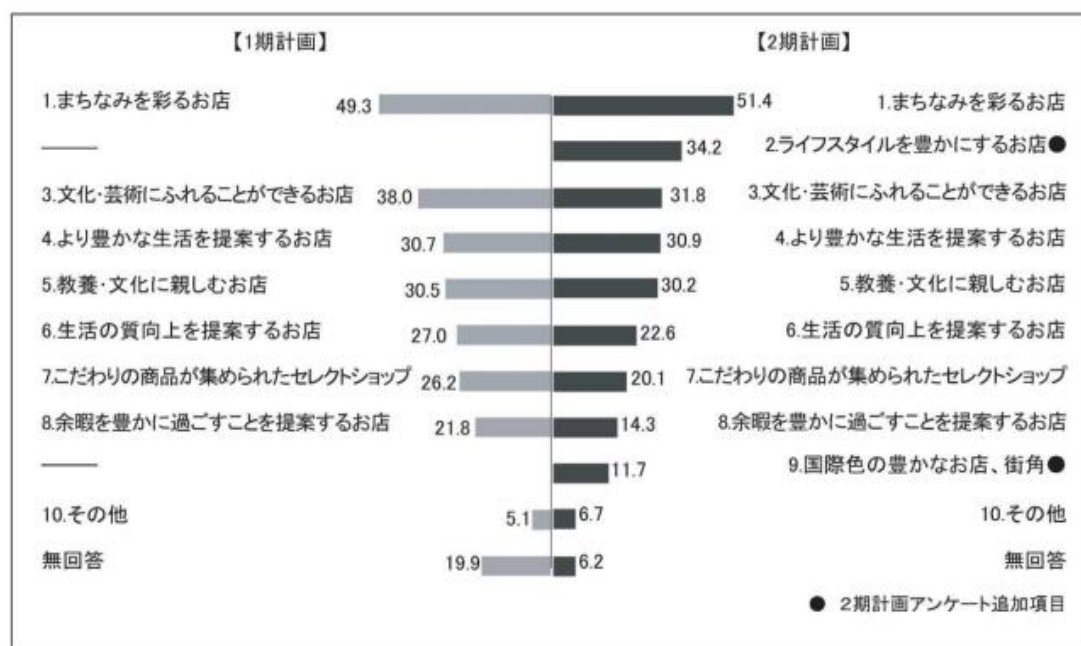
飯田市民にこれからの中心市街において必要なもののアンケートをとったところ、2期計画においても1期計画と同じように、「買物・ショッピング」47.5%と「公共交通」36.7%が最も高くなっている。

また、1期計画時からのニーズの変化が大きく表れているのが、「高齢者の生活支援」36.7%と「子ども・子育て支援」35.3%といった都市福利施設の充実で、多くの人が求めている。飯田市では年々少子化、および若者の世代の転出が進んでいるため、高齢者の生活支援が多く求められていると分かる。さらには、「飲食・喫茶」33.8%、「観光・娯楽」33.8%といった商業機能についての充実が求められている。中心市街を商業面でみると先に述べたように年々衰退しているため、市民は買い物や飲食、観光などの面を強く希望していることがわかる。



充実させるべき店舗の種類

飯田市民へのアンケートの結果を見ると「まちなみを彩るお店」が 51.4%と最も高く、他に比べてニーズが高いことが分かる。また、1期計画と比べて、2.1%増加している。次いで、2期計画での新たな項目である「ライフスタイルを豊かにするお店」が 34.2%となっており、多様化する嗜好にあわせた新たな店づくりへのニーズが高いことがわかる。その他「文化・芸術にふれることができるお店」31.8%や「より豊かな生活を提案するお店」30.9%、「教養・文化に親しむお店」30.2%など、自己実現やライフスタイルの向上などに役立つ店舗に対する関心が高いことが伺える。



第二期活性化計画の重点課題

「第二期飯田市中心市街地活性化基本計画」では計画を進めていく上で4つの課題をあげ、それにもとづきあらたな飯田市の将来像をつくっている

- ・ **地域の魅力のさらなる向上**…飯田らしい個性と飯田ならではの魅力に富む都市形成をさらに推進する。
- ・ **商店街活性化**…多様化するライフスタイルに対応し、知財・ソフト・デザインなど新たな産業と人材の誘導から、魅力的な店舗群を創造していく。
- ・ **まちなか居住の推進**…環境配慮型の集合住宅建設など当地域にふさわしい居住のあり方を示していくことが重要
- ・ **交通基盤の強化**…公共交通の利用拡大、自動車利用に頼らない交通手段の確保、拠点型駐車場整備など総合的な交通戦略が求められる。

中心市街地の将来像

- ・ 交流…歩いていて楽しい安らぎに満ちた空間の創出
- ・ 産業…知財・ソフト・デザインなど新たな産業分野と人材の誘導
- ・ 居住…低炭素で魅力ある都市基盤づくり

「第二期飯田市中心市街地活性化基本計画」の拠点となる場所

りんご並木、桜並木（並木通り）と中央公園がつくりだす「緑のネットワーク」を守り育てる。また、並木通りと中央公園が交差する周辺と飯田市駅周辺において、重点的に「小さな世界都市」の将来イメージを作り上げていく。

具体的な事業内容の例

- ・ 「事業内容」 クオリティ道路整備
「内容」 歩行者の安全を確保するための機能的で景観に配慮した道路整備事業
- ・ 「事業内容」 中央公園の再生・整備事業
「内容」 中央公園及びその周辺整備によるまちなかでの憩いや集客交流の空間づくり事業
- ・ 「事業名」 りんご並木再整備
「内容」 緑化施設等の整備による「りんご並木」の再整備

「旧基本計画」について

太平洋戦争直後の昭和22年、町の一角から発生した火が、中心市街地の約7割を焼き尽くした。この大火からの復興として、区画整理を行うとともに、市民の共同によって「裏界線」や「りんご並木」の整備を行った。

裏界線について

裏界線とは、「消防活動」「避難路」に利用するほか、上下水道、電力線、電話線等、公益上生活に必要な施設の地下埋設を目的として、つくられたもので、各戸の裏側に幅員２メートルの通路がつくられています。これは前の大火の際に「避難路」及び「消防活動」の通路が無く、非常に苦勞した等の反省からつくられている。



「第一期飯田市中心市街地活性化基本計画」について

第一期活性化計画では、市街地の整備及び、商業等の活性化におけるそれぞれの課題を整理し、5つの方針をさだめ将来像を描き、具体的な54事業を位置付け、実施された

「第一期飯田市中心市街地活性化基本計画」の基本方針

- ・地域固有の価値の創造
- ・複合的視点での事業実施
- ・さらなる市民の力の集約集中化
- ・アクセスしやすい都市交通基盤整備
- ・人の暮らしにあった効率のよい機能再編

「第一期飯田市中心市街地活性化基本計画」の目標

中心市街地の 活性化の目標	目標指標	1 期基準値 (H19)	1 期目標値 (H25)
目標① 人々の交流による にぎわいの回復	歩行者・自転車通行量 (人/日)	7,000	9,000
目標② 環境に配慮し、 安心安全な暮らし の実現	都市福利施設の 利用者数(人/年)	77,000	93,000

目標①に対して

1 期計画で掲げていた目標指標のうち、目標指標【歩行者・自転車通行量(人/日)】については、目標値 9,000 人に対して、平成 24 年度 7,520 人であり、未だ目標達成に至っていない。これは財源確保、地元調整等に時間を要し事業着手が遅れた「商工会館改築事業」・「りんご並木周辺商業施設等整備事業」の効果発現を得られていないことが大きな要因としてあげられている。

また、当初、まちなかの回遊性を創出する事業として「りんご並木賑わいづくり事業」・「人形劇のまちづくり推進事業」等のイベント実施効果が、土曜日(休日)における通行量の増加につながるものと考えていたが、イベント実施のない土曜日には効果が発現されにくく、むしろイベント時に市民が潤いと安らぎに満ちた時間と場所を享受したことがきっかけとなって、仕事やランチ、諸証明など来街機会の多い平日に、りんご並木をはじめとする中心市街地への愛着を高め、ふらり訪れる人が増えることで、平日の通行量増加に繋がったものと分析されている。

目標②環境に配慮し、安心安全な暮らしの実現について

目標指標【都市福利施設の利用者数(人/年)】については、目標値 93,000 人に対して、平成 24 年度 112,187 人と目標を達成。達成の理由としては、1 期計画の核事業として取り組んだ「まちなか健康福祉拠点整備事業」による効果が大きそうだ。

「まちなか健康福祉拠点整備事業」では、平成 19 年 11 月に健康関連サービスが開始、平成 21 年度には、保健・医療・福祉・介護予防マネジメント等を総合的に行う拠点の整備が完了、平成 22 年度から福祉関連サービスを開始した。計画期間内に段階的に事業に取り組んだことで、リピーターに加え、新規利用者を獲得した結果、当初の見込みを大きく超える利用者の拡大につながったものと分析している。

「第一期飯田市中心市街地活性化基本計画」の取組状況と結果

分 類	全 体	着 手 済	未 着 手
市街地の整備改善のための事業	1 8	1 4	4
都市福利施設を整備する事業	1 0	8	2
居住環境の向上のための事業	2	1	1
商業活性化のための事業	1 8	1 8	0
公共交通機関利便性増進のための事業	6	6	0
	5 4	4 7	7

全事業数54事業のうち着手済みが47事業で全体の約87%が着手されている

第一期飯田市中心市街地活性化基本計画の総括

1期計画では、旧法計画による再開発事業等の取り組みで蓄積された基本方針を継承し、具体的には、「人々の交流によるにぎわいの回復」「環境に配慮し、安心安全な暮らしの実現」を目標とした。

「人々の交流によるにぎわいの回復」に向けた具体事業としては、飯田市民の心のシンボルと言われるりんご並木周辺に景観的にも内容的にも魅力に富む商業施設等を整備し、りんご並木のポテンシャルをさらに高め、まちなかの潤い、彩りという市民ニーズの充足と今後のさらなる期待をつくりだした。「環境に配慮し、安心安全な暮らしの実現」に向けた具体的事業としては、まちなか健康福祉拠点整備事業における、健康関連サービス→保健・医療・福祉・介護予防マネジメント等を総合的に行う拠点整備→福祉関連サービスと、計画期間内で段階的に取り組んだことで、利用者の拡大につながり、高齢者支援に加え、市民のそれぞれのライフスタイルに合わせた健康増進策を行うことができた。

第一期飯田市中心市街地活性化基本計画の課題とされている事案

商工会館改築事業や拠点型駐車場整備事業の着工の遅れやりんご並木周辺商業施設等整備事業において当初予定した開業店舗数に至らず、各事業実施による相乗効果が生まれにくかったものと考えられる。 今後は、多様化するライフスタイルに対応することで商店街の魅力を高め、地域の魅力を発掘・創出に向けて、地域住民や商業者、イベント実施者など多様な主体が連携しながら各事業を実施していくとともに、交通基盤の強化によって、さらなる回遊性の向上、にぎわいの回復へ繋げていくことが重要である。



「第二期飯田市中心市街地活性化基本計画の重点課題」へとつながる

① 地域の魅力のさらなる向上

- ② 商店街活性化
- ③ まちなか居住の推進
- ④ 交通基盤の強化

まちづくりカンパニーの事業内容について

まちづくりカンパニーとは中心市街地を南信の中心都市として、10万人都市の顔として恥ずかしくない、そしてなにより私たち市民が“誇りを持てる街”に再生しようと、同じ思いを持つ市民、商店、企業が中心となって出資し、行政からも出資協力を得て設立した市民資本の第三セクターのまちづくりの総合支援会社である。

まちづくりカンパニーの事業は独立プロジェクト

飯田まちづくりカンパニーのプロジェクト事業は、基本的にはすべて独立事業として考えられている。直営事業はもちろん、共同出資事業についても一プロジェクトごとにファイナンスを組む独立採算制を原則としている。これはまちづくりカンパニー本体の規模が大きくなりすぎることによって、小売商業者や市民企業家の事業機会をなくしてしまうのを避けるためである。あくまでまちづくりカンパニーの事業は支援であって商業者や街を支えるパートナーであるという位置づけで活動していく

出資内容

まちづくりカンパニーは上にも書いたように飯田市だけではなく行政や様々なところから出資を得ている
その内容が、

法人（19社）	8800万円
飯田市	3000万円
個人	2900万円
日本開発銀行	2000万円
飯田市信用金庫	2000万円
長野銀行	1000万円
八二銀行	1000万円
飯田商工会議所	500万円
合計	二億 1200万円

まちづくりカンパニーにおける中心市街地再生への5つの視点

- ・まちづくりの原点に戻り、生活（住宅）と交流（商業・イベント）と仕事（オフィス）等の都市型機能を併せ持った、安全で便利で快適な、暮らしよい環境を目指す
- ・中心市街地全体がひとつの共同体であり、公共性を持った市民財産である
- ・土地、建物の所有と利用に関して、生活者の立場に立ったより合理的な権利関係の調整、マネジメントを行う
- ・つねに住民の合意形成を大切に市民主導という視点

まちづくりカンパニーにおける事業4つ

① 市街地ミニ開発事業

土地の入れ換え・集約化事業 共同建て替え・店舗の共同化
パティオ事業等 空き店舗の活用とテナントミックス 駐車場整備

② 物販・飲食事業

物販店舗の運営 飲食店舗の運営

③ イベント・文化事業

各種商店街の集客イベント フリーマーケット企画運営 商業塾の企画運営
まちづくり研究ネットワークの形成 その他文化・教育義務

④ 福祉サービス事業

高齢者サービス 買い物代行・食材宅配 福祉関連ネットワークの形成

飯田市の中心市街地活性化の団体、事業を調べてみて

私はもともとリニアが飯田市に通るという情報でしか飯田市を知らなかったです。しかしリニアが中心市街地から外れた郊外に通ること、そしてそれに伴い商業や人口の移動が起きていることを知りました。飯田市では中心市街地からの人口の移動をそのままにするのではなく、中心市街地活性化計画を立ち上げ、交通を整備したり、商業やイベントをとりおこなったりすることで、飯田市の昔ながらの部分を残そうと努力する姿がとても見られました。私は飯田市のように中心市街地がさびれていく街がたくさんある中で、飯田市のように努力を形にしている街はどれほど存在しているんだろうと思いました。私が住んでいる街でも年々市街地の衰退はおこっていますが、特に対策はなく、そのまま衰退は進行しています。この街の現状を見れば飯田市の努力が途方もなく大変なことだと分かります。飯田市の中心市街地のりんご並木や商店街を残していくために街が一丸となってとりくむことによって人・自然・文化をうまく調和させて残していくことができます。飯田市の土地をうまくいかした事業が飯田市では行われていると思います。私の住んでいる街でももっと風土をいかして地域を活性化することができるのではないかと思います。地域を活性化させていくためには事業とそれにとまなう市民の意識を高く向けさせることが大切になってくると感じました。

これから飯田市を訪れることとなりますが、その際には中心市街地の商業面の賑わいやりんご並木の自然、そしてそこに暮らしている農家の方々の話をきいて、飯田市がこれまでどのように成長してきたのかを調べ、感じて行きたいなと思いました。

飯田市の合宿を終えて学習したこと

1日目

地域自治と公民館活動

飯田市では行政を縦糸、公民館活動を横糸としてとらえ、ふたつの糸を編み上げて、オンリーワンの自治区の

地域づくりを目指している。そして、「むとす飯田」を合言葉として、住民の声を町全体に通し、住民が作り上げるという意識がとてつよい。活動としては上久堅の鎮守の杜構想や「ひさかた風土舎」で上久堅の特産品づくりやカウチン工房の講習会を開き文化の学習を行い、いわゆる横糸活動を進めている。

都市と農村の関係

飯田市では、ワーキングホリデーがとて盛んにおこなわれている。ワーキングホリデーというのは飯田市の農業体験を私たちのような学生や一般の方が行い、農業体験を通じた労力補充をするかわりに、泊まる家や食事を農家の方に提供していただくというシステムである。ワーキングホリデーは労力補充がメインとされているため、観光ではないことを受け入れ農家や参加者双方が知っておかなければいけない。農業であるためその月ごとに適した農業を体験することとなる（春頃であればりんごの摘果作業、初夏あたりであれば梨の袋かけなど）。飯田市から盛んにおこなわれるようになったワーキングホリデーは全国に年々広がっている。

農家民泊

私は実査に農家民泊を体験してきた。実際に農家の方の家に泊まった時に感じたこととしては、まず農家の家自体は新しくないのに太陽光パネルが設置されているとう点である。農家の方に話を伺うと、飯田市の支援によって0円で設置されているということであった。飯田市では太陽光をうまく活用しようとする事業が数多く存在している。それがこの農家の家にも現れていたのである。そして、二つ目に感じたのが、食事での食材の新鮮さである。この農家では野菜を中心とした料理が多く出てきたが、その野菜の多くが農家自身でつくられたとのことである。やはりワーキングホリデーなどを通じて、農家の手伝いをするすることで農業のほうもはかどっているのだらうと感ずることができた。

2日目

文化経済自立都市への挑戦

飯田市ではこの人口減少時代における都市の再構築に対して様々な対策を行っている。そもそもなぜ人口が減少するのかと考えた時に、若者の世代の地域離れがあげられる。それは若者の地域とのつながりが年々薄くなっていることが問題となっている。そのため飯田市では高校卒業までに地域に愛着と誇りを持てる人材の育成を一貫して実施することが重要となっている。

具体的には、今回のような大学連携で学びの場をつくり、地域をみつめていく活動やりんご並木桜並木の整備を中学生が行うことにより、ふるさと意識をたかめる活動も行われている。

都市の再構築としては環境面ではおひさま進歩エネルギーの推進、地域医療面では医療の経費を市が負担したり、救急医療を現状より充実させたりしている。リニア開通にむけて交通の整備や飯田市の各地への交通アクセスの充実化も図られている。

人形劇を通じたまちづくり

飯田市の文化として人形劇がある。しかし若者の地域離れから人形劇も若者を中心に関心が薄れてきているのも現状である。そのため、飯田市では8月に行われる人形劇フェスタに力を入れ、人形劇という文化を絶やさないようにしている。人形劇フェスタではプロ劇団からこどもまで様々な人が人形劇をおこなうことができる。人形劇団の育成支援なども飯田市では行われているので多くの人が人形劇フェスタに参加する。やはり人形劇に関しても行政ではなく、市民が案を出し、つくりあげていくという形が定着している。

地域ぐるみ環境ISOの取組

飯田市の環境政策として飯田版の環境ISOである南信州いいむす21がある。南信州いいむす21では中小企業にとって負担となる費用の高い学部審査機関による認証ではなく安く登録できる地域独自の認証を設けている。

また、「いいこすいいだプロジェクト」という事業によってお金をできるだけかけず、また地域ぐるみで省エネ活動に取り組んでいる。省エネ改善の事業としては、電力測定器を設置で現状を把握したり、老朽化した機器の更

新を行ったりその他さまざまな事業がおこなわれている。また私たちのような学生の意識を高めるため、エコ効率分析法の勉強会やISO規格についてのセミナーも行われている。

飯田りんごんについて

飯田りんごんに参加する上で、私たちは踊りを踊りながら街を歩くこととなったが、踊っている私たちのような学生はもちろんそれ以上に盛り上がっているのは街の30代から40年代ほどの世代の方々であった。若者離れが広がりつつある飯田市で地元を愛しているこのような高齢の方が街を一番に支えているのであらうと感じた。これからの飯田市の若者が飯田市から離れていかないようにふるさと愛をたかめるような事業は多く行われるようになってきているので、これからは若者の世代が飯田市を大いに盛り上げることに関わっていくことが必要になると感じた。

3日目

おひさま進歩エネルギーの取り組みについて

おひさま新おほエネルギーの取り組みは環境文化都市を目指すうえで、エネルギー地産地消で循環型社会構築をしていくためにはじめられた。この取り組みではおもに、保育園や幼稚園などの公的施設に太陽光発電設備を設置する事業や太陽光発電設備を飯田市に普及させるために、0円で一般の住宅に太陽光発電設備を設置し、9年間は定額で、10年目から発電された電力は利益になるような事業を行っている。このように市民に太陽光発電というものを身近に感じさせていくことで、町全体の循環型社会構築への意識を高めるように努めている。

新しいまちづくりのカタチについて

この講義では、飯田市を盛り上げるさまざまな事業やイベントを行っていく上で忘れてはならないことや目標を中心として学んだ。飯田市でのイベントを行う上で、まず大切になるのはイベントを行う前に、市民との意見交流の場を設けることである。実際にイベントの実施を決定してから市民から様々な問題を指摘されたことがよくあったそうだ。それは市民のためのイベントであるはずなのに、市民の声がきけていないという問題を見落としていたからであり、あくまで市民が作り上げていく街づくりということを忘れてはいけない。このような地域に対する愛が飯田市を支えているのだ。

中心市街地活性化の取り組み

中心市街地を活性化させるため、この3日間で学んだように、人材サイクルであったり、リニアを中心とした高速交通網時代を見据えた街づくりであったり、これからの将来に対する課題がある。それを解決していくため、飯田市では地域経済活性化プログラムを実施し、人材誘導や人材育成をおこなったり、飯田市にはなくてはならない、農地とその担い手の強化、また交通整理を行うことに対して、森林づくりも忘れてはならない。飯田市のこれからとして、具体的なイメージ、目標を「流通、サービスの展開」、「アグリビジネスの展開」、「魅力ある観光の展開」、「交通環境を生かした新展開」と定め、事業を拡大させていく。ただ、何に対しても言えることであるが、行政や公民館が主体として動いていくのではなく、あくまで飯田市に住む人々が企画して実行する、市民が作り上げる街づくりということを忘れてはいけない。

発表を通して思ったこと

私は飯田市の環境や中心市街地活性化についてグループで発表を行ったが、やはり、魔今回の合宿のまとめを行っただけであり、これからどうしていくのか、学んだことを自分の地域にどう生かしていくのが足りなかったと思う。たとえば、私の住んでいる多治見市では日本一暑い街をうたっているがこの暑さを生かして、太陽光発電などの循環型社会の構築を進めていくことができるのではないのか、という考えやこの考えに伴って年々減少傾向にあり、廃れていっている私の市が少しでも活性化、盛り上がっていくことができるのではないのかといった思いも生まれたのでこういった考えも発表で掘り下げて最後に提言できたのではないのかと思う。今回の飯

田市合宿で地域自治やワーキングホリデーなど学ぶことは多くあったがこれをただまとめるだけではなく大事な
のはこれからどうしていくことかであると思う。その主張が私のグループや全体を通して少なかったのではな
いのかと感じた。多治見市では、先に言ったように暑さという環境を生かして環境事業であっても市民を楽し
ませるイベントでも様々多様に企画できると思う。そして飯田市のようにふるさと愛というものを第一に考え、若
者という人材が一度は外にでていってしまっても将来かえってこようよ思えるようなまちづくりをおこなって
いくことが重要であると思う。

町おこし

140321191

宮脇 拓弥

このテーマを選んだ理由

自分は飯田市に行って、特に町おこしについて調べたいと思っています。

理由は、現在自分の地元、岐阜県にある多治見市は、昔はタイルや陶器が有名でしたが、だんだ
んと衰退してきて今はタイル工場や陶器工場はあまりありません。

飯田市は昔、中心市街地が燃え上がり多大なダメージをおったにも関わらず現在はその跡形もな
く再生されていることを知りました。

そんな飯田市はどうやって地域再生を果たしたのか、どういう政策をしたのかきになったので町
おこしというテーマを選びました。

特に市街地の歴史や市街地再生の道はすごく興味があるので飯田市に行ったときにもいろん
なことを調べたり、聞いたりして自分の町の再生には、地域活性化にはどのようなことが大切なの

か調べていきたいと思います。

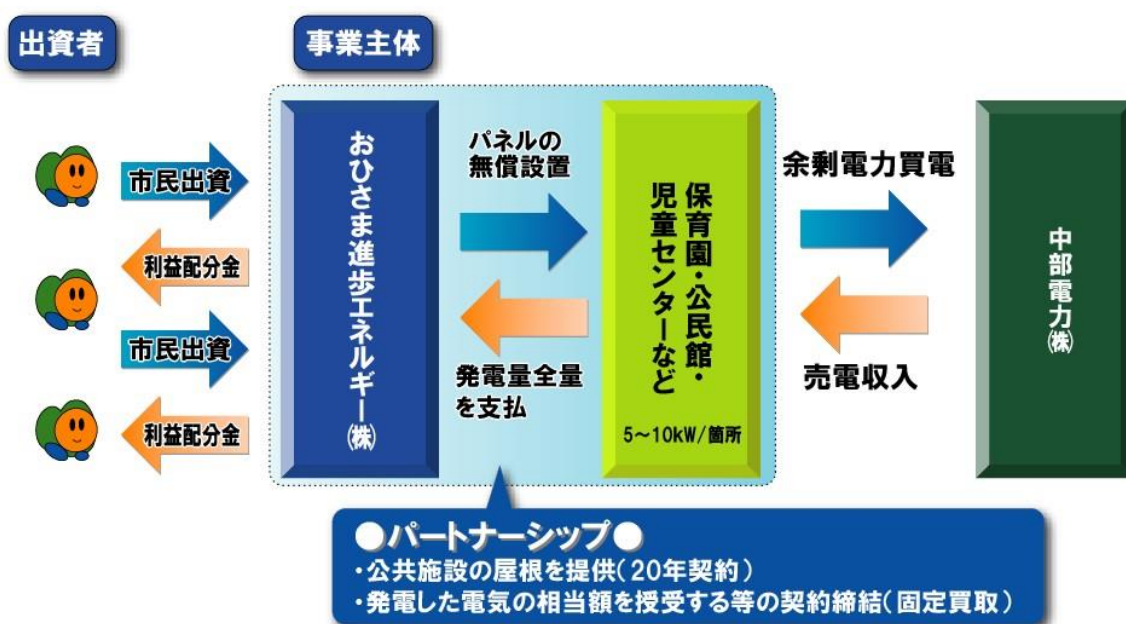
また中心市街地の再生には地元の中学生たちも協力していただきたいです。中学生が自分たちの町のために活動するくらい飯田市では地域住民一人一人が町を大切にしているのかもしれない。

下の図は飯田市の中心市街地のものです。



おひさまファンド
おひさまファンドの

しくみ



おひさまファンドは市民が出資者となり、おひさま進歩エネルギー会社にお金を出資する。受け

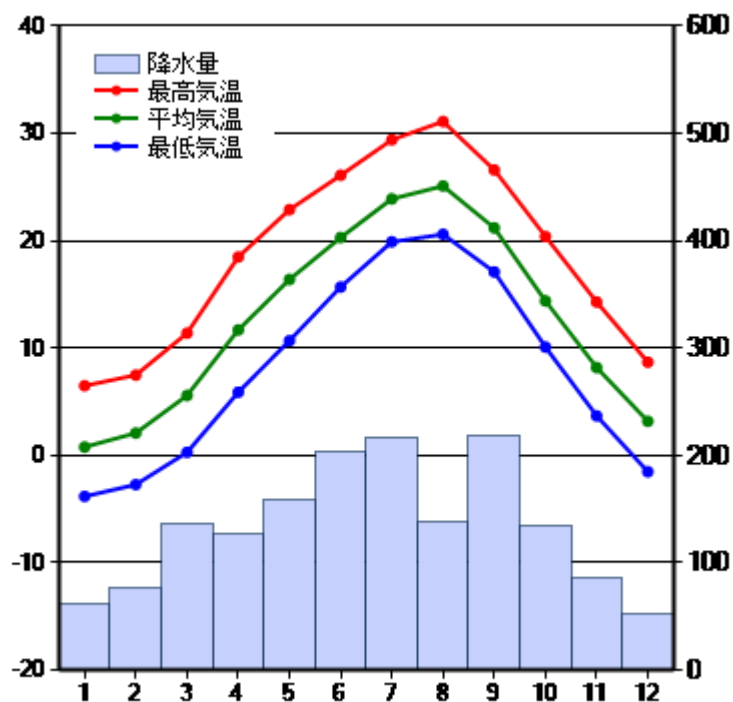
取ったお金でおひさま進歩エネルギー会社は保育園や公民館、児童センターなどにパネルを無料で設置する。そして、そこで得た発電量を会社に支給し、会社は利益配分金として市民に配る。また、この時に生まれた余剰電力は中部電力に売電して収入を得ている。またこの政策は飯田市のローカルファイナンスを利用した再生可能エネルギーの推進政策となっている。

飯田市でおひさまファンドが推進される理由

中央高地式気候と太平洋側気候を併せ持つ。寒冷な長野県内では最も温暖な気候であり、冬季に真冬日になることは少なく、日照時間が長い。飯田特別地域気象観測所（標高 516.4m）の1月の平均最低気温も-3.8℃と飯田市内の南信濃（標高 407m）の-3.6℃と共に最も高い。日中の最高気温も飯田が 6.5℃、南信濃が 7.1℃と県内で最も高くなっている。このように日照時間の長さや温暖な気候」が太陽光発電では大切であるから、その点でいくと飯田市のおひさまファンドはうまく土地の特徴をとらえてやっていることがわかった。飯田市の一年間の気温などの統計が下のグラフである。

月別の平均気温、平均降水量、雨温図

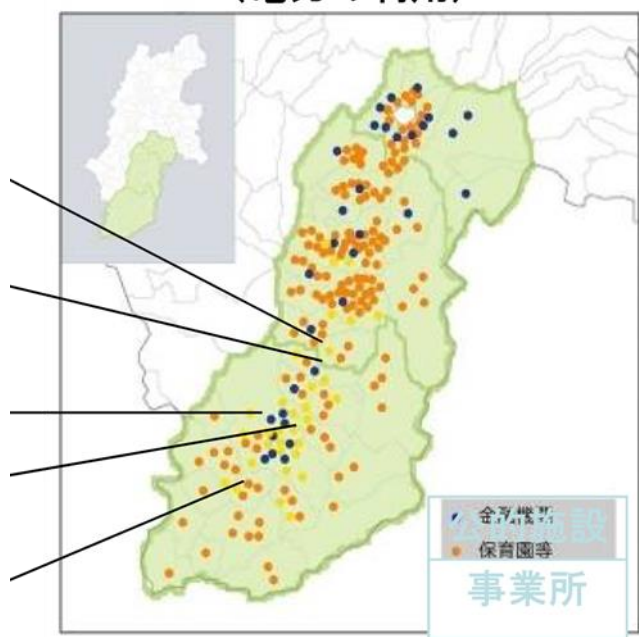
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
最高気温(°C)	6.5	7.5	11.4	18.5	22.9	26.1	29.4	31.1	26.6	20.4	14.3	8.7	18.6
平均気温(°C)	0.8	2.1	5.6	11.7	16.4	20.3	23.9	25.1	21.2	14.4	8.2	3.2	12.8
最低気温(°C)	-3.8	-2.7	0.3	5.9	10.7	15.7	19.9	20.6	17.1	10.1	3.7	-1.5	8.0
降水量(mm)	62.6	77.4	136.6	127.3	158.4	203.1	216.0	138.8	218.5	133.6	86.8	52.4	1611.5



太陽光発電は暑すぎる気候の場所だとかえって効率が悪くなるらしい。飯田市の気候は真夏の8月でも30度を少しこえたくらいでとても効率よく発電できるだろう。よって、飯田市はおひさまファンドにとっても適している土地の環境をもっていると考えられる。

飯田市の太陽光発電設置数

太陽光発電システムの設置 (電力の利用)



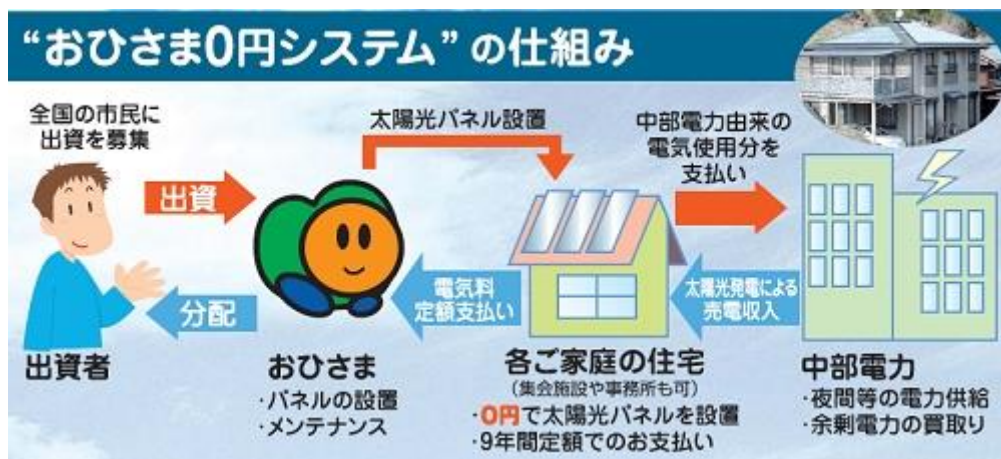
市民の協力や、飯田市の保育所や事業所の協力を得て、平成20年までに約150ヶ所に太陽光発電システムを設置した。

おひさま0円システムのしくみ

おひさま0円システムとは、一般のご家庭に初期費0円で太陽光パネルを設置。9年間月々定額の料金を支払い、10年目以降は設備が無料譲渡されて、発電分全て各ご家庭の収入になる。また各ご家庭の省エネ努力によって売電を増やせば、月々の負担を減らすことも可能である。また、おひさま0円システムを管理するおひさまグリッド株式会社は飯田信用金庫から金融面から支援を受けて、この飯田信用金庫は飯田市と地域活性化パートナーシップ協定を結んでいる。

こうしてみると、飯田市では金融機関や市民、会社が一丸となって飯田市という町を地域活性化に向けて活動し、協力していることが分かった。

下の図は分かりやすいおひさま0円システムの仕組みを表にしたものである。



おひさま0円システム設置者の声

- 温暖化防止を目的に、自然エネルギーを最大限活用するために、太陽光パネルの設置をする際の初期費用0円という思い切った政策を展開することは、とても良いことだと思う。環境問題は一般の人が考えている以上に深刻。先進国は自分の利権等を考えずにこの地球の将来を真剣に考えてリードしていく姿勢が必要だと思う。
- 毎日の発電量や電気の使用状況がわかるため、どのように生活しているのか目安が分かり、とても便利です。使用量の多いときは反省して、エアコンの使用を限定する等の努力をしています。お天気によってずいぶん発電量が左右されますが、これも自然の中に住んでいるという実感を感じる瞬間です。

おひさまファンドまとめ

おひさまファンドの活動は飯田市では地域住民の協力のもと、市がおひさま0円システム等の工夫した政策を実行し、それに市民が協力しているからこそ成り立っているものだと思う。市民が快く受け入れられるような政策を考えることも重要だと思いました。例えば0円システムでは9年間月々定額の料金を払わなければならないが、10年目以降の発電は自分たちのものになるし、太陽光パネルも無料で設置されるからいいことだらけの政策だと思う。また飯田市は寒冷的な長野県に属しているが、一年通して温暖な気候といえるのでその土地にあった政策をしていることも

大切だと思った。

飯田市の中心市街地

飯田市街地の歴史

この地域に比較的大きな集落が生まれたのは、今から800年程前、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃からです。

当初はJR飯田駅の北側を中心に形成されていました。室町時代後半になると現在の愛宕神社付近に飯坂城が築かれ、小規模な城下町が誕生しました。

その後、飯田城主が現在長姫神社のある場所に飯田城を築き居を移すと、町の人々もこれに従って移り住み、現在の町並みが形成されました。

京都の町並みにならって

天正18年、兵農分離によって武士は全部城下に居住することになり、城下町の整備が進められた。まず追手門の西に向かって直線的に道をつくり、本町1、2丁目が生まれ、さらに、京都の町並みにならって町筋を正し、大横丁、上横丁、下横丁(現在りんご並木のある通り)などがつくられ、碁盤の目のような町並みが形成されていった。

飯田市の大火

昭和22年、敗戦直後の困難な時期に中心市街地は、その大半を焼失する大火に遭遇しました。以前から飯田は火災の多い町で、明治以降これまでに数十戸以上焼失した大火が6回もありましたが、この大火は全焼戸数4010戸、焼失面積451000平方メートルという有史以来の大火災で、小京都と言われた美しい町は、碁盤の目のような街路だけを残して焦土と化しました。

ノーモア大火

大火を機に、徹底的な防火対策と近代的な都市計画を立てるべきという機運から「飯田市火災復

興都市計画事業」として次のような復興計画が立てられた。

飯田市復興都市計画基本方針

- ① 飯田市の火災の経験並びに風致上の見地から、市街地の南部、段丘の突端は公園または緑地として保存する。
- ② 階段状の割地は極力整備して、同一平面とする。
- ③ 市街地を東西南北三本の防火帯で分割して、その中央に防火用水を設置して、防火機能の拡充を図る。
- ④ 旧来の用水を整備し、これを防火用水として完全利用を図るとともに市街地に貯水池を設置しこれを連絡する
- ⑤ 旧来の街路面積は僅かに市街地の5%に過ぎず、著しく建築密度が過大であったから、街路、公園防火帯等の公共地を市街地面積の25%程度とし、別途建築制限と相まって適切なる空地の確保を図る。
- ⑥ 害地の裏界線を連続形としてここに通路を設け、常設の利用は勿論防火活動に資する。

「ノーモア大火」を合言葉に、市民も私有地の2割無償提供などして通り町、中央通りなど各町の道路の拡幅、並木通りの防火帯、各地の地下貯水槽設営などを実施。また、城下町の特徴である裏界線を活かした新しい都市計画による防火都市として生まれ変わり、現在に至っています。



上の画像はりんご並木。飯田市の中心市街地について調べていくと、「りんご並木」というものがでてきた。そこで、続いてはりんご並木について調べることにする。

りんご並木

りんご並木（りんごなみき）とは、長野県飯田市内の中央にある大通りに 400m にわたって植えられたりんごからなる並木通りである。かつての大火復興のシンボルとして広まり、現在は街のシンボルとして親しまれている。なお、日本の道百選やかおり風景 100 選に選定されている。公園の両側を通る道路は歩行者優先で、地域住民や観光客の散策に利用されている。

並木通りは全体で 1km 程度あり、そのうちりんご並木に当たるのは 450m ほどの部分。飯田市公民館横のハミングパル（人形時計塔）を境にして北側から大宮神社前は桜並木となっており、こちらは桜の名所となっている。

りんご並木の歴史と概要

りんご並木は 1947 年（昭和 22 年）に発生した「飯田大火」の復興過程で当時の飯田市立飯田

東中学校の生徒達の提案により生まれ、今日まで代々東中の生徒の手で育てられている。生徒の行う作業は、施肥・剪定・花粉付け・草取り・収穫と全般に及ぶ。最初に植えられた1953年（昭和28年）11月当時のりんごの木も残されており、接ぎ木するなどとして守られている。

1999年（平成11年）には並木全体が大きな公園として整備された。これ以降、犬の散歩をする人や水遊びをする子どもなどが増え、生活道路として定着していった。

また並木通りは、大火の教訓から町の防火帯としても機能するように考慮されている。市街地の8割を焼き尽した飯田の大火後に飯田市中心街は二本の30m幅員の防火帯道路が街の中心で交差し、町が4分割になるように整備された。万が一の大火災時に四分の一の町の焼失でくい止め、それ以上の延焼を防ぐ為である。元来りんご並木は並木通りとして作られたのではなく、この防火帯道路の中央にある緑地帯にりんごの木が植えられた。

2001年（平成13年）には、りんご並木沿いに再開発ビル「トップヒルズ本町」が完成した。トップヒルズ本町は、まちなか居住を推進するビルであり、上層階に居住機能を、下層階に商業や市役所機能を配置した。続いて2002年（平成14年）に高齢者向けアパート「アシストホームりんご」が設立され、2004年（平成16年）には「トップヒルズ第二」の建設が始まった。これら一連の事業には第三セクターかつTMOの株式会社飯田まちづくりカンパニー（まちカン）が関与している。

中心市街地再生への5つの視点

- ① まちづくりの原点に戻り、生活と交流と仕事等の都市型機能を合わせ持った、安全で便利で快適な、暮らしよい環境を目指す視点
- ② 中心市街地全体が一つの共同体であり、公共性を持った市民財産であるという視点
- ③ 中心市街地の土地、建物の所有と利用に関して、生活者の立場に立ったより合理的な権利関係の調整、マネジメントを行う視点

- ④ 土地、建物の所有者及びそこに生活する人々の利益、つまり商業地、生活地としてのポテンシャルを向上させる視点
- ⑤ つねに住民の合意形成を大切にした市民主導の視点

飯田まちづくりカンパニー

再開発事業

土地の面積が限られている飯田市中心市街地『丘の上』は、昭和 22 年の大火後に狭小な家屋が密集して建ち、居住地としての魅力が失われていきました。

それが、郊外住宅地への人口流出を促進する原因にもなっていました。

中心市街地の空洞化を防ぐためには、居住環境の改善が必要であるという意識が高まり、再開発事業で新たな住宅を導入する構想が生まれました。

例 1 橋南第一地区市街地再開発事業

昭和の末から平成にかけ、中心市街地の商店主が活性化の勉強会を行う中、再開発事業の構想は生まれました。

平成 6 年の橋南地区再開発事業の準備組合結成 より計画づくりが行われ、商店街とりんご並木に囲まれた区域に住宅を中心とした複合ビルを建てようと、平成 9 年に橋南第一地区市街地再開発準備組合が立ち上がりました。

5 年間の歳月をかけ、平成 13 年 7 月に再開発ビル『トップヒルズ本町』が完成しました。

トップヒルズ本町は、地震のエネルギーを直接建物に伝えない免震構造を採用しています。

例 2 橋南第二地区市街地再開発事業

トップヒルズ本町の北側隣接地で、飯田市橋南第二地区市街地再開発事業は行われました。

この事業は、飯田市橋南第一地区市街地再開発事業 地区との連携を図りつつ、

①住み続けたい住まいの提案

②個性あふれる店舗づくり

③ 飯田の誇りと文化の醸成、みんなが集う交流の場づくりを行うことを目的としました。

平成 11 年に橋南第二地区再開発準備組合を設立し基本計画が策定され、平成 15 年に工事着工、平成 18 年夏に 『トップヒルズ第二』 が完成しました。

トップヒルズ第二は、耐震強度 1.25 を採用し、地震に対して大変強固な構造です。

例 3 堀端地区優良建築物等整備事業

トップヒルズ本町、トップヒルズ第二 に隣接する地区において、堀端地区優良建築物等整備事業は行われました。

平成 16 年に堀端地区まちなか再生組合を設立、実施設計が行われ、平成 19 年に再開発ビル『銀座堀端ビル』が完成しました。

この事業は、高齢者が精神的・経済的に安心できる環境づくりを目指し、2階は健康・福祉をサポートするフロア、3階はケア付き高齢者向け賃貸住宅になっています。

建物は室内の温度変化の少ない外断熱工法を採用、マンションを除くフロアではソーラーシステムによる空調と給湯を導入した省エネと環境、健康に配慮した建物です。

イベント事業

中心市街地での各種の集客や、定期的な朝市フリーマーケットなどの企画・立案から会場手配、設備・用品の準備、参加者・出展者の要請や調整、イベント告知から運営までを主催者と協議を重ねながらお手伝いします。



社会フィールドワークまとめ

地域自治と公民館活動

飯田市に着いてはじめて飯田市にある市役所に入りそこで飯田市の地域自治と公民館活動について学びました。そこで学んだのは飯田市の地域は行政、自治区、公民館の3つがそれぞれ機能しあい地域が作られているということです。行政はリーダーシップとなり、政策を行う役目があり、縦糸として糸を繰り出す役目があります。自治区は住民の自主的実践によるボトムアップの推進をしていて横糸の役目を果たす。公民館は住民の自治能力を育む役目で、横糸を紡ぎだしています。飯田市には20の自治区があつてそこに20の公民館を配置している。これは20通りの地域づくりを目指している。そして合言葉として「ムトス飯田」というのがあり住民ひとりひとりの意思が反映する町づくりをしている。今回飯田市における地域自治の仕組みを学び分かったことは行政、自治区、公民館の三位一体の町づくりをしていて、住民ひとりひとりの意思がしっかり反映するような町にしていこうという思いが話を聞いて、すごい感じたことです。公民館は実際に見たけどすごく活気があつたし商店街にも人がたくさんいた気がして、活気があるよう思いました。町づくりに住民が協力的というのも飯田市のまちづくりの一つの特徴だと思いました。

ワーキングホリデー

ワーキングホリデーは都市に住んでいる人が農業体験をすることで農業をやってみたいという気持ちをもつこともあるし、逆に農家の人は都会の人からみた田舎の長所や短所を交流できるいい企画だと思いました。今、飯田市では若者がどんどん都市に流入していき高齢化が進み、跡継ぎ問題が深刻になっていると思います。だから、小さいころから農業に親しみ、飯田市というまちを自分たち若者がもっと良くしていこうという地元愛みたいなものを持っているともっと若者が増えていいまちになると思います。また、ワーキングホリデーをすることで跡継ぎ問題も解消する一つの手段だと思うから続けていくといんじゃないかと思いました。

農家民泊

一日目の最後に農家の人の家で泊まる農家民泊をしました。泊まった場所は飯田市の千代というところで緑に囲まれたとても涼しい場所でした。寝るときも冷房なしで寝れたことには多治見に住んでいる自分としてはとても驚いたことでした。農家の人と一緒にご飯を食べました。その時に農家の人が千代はいいところだしすごい好きということを書いていました。もともと千代に住んでいたわけではないとのことでしたが自分が生まれ育った土地と同じように、もしかしたらそれ以上かもしれません。愛することができるというのはすばらしいことだと思います。自分は多治見が暑いだけだと思ってるからいいところとはあまり思えません。農家の人は千代の好きなところは自分たちで生きていくことが毎日充実するし、みんな仲がいいこのまちが好きと言ってこういうことってやっぱり農家ばかりの田舎のまちにいるからこそ人と人のつながりが強くなるんじゃないかと思いました。都会だと田舎ほどの住民同士のつながりが弱い気がするからそういったところは自分の町にはないなあと思いました。今回農家に泊まり一番分かったことは農家同士のつながりの強さだと思います。

地方創生に向けた人材サイクルの構築

飯田市は現在、若者が都市へと流入し地元に残る人がほとんどいなくなっている。地域とのかか

わりが大人へなるにつれて薄れていき、やがて就職、進学するときに地元を離れる。こうなると飯田市はどんどん若者が減っていき活気のないまちになってしまう。そこで人材サイクル構築として飯田市を離れる前に地元への愛と誇りを持てる人材の教育をすることが重要であるとしている。こうした若者に地元への愛や誇りを持たせようとさまざまなまちづくりをすることはすごいことだと思いました。

人形劇を通じたまちづくり

いい大人形劇は37年もの歴史があることが分かった。飯田市の伝統芸能として市民全体に関心があることはすごいと思った。地域で大切にされる伝統芸能があることは今後も飯田市の強さになると思います。

地域ぐるみ環境 ISO の取り組み

飯田市は「点」から「面」への「ぐるみ運動」として事業所がどんなに取り組んでも本来の環境問題の解決にはならないとして地域全体となり活動していこうというものです。この結果、飯田市は地球環境大賞を受賞するなど環境への取り組みが高く評価されている。

りんご祭り参加

とにかく踊りっぱなしは大変だった。でもたくさんの参加者がいることにびっくりした。自分にはやく帰りたいと思ったけど飯田市のみんなは地域のために踊っていない人も中学生とかごみ拾いとかに協力していいまちだと思った。

おひさま進歩エネルギーの取り組み

市民が協力のもと家に太陽光パネルを設置したり、会社の資金を出資したりすることで地球温暖化防止に貢献している。この企画はとてもいいものだと思います。市民も無償で太陽光パネルを設置してもらえし企業もそこで得られる電力を利益としてもらえてみんないいことだらけの

ように思いました。

そば打ち体験

実際やってみたら、めんの太さがばらばらでそんなおいしくなかったというのが感想。プロのすごさがよく分かった。

新しいまちづくりのカタチ

現在の飯田市では飯田航空宇宙プロジェクトの取り組みをしている。航空宇宙産業は日本と言うと中心は中京圏とちかくにあるから地域の優位性もある。そして日本の航空宇宙産業の発展に貢献できれば飯田市はさらなる発展を遂げると思うし、飯田市の航空宇宙産業で働きたいと思う人もでてくるだろうから成功するともっといいまちになるだろう。

中心市街地活性化の取り組み

講義のあとにまちをみて回りました。りんご並木もあり市役所周辺はいい雰囲気のあるまちづくりがされていると思いました。また公民館で地域住民の人が集まり話していました。地域に対する思いの強さを感じました。

レポート発表

どの班もよく発表できていた。自分たちの班はほかの班と比べ全然うまく発表できなかったけどこの飯田市にきて普段とはかなり違う環境で勉強できたことはいい経験になったと思います。

自分のまち、多治見市

多治見市は昔はタイルや陶器の生産がさかんなまちでしたが最近は衰退しています。飯田市のようにいろんな政策もしていません。何年か前に多治見市は全国一の暑さを記録しました。このことで多治見というまちは少しは有名になったと思います。だからこそこでさらに多治見というまちを発展させ活気のあるまちにしていけるよう、飯田市のように多治見のような暑い気候が役

に立つ政策をしていけばいいんじゃないかと思います。

社会フィールドワーク

経済学部 経済学科 140321157 橋本宜也

はじめに

飯田市では、文化と自然やこれから誕生するリニアなどを活かした政策で町の人口減少を抑制していこうとしている。自分の住んでいる町ととても似ている町の状態に、飯田市に行き、どのようなことが実際に行われているのかを知ることができれば、自分の生まれた町をどのようにすればいいかを考えることができると考えて現地に行き学ぼうと思った。

飯田市が掲げる「文化経済自立都市」の具体的な内容を直接知ること、ほかにも様々なことで町を発展させようとしている飯田市から多くを学びたいと思う。

飯田市の基本構想

飯田市は、文化経済自立都市を目指し、それを実現するために前期基本計画期間に引き続き、後期基本計画期間においても第5次飯田市基本構想で掲げためざす都市像、基本目標である5つの町の姿の実現に向けて、多様な主体との協働によるまちづくりを進めている。

目指す都市像を実現するために、基本目標として次の5つを上げている。

・さまざまな産業がいきづき、地域経済が自立した元気なまち

地域の魅力や飯田らしさを活かしながら、農業・工業・商業・林業などの振興を図り、活気ある地域を目指す。

・ともに支え合い、安心、安全に暮らせるまち

人のつながりを大切にし、みんなで支え合い、誰もがいつでも安心して、安全に暮らし続けることができる地域を実現する。

・みんなの思いでうごくまち

一人ひとりが「思い」（主体性）をもってまちづくりに参画し、「結い」（自立と協働）により役割を分担しながら一つの事を成し遂げる地域を実現する。

・地域で学び地域で育つ「地育力」でみんなが輝くまち

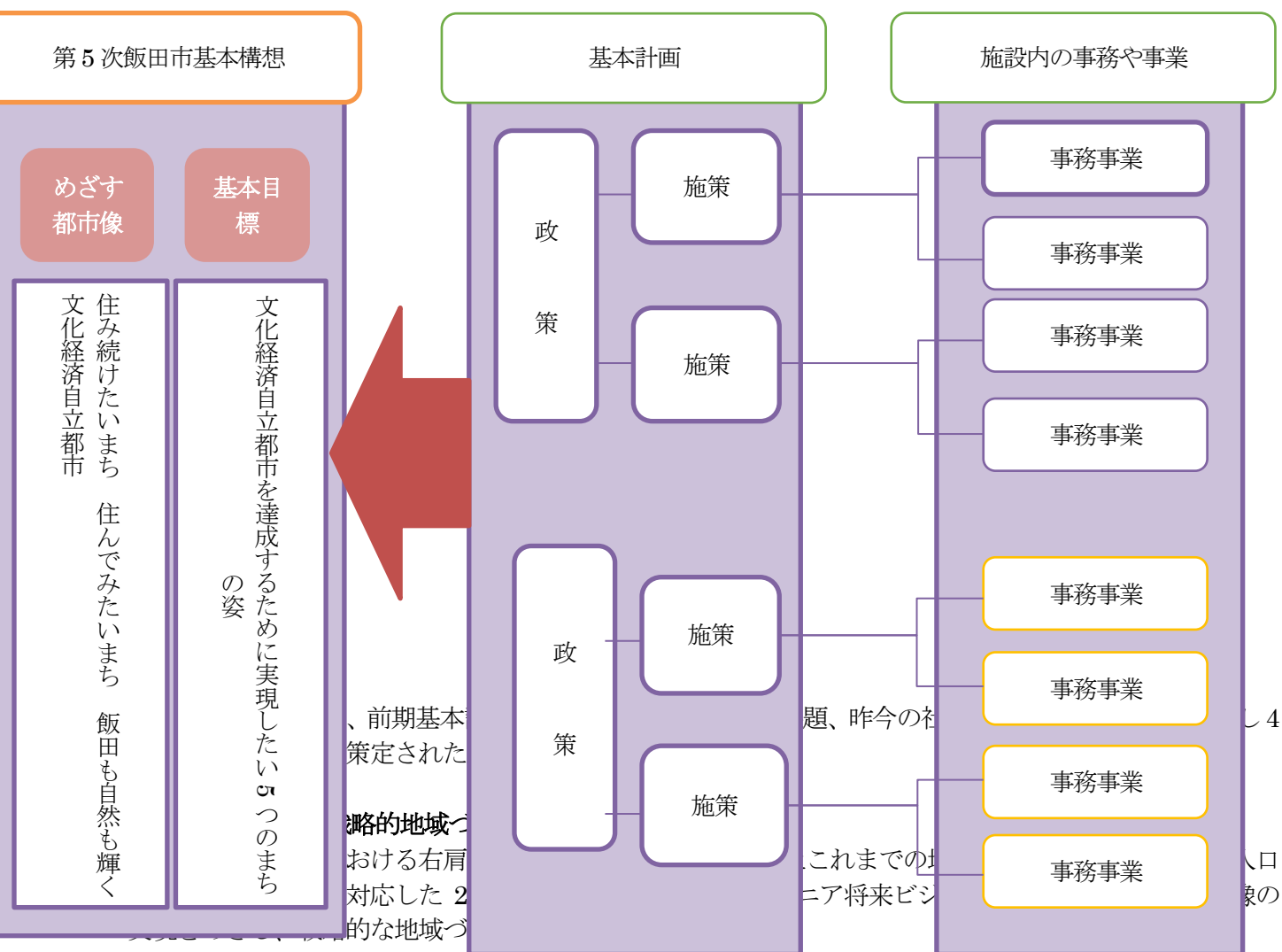
地域全体で学び合い、地域で人材を育てる力を持ち、市民一人ひとりの意識が高く、活動が盛んな地域を実現する。

・豊かな自然、文化を活かし、多様なライフスタイルが実現できるまち

この地域の持つ「豊かな地域資源」を活かし、多様なライフスタイル（暮らし）を実現することによって、住む人も、訪れる人も、みんなが「しあわせ」を実感できるような地域を実現する。

上記の5つのまちの姿を実現するには「人材のサイクル」の構築が必要である。一旦外に出て行ってしまった若い人たちが、いずれは飯田に戻ってきて安心して子育てをし、次の世代をはぐくんでいくような人材のサイクルが必要である。

基本計画は、政策・施策によって構成されている。政策は、基本目標を達成するためのまちづくりの方向を分野別に整理したもので、政策の実現によって基本目標の達成を図る。施策は、政策を実現するための目標や課題、役割分担を分野別に整理したもので多様な主体による活動や、行政の事務事業の取り組みなどによって施策の目標を達成することで、施策の実現を図る。



視点2：産業づくり・人づくり・地域づくりによる総合的な取り組みの推進

「未来を見据えた産業づくり」や「ふるさとを大切に思う人づくり」、さらに「自分たちの地域の課題を自分たちで解決する地域づくり」などに総合的に取り組み、「人材のサイクル」の構築を図ります。

視点3：安全・安心のまちづくり

東日本大震災をきっかけに、人々の災害に対する意識や考え方が大きく変化し、社会全体で安全に関する基準の見直しが求められるようになったことから、災害拠点施設の整備など安全で安心なまちづくりの取り組みを進める。

視点4：多様な主体による協働と広域的な見地からの政策立案

行政をはじめ、市民、地域、議会、企業、NPOなどの多様な主体が、その責任や能力に応じて協力しながらまちづくりを進めます。

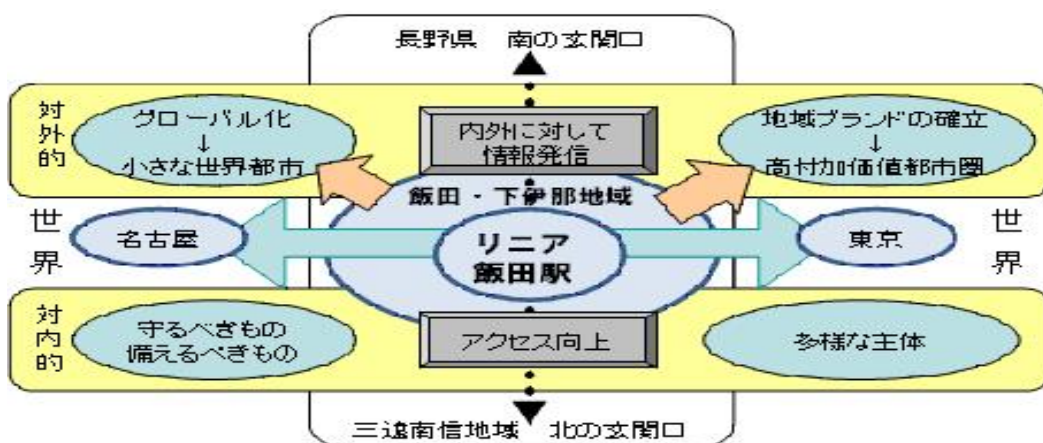
また、今後の人口減少や少子高齢化の進行など、社会構造の変化に対応していくため、市町村の枠組みを越えて役割分担と連携しながら、これまでの「南信州広域連合・定住自立圏」などの取り組みをさらに進めるとともに、広域的な見地からの政策立案に取り組む。

上記の視点は、これからの飯田市において、リニアなど経済の発展の象徴である建造物が自分のまちの中にできることを利用し人口減少などを抑えようという考えは、自分の生まれたまちと似ている状況である。高速道路のインターチェンジが作られており、交通の便がよくなること、それに伴い道の駅ができ観光客だけでなく地元の人たちも利用し生活に活かすことができる環境ができています。リニアができる飯田市と似ており、学ぶことはとても意味がある。また浜岡原発の近い自分のふるさととは東日本大震災のような巨大地震がくるといわれている今、飯田市と同じ視点で災害時の拠点を整備しておくことの重要性をもっと学ぶ必要があると思った。

リニア中央新幹線を見据えたまちづくり

南信州広域連合は、リニア時代を見据え「リニア将来ビジョン」を策定した。飯田市はこれを第5次基本構想・後期基本計画に反映させ、21世紀型の戦略的地域づくりを進めている。単なる利便性だけにとまらず、デザイン思考的アプローチという視座から、訪れる人に感動を与え、住む人が誇りに思えるような地域づくりをしていくことを念頭に置いている。

リニア将来ビジョンが目指す地域像



「リニア将来ビジョン」が目指す地域の将来像は、対外的には日本のモデル的事業の展開や世界へ誇れる「小さな、世界都市」や多機能高付加価値都市圏を掲げている。

また対内的には、地域の主導によって先人が培ってきた文化や伝統を守り、自ら考える地域づくりを進めるため「多様な主体」の活躍や「守るべきものは守って未来に伝え、備えるべきものは備えていく」ことを掲げている。はし

ロードマップにおける「3本柱」と「三つくり」

リニア推進ロードマップは、大きくリニア中央新幹線の開業を見据えた3つの分野「リニア本体工事関連」「社会基盤整備関連」「戦略的地域づくり」で構成されておりこれらを3本柱と称し、それぞれに関する取

り組みをロードマップ総括表に登載している。

・3 本柱

1.リニア本体工事関連

リニア中央新幹線の早期開業に向けて、建設主体である JR 東海による本線工事に協力することを目的とする事業全般を総括するものであり、長野県をはじめとする関係機関と連携して実施

2.社会基盤整備関連

リニア駅利用者の利便性を高める視点で交通計画や土地利用計画を市民の意見を聞きながら見直すとともに、長野県をはじめとする関係機関と連携しながらリニア開業のプラス効果を広範囲に拡大するための交通ネットワークの整備や駅周辺の社会基盤の整備を担う事業全般を総括する

3.戦略的地域づくり

「デザイン」を核とした、モデル地域の創造を目指すことを方針に掲げて推進していく。その前提として、リニア開業に伴い期待される効果を最大限に発揮するために、市民企業団体等の多様な主体が連携し、創造力や創造力を巡らせてリニア効果を活かす事業を実施

・三つくり

1.産業づくり

【目的】リニア時代を見据え、高付加価値の高い産業づくりを進める

2.人づくり

【目的】ふるさとに誇りを持つ人づくり、飯田を起点にグローバルに活躍できる人づくり、デザイン力を持ち感動を与えるデザイン思考、人づくりを進める

3.地域づくり

【目的】この地域の個性を活かした地域づくりを進める

地育力

地育力向上連携システム推進計画は、少子高齢化や産業の空洞化といった課題を乗り越えて、持続可能な地域を創り出すための人材育成システムを形作り、地域を担い、様々な分野で活躍する人材を生み出す飯田の教育の土壌を豊かにすることを目的として、平成 18 年度に策定された。本計画は、第 5 次飯田市基本構想がめざす都市像『住み続けたいまち住んでみたいまち飯田人も自然も輝く文化経済自立都市』を実現する上での最重点課題である「人材のサイクル」の構築に向けた産業づくり・人づくり・地域づくりの総合的な推進における、人づくり分野の重点計画に位置づけられてきた。

・体験活動

自然・歴史・文化など、この地域の資源を活かし、特に世代の違う人たちとの関わりの中で体験することは、地域のことに関心を持ち、ふるさとへの想いを育むことにつながる。普段何気なく見過ごしている山川には、人が生きていくうえでとても大切な要素がたくさん詰まっている。先祖代々から受け継がれてきたお祭りには、多くの人々の「想い」が詰まっている。城下町である飯田には、昔ながらの高い技術を持った職人さんが何人もおられる。心を揺り動かされ、深い感動を与えられる「ほんものの体験」をすることができる資源が、この飯田の地には豊富に存在しており、その資源を存分に活かした体験の機会を、発掘し、確保し、提供していく。

・キャリア教育

飯田には、商工業、建設業、介護福祉施設などをはじめ多種多様な産業が集積していく。この資源を活かして、子どもたちが社会との接点を持ち、将来生きていく場所を実感するための機会として、職場体験学習を中心とするキャリア教育を促進していき、特に、小中学生の職場見学や職場体験学習については、教育委員会がコーディネーター役となり、体験のための職場開拓を支援する。また、より体験しやすい環境づくりにも努めながら、学校・家庭・地域が協力し、質の高い「飯田型」のキャリア教育を目指して取り組んでいく。

併せて、このキャリア教育を通じて、飯田市のまちづくりの基本方針となる第5次基本構想・基本計画に掲げる「ふるさと意識の醸成」を進め、「地域の子どもは地域で育てる」という意識を共有しつつ、地域経済やまちづくりなど地域の活性化につなげていきたいと考えていく

・人材育成ネットワーク

地域の研究者や研究機関、社会教育機関が密接に連携し、地域や学校、企業などの人材を育成して、地育力を高めていくために人材育成ネットワークをつくる。

具体的には、地域にある専門学校や短期大学、歴史等の研究団体、教育機関などがネットワークを形成し、研修や教育の機会を提供するしくみづくりを進め、また、体験活動を行う市民団体・子育て支援者の養成やネットワークの形成など、人材育成のための様々な取り組みを進めていきます。

・地育力の向上が必要な背景（人口減少の問題）

現在の飯田市の人口は約10万7千人です。

近年、日本は人口減少時代に突入し、合計特殊出生率の低下が急速に進行していることが原因とされているが、飯田市においても、このまま何も手を施さないでいると、平成27年には約10万人まで人口が減少すると推測されている。この飯田の地域社会を持続可能なものにするためにも、この人口減少の流れをなんとか最小限に食い止める必要がある。

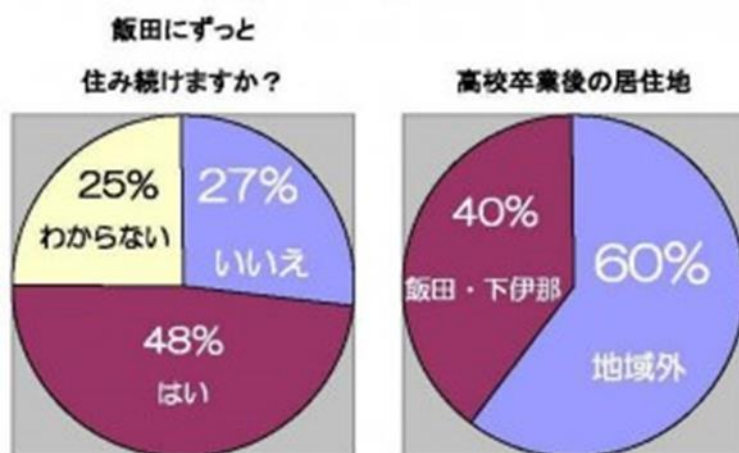
しかし、最近実施した調査によると、高校卒業後も引き続き飯田に住み続けている人、また、進学・就職などで一度は飯田を離れても帰郷する人など、最終的に飯田に住む人の割合は、全体の4割程度に留まっているという残念なデータがある。

このような状況の中で最も大切なことは、出生人口やI・Jターン者の増加もさることながら、飯田で生まれ育った人たちが住み続ける、あるいは一度飯田を離れてもいずれは帰ってきて活躍し、この地域で次の世代を育む、といった長期的な人々の営みを促進することが必要である。

飯田市では、このことを「人材サイクル」と呼び、その実現に向けて様々な取り組みを行い、持続可能な地域社会の構築を目指していく。

この地育
よる若者の
町に帰って
り出すこと
化に悩む市
われる。この
とても効果
を遅らせる
れえていく

高校生アンケートより



力の向上は少子高齢化に
減少を弱め、若者がまた
くるというサイクルを作
は、全国どこの少子高齢
町村で効果をみせると思
形を確立していくことは、
的で現代の過疎化の進行
ことができるので取り入
ことがいいと思う。

飯田市

中心市街地活

活性化基本計画

・中心街の位置づけ

土地利用基本方針における位置づけ

中心拠点、地域拠点及び交流拠点並びに広域交通拠点が、それぞれの役割に応じて機能分担がなされ、有機的に相互連携した「拠点集約連携型都市構造」を推進する。

■リニア推進ロードマップにおける位置づけ

「リニア中央新幹線の開業を見据えた基盤整備の考え方」により、リニア飯田駅及び駅周辺を「広域交通の拠点」とし、中心市街地と現 JR 飯田駅を「中心拠点」、各地区中心部を「地域拠点」として位置付け、それぞれを結ぶ交通ネットワークの構築をする。

【中心拠点】様々な都市機能が蓄積され、都市の中心としての機能を持ち、いわゆる飯田市の「顔」である中心市街地を「中心拠点」として位置づける。

【地域拠点】各地区の市役所自治振興センターや公民館等のコミュニティ施設が集積された中心部を「地域拠点」と位置づける。

【交流拠点】天竜峡エコバレー地域を環境、産業、生活等の新たな「交流拠点」として位置づける。

【広域交通拠点】リニア駅及びその周辺区域を地域と大都市とを結ぶ「広域交通拠点」として位置づける。

中心市街地の課題と将来像

重点課題

- ・地域の魅力のさらなる向上
- 飯田らしい個性と飯田ならではの魅力に富む都市形成
- ・商店街活性化
- 新たな視点による魅力的な店舗群の創造
- ・まちなか移住の推進
- 当地域にふさわしい居住のあり方の追究
- ・交通基盤の強化
- 公共交通の利用促進等、総合的な交通戦略

中心地街の将来像

リニア中央新幹線の開通を見据え、中心市街地（中心拠点）の魅力や求心力（中心性）をたかめることにより、そのメリットを飯田下伊那地域全体へとつないでいく。

交流	様々な世代による主体的な活動と交流・連携を育む 歩いて楽しい潤いと安らぎに満ちた空間の創出
産業	多様なライフスタイルを可能とする 知財・ソフト・デザインなど新たな産業分野と人材の誘導
居住	心豊かな暮らしを実現できる 低炭素で魅力ある都市基盤（住まい・オフィス・乗り物）づくり

中心市街地の将来像をつくり上げていくための拠点

りんご並木
並木通りと中央公園がつくり出す緑のネットワーク
並木通りと中央公園が交差する周辺
飯田駅周辺
橋北地区（仲ノ町周辺）の歴史的街並み



小さな世界都市の実現

右は中央公園付近の将来像で、中心都市の開発を進め、中央公園のほかに、りんご並木や飯田駅周辺など、様々な開発が進められる。

基本方針

1. アクセスしやすい都市交通基盤整備
2. 多様な主体の連携と交流 によるまちづくりの推進
3. 地域固有の価値の再認識
4. 暮らしの視点からの新たな価値創造

活性化の目標

目標 1 人々の交流によるにぎわいの回復

目標 2 地域の魅力再発見による文化的
創造

目標 3 環境に配慮し安心安全な暮らし

基本方針の 1.2 が目標 1 に 3 が目標 4
へとつながる。それぞれが次に
数値目標として歩行者・自転車の数や
者数など結果として表れるようになって
により中心地街の活性化が数字として
で政策がどれだけの効果を発揮したの



暮らしの創

の実現

に 4 が目標 3

施設の利用
している。それ
見られるの
かがわかる。

基本計画の事業

・意外地の整備改善 21 事業

クオリティ道路整備事業、中央公園の再生・整備事業、栄公園整備事業、菱田春草生誕地整備活用事業、仲ノ町まちなみ環境整備事業、桜並木整備事業、りんご並木再整備事業など

・都市福利の推進 8 事業

旧飯田測候所活用事業、子育て・子どもサロン等の拠点整備事業、お年寄りサロン等の機能強化事業、コミュニティ形成・公共施設機能強化事業、まちなか健康福祉拠点活用事業、扇町公園活用事業、りんご庁舎再整備事業、美術博物館改修事業

・まちなか居住の推進 4 事業

まちなか住宅開発事業、まちなか住宅・オフィスバンク促進支援事業、まちなか居住・就労促進プログラム、大都市圏のセカンドオフィス・セカンドハウス等誘導事業

・商業の活性化 21 事業

りんご並木周辺商業施設等整備事業、歩行者優先道路活用事業、地域ミュージアムを活かしたまちづくり事業、りんご並木賑わいづくり事業、ツアー・オブ・ジャパン南信州ステージ開催事業、飯田りんごん開催事業、いいだ人形劇フェスタ開催事業など

・公共交通機関の利便性の増進

駅周辺及び駅前ストリートの整備事業、環境配慮型まちづくり事業、公共交通利用促進事業、拠点型駐車場

まとめ

飯田市では、数多くの都市計画があることを知ることができた。少子高齢化が進む中、若者が自分たちの町に戻ってくるというサイクルを作ること、中心地街を活性化させ、観光客や地元に住んでいる人たちがより生活しやすくなるように事業を行っていること、リニアが開業することに伴い、交通機関の活性化がもたらす効果逃さない政策をすることができた。自分の住んできた町では、飯田市のように数多くの政策を行っているようには思えない。自分の町も大学がないため、また都会の大学に通うには交通が不便なため、学業のため出て行ってしまいそのままそこで就職してしまうことが多いと思う。似たようなところの多い飯田市は、人材サイクルを確実な形にし、若者の流出を抑える計画は、見習うべきところであると思った。飯田市について知ることにより、過疎化に苦しむ町がどうすれば改善されていくかを知ることができるのではないかと考える。

社会フィールドワークまとめ

・地域自治と公民館活動

飯田市では、地域自治として公民館を配置し、住民一人一人の意思が反映されるまちづくりを行っている。飯田市における地域自治の仕組みまた飯田市はどんな町なのかということに関する 10 章がある。

こうして飯田市では、行政・自治区・公民館の三位一体のまちづくりをしている。そしてムトス飯田を合言葉に、住民の声を反映する町である。

この飯田市の公民館活動は、ほかの場所ではなかなか見ない光景だなと感じた。飯田市ほど公民館活動として、地域の人が町のために働いているところに素晴らしいと感じた。また、鎮守の杜構想を掲げ、十三の郷として集落を分け、それぞれに活動を行い、行動計画を作りまちのために動いている。こういった活動は、地域の団結力を深め、それがまちのための活動になっていくのでいいと思った。公民館活動は全国の市が取り入れることで静かな公民館が明るくなっていくと感じた。

・ワーキングホリデー、農家民泊

実際に農家民泊をしている方の話を近いところで聞くことのできるいい機会だった。自分たちのような農家民泊などにくる人たちが聞くことができなくなった話を聞けたのでまたいつか行くかもしれないときに聞いた話を忘れないようにしたい。泊めてくださる農家の方たちもたいへんな思いをして自分たちに体験させてくれていることを知ることができた。それでもワーキングホリデーで最盛期の人手不足を補うためのものでもあるが、それは互いに有益であるので全国に広まればいいと思った。

・地方創生に向けた人材サイクル

飯田市は、日本の少子高齢化よりも早いスピードで、若者の減少が進んでいる。1945 年に戦争のため疎開した人たちが集まった時をピークに達し、2010 年よりかなり人口の減少が大きくなっている。そのために人口減少を少しでも抑えるための政策を牧野市長は行っている。

1922 年大火事により町の約 8 割を消失した。その後の復興で火事が町で干渉しないように幅 30 メートルの空間が町の中心に設けられる。そのあいた土地を中学生たちの意見を取り入れて、リング並木にしたこと。それは今の飯田市民をひとつにするためのとてもいいものだったと思った。中心街にあるりんご並木のりんごは盗まれた過去はあるものの現在では、誰も取らなくなり市民たちはとらないのが当たり前になっている。このような市民たちの団結を生み出すことは活性化に繋がるのではないかと考える。

若者の流出が多くなっている飯田市では、町を離れた若者がまた町に戻ってきてくれるよういするための活動もある。人材サイクルを構築していくことである。多くの飯田市の若者は自分の町について何も知らず、年齢を

重ねるごとに地域との繋がりが薄くなっていく。そして約8割の若者が高校を卒業後、一度町を離れることになる。こうした現状を解決するため人材サイクルを構築し、若者が高校卒業までに、地域に愛着を持てる人材に育成することを重要にしている。そうすることで、地域に若者が戻ってきてくれる状態を作っていくことを進めている。人材サイクルの構築は、自分の町でも経験している高校生になるにつれて地域の祭りなどにも参加しなくなっていくことを感じていた。そう考えると、地域にもっと多く触れることを増やし、地域に戻ってきてくなる体制を作っていくことがさまざまな町にも広まっていくことが少子高齢化や経済活性化に繋がると思う。

そして牧野市長の話でとてもいいと感じたのは地域医療の充実度である。長野の高齢化率は日本の全国平均を超えている。しかし医師数は平均よりも少なくなっているが、寿命は日本一である。保険料、医療費なども全国平均をいいほうで上回っている。この状態は、全国で見てもとてもいいほうで、この医療形態がどのようにして成立しているのか。これを知ることにより高齢化している日本を少しでも宇食うことになるのではないかなと思う。正直、飯田市では、それぞれの病院での信頼関係により、カルテの共有などが、どの病院でもできる。この関係を作ることは全国の町で行うのは難しいのではないかなと思う。そうした中で飯田市は、高い地域医療の形態を作り出し、全国的に見ても高水準の医療を行っているところは素晴らしいと思った。

・飯田りんごん

飯田市でとても多くの人々が参加する飯田りんごんに参加してみて、各地区や自分たちのチーム、クラスで参加するりんごんは飯田の人たちがとても楽しそうにやっていて、また地区の人たちみんなで、団結して行う姿はとてもよく、このお祭りが地域の伝統として活性化に役立っていくのだろうと思った。

・おひさま進歩エネルギーの取り組み

環境文化都市を目指す飯田市を中心に、南信州でエネルギーの地産地消を行い循環型社会構築のために、市民がで、市民でないとできないことがあるはずと立ち上がったNPOを設立したのが最初である。

でソーラーパネルを取り付け、それを利用してもらうことが最初の発電所であった。南信州おひさまファンドを作り、日本初の市民からの大規模な市民出資を受けるものである。省エネになるなど出資者の気持ちとお金により、エネルギーを地産地消していく。

おひさまファンドの太陽光発電事業のポイントは20年の長期契約と22円/kwhの買取契約である。これは前例のない新しい公共の一例である。しかし出資者の内訳は、飯田市が一番多いものの、自然エネルギーの発電に結果が出ることを見込んで北海道など自然エネルギーの豊富な地域からの出資も多い。それから考えられるのは、すべての発電による利益が飯田市にすべて活かされるわけではないということである。より飯田市の市民が太陽光発電に力を入れることが必要だと思った。

そして、おひさま0円システムという無料でパネルを設置し、家庭でも太陽光発電を行ってもらうものである。発電で余った電力は電力会社が買い取ってくれ、10年以降は、譲渡になりすべて利益になるというものである。しかし10年以降からしか大きな利益は得られないため、お年寄りしかいない家庭では普及が難しい。飯田市のどんな人でも、0円システムを利用できるような対策がないと思うように、多くの家庭で利用してもらうことはできない。であるため、お年寄りの子供たちが契約を続けて利用してくれるよう、飯田市に戻って住んでもらうように、市が政策を進めていく必要がある。

・まとめ

飯田市には、市が自分たちで行う町の活性化のほかに、飯田まちおこしカンパニーなどの事業として市民を第一にした開発事業を行う会社もある。こうした会社があることにより、市民を優先した事業が進められるため、町の発展が市民の生活に繋がるため、市民のより事業への関心が高くなる。自分は自分の生まれた町のことを深く知らないが、こうした会社の存在があることを知らない。飯田市にいて自分の町について何も知らないことが多く、また知らないからこそ自分の町に関心を持てていなかったと思った。

前億でも進んでいる少子高齢化は自分の町でも進んでいる。飯田市が進めている人材サイクルの構築は、若者が再び町に戻ってくるための考えである。飯田市で行われている地域人教育や公民館活動は、地元の若者に住んでいる地域のことを知ってもらうことができ、今まで知らずに出て行っていた状態を改ざんすることができる。自分も、年齢を重ねるごとに地域の祭りに参加することがなくなり、地域との関わりが薄くなったときから名古屋に住むようになった。生まれた町のことをあまりしることなく、どのような政策を行い、町を发展させているのかも知らないなのでそう考えると飯田市の政策は若者が阿知に帰ってくるためにはとてもいいものだと感じた。

今回飯田市に行き、自分の生まれた町についてほとんど知らないことを知ることができた。地域について知ることが、高齢化が進む町に人が帰ってくるようになること、市民が進んで町のために動くことが発展に繋がると知ることができた。

情報センター

飯田市 環境政策

清水祐希

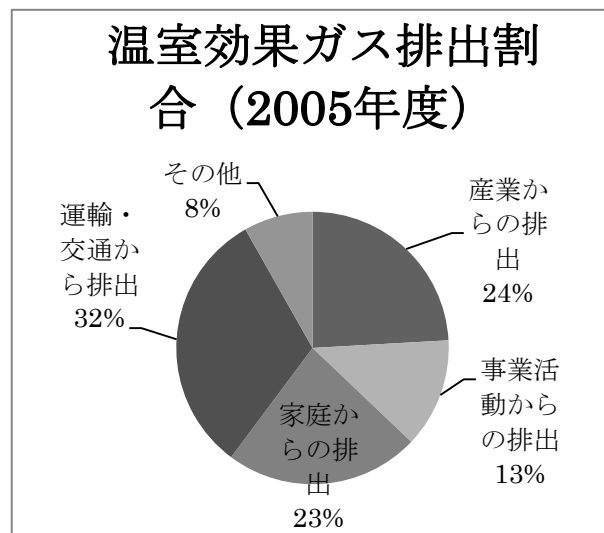
はじめに

飯田市は、長野県南部に位置し、愛知県三河地方や静岡県西部と近接する。市の東側に南アルプス、西側に中央アルプスがそびえ、南北に天竜川が流れる。そこに河岸段丘の谷地形の盆地が広がる。降雪もあり、年間降水量は数字上比較的多いが、日照時間は 1981～2010 年の平均で年間 2,050 時間に達し、全国的にも長い地域の一つである。年間平均の日射量（新エネルギー財団データ：1961～90 年の最適傾斜角日射量）についても同市は 4.15 kWh/m²と、東京（同 3.74 kWh/m²）や大阪（同 3.92 kWh/m²）などに比べてかなり高い。このような気候は、太陽光発電に適するものである。

飯田市は政府が設定している環境モデル都市であり、環境政策に力を入れている。飯田市一帯は『おひさま』と『もり』のエネルギー炭素な環境文化都市の創造である。

飯田市が掲げている目標として、2030 年主要部門での CO₂ 排出量を 2005 年の排出量から 50%削減。2050 年には地域全体の CO₂ 排出 2005 年の排出量から 70%削減すると掲げて本の目標で 2030 年に 2005 年比で 25%削減している。政府の目標を大きく上回る飯田市らしい目標を達成するために多くの環境政策を

※飯田市の温室効果排出割合(2005 年)



市の一つ提案のテが育む低

でに家庭 40 ～ 量を いる。日 を目標と はこの厳 について

環境文化都市

飯田市では、1996 年に目指す都市像として「環境文化都市」を掲げ、平成 19 年 3 月にこの宣言を発表した

平成 19 年 3 月 23 日

私たち飯田市民は、地球環境問題が人類共通の課題であることに着目し、人と自然のかかわりを見つめ直して、日々の生活から産業活動まですべての営みが自然と調和するまちづくりに、先駆的に取り組んできました。

自然環境や生活環境などを取り巻く状況が厳しさの度を増している今日、「持続可能性」と「循環」を基本にして自分たちのライフスタイルから社会の有り様に至るまでをあらためて見直し、「環境に配慮」する日常の活動を「環境を優先」する段階へと発展させながら、新たな価値観や文化の創造へと高めていく必要があります。

私たちは、かけがえのない地球にある生態系の中で自然と共生する地球市民の一員としての原点に立ち返り、先人から受け継いだ美しい自然環境と多様で豊かな文化を活かしながら、市民、事業者、行政など多様な主体の積極的な参加と行動とによって人も自然も輝く個性ある飯田市を築くことを誓い、ここに「環境文化都市」を宣言します。

取り組み

はじめに取り上げたように飯田市は環境省に選定された飯田市の事業を担う民間企業として、「NPO法人南信州おひさま進歩」が母体となって「おひさま進歩エネルギー有限会社」を設立。太陽光発電は私たちにとって身近であり、再生可能エネルギーのなかでも最も知名度のある方法である。太陽光パネルの設置場所は企業だけでなく、各家庭にも取り付ける時代となった。各家庭で発電した電気を政府が買い取る、「固定価格買い取り制度」により、各家庭の設置率が普及した。しかし太陽光パネルの設置には多額の費用がいる。

2004 年 NPO 法人「南信州おひさま進歩」を立ち上げた。立ち上げと同時に市民出資の準備を行い、05 年 2 月より募集を開始した。予想を遥かに超える募集額を得ることができた。

おひさまファンドは太陽光発電を中心とした自然エネルギー設備の導入事業及び自然エネルギー事業を行う事業者へ出資する。事業の収益及び出資の分配金から、出資者に元本の還元と利益を還元する仕組み。

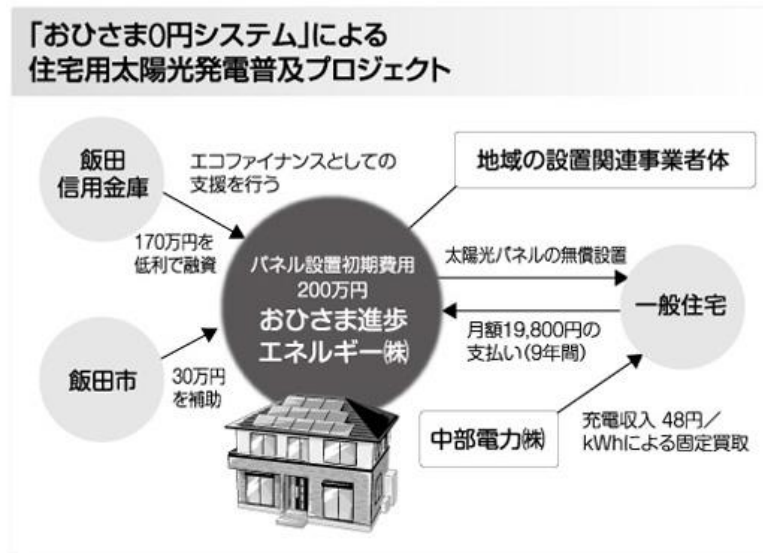


「おひさま進歩エネルギー」は、1990 年代に北欧で広がった地域エネルギーの取り組みに学び、「エネルギーを自分の意思で選びとる」というエネルギー デモクラシーを地域のエネルギー事業として実現することを使命に、市民出資による太陽光発電事業・省エネルギー事業を行った。市民からの出資を募った「南信州おひさまファンド」は募集期限を待たずに募集枠約 2 億円を満了し、市民の意思ある資金と環境省の交付金によって、飯田市内の保育園など公共施設に太陽光パネルが設置され、省エネルギーサービスが展開されました。国内に前例のない地域エネルギー事業であったため、多くの困難にぶつかりながらも、「おひさま進歩エネルギー」は環境エネルギー政策研究所をはじめとするさまざまな関係者との協働によって事業を成功させた。

疑問点：なぜ 2 億円をすぐ募集できたのか。

おひさま 0 円システム

「おひさま 0 円システム」は、市民出資によって得た資金で太陽光パネルを 0 円で設置できるシステムである。飯田市と飯田信用金庫からの融資を受けた「おひさまグリッド」が管理する太陽光の普及事業である。市民は初期費用をかけずに太陽光パネルし、9 年間毎月定額を支払いな剰電力から売電収入を得ること 10 年目以降は完全に譲渡されみである。



国は、2009 年 11 月から太陽光発電余剰電力固定価格買取制度（以下「固定買取」）をスタートさせた。これに合わせ飯田市は、地元の環境ベンチャー企業であるおひさま進歩エネルギー株式会社（以下「おひさま進歩」）と共同で「おひさま 0 円システム」を考案し、固定買取と太陽光市民共同発電事業を活用した住宅への太陽光発電設備の普及に取り組んでいる。

これらの結果、2013 年 3 月末時点で太陽光の世帯普及率が 5% を超え、全国でも先駆的な都市となっている（3% でも相当普及していると言われる）。また、「おひさまファンド」による事業は 318 カ所に及び、年間 2601 トンの CO2 削減に寄与している。

もともと北海道で風力発電のファンド事業のコンサルタントを行っていた飯田哲也氏とおひさま進歩エネルギーの代表の原氏が旧知の間柄で、飯田市でも似たような仕組みを導入できないか、ということで検討が始められた。外部からの発案が地域にうまく溶け込み、仕組みとして確立することになった。

30 件の募集に対し 60 件を超える申し込みを得る人気ぶりであった。この経済効果は約 6,000 万円と試算されている。

ネックとなったのは、発電設備の設置費用である。さらに、持続可能性の観点からは地域にお金が回る仕組み、民間が自律的に資金を回せるようにする仕組みの創設が求められる。

そのためには、地域金融機関（ここでは飯田信用金庫）の協力が不可欠となる。そこで、融資先の信用力とは

別にプロジェクト自体から生じるキャッシュフローをもとに融資に関する意思決定を行うプロジェクト・ファイナンスという手法を用い、担保がなくても融資が可能なシステムを構築した。

また、本システムは設置者がおひさま進歩なので太陽光発電普及拡大センター（J-PEC）の補助対象外になる。代わりに市は独自財源をおひさま進歩に補助している（市は1キロワット当たりの補助額をJ-PECの補助水準に連動させている）。

さらに、0円で設置した設備は9年間で（おひさま進歩との）個人契約者へ譲渡されるが、

9年後のリスクを見越して、契約書の内容を市とおひさま進歩が共同で作成し、商品として成り立つようなパッケージ化を行った。

2010年度からは、徐々に民間の自立度向上、多様な主体の参加促進をめざし、本システムの運営希望者を公募型プロポーザル方式で募集、最優秀提案のあった1社に事業実施のための補助金を交付することとし、その結果、おひさま進歩が選ばれた。

おひさま進歩は、この補助金のほか、市民出資募集などの自律的なファンドマネジメントと金融機関からの融資を組み合わせで実施した。市はこのプロジェクトの広報に力を注いでいるものの、プロポーザルに応募した事業者はまだ多くない。

また、太陽光発電をめぐり、設置した市民と事業者との間のトラブルも増えている。

そこで2011年度は、当該事業の公益性をさらにブラッシュアップさせることに焦点を当て、プロポーザルのルールを規定した要綱を見なおした。例えば選抜基準を公表し、採択・不採択を問わず選抜の理由をきめ細かく応募者にバックすることや、より提案の質を高めていくために前年度と比較して改善されたところの提案を優先するようにした。

その結果、2011年度も採択されたおひさま進歩の提案には、太陽光発電で生まれる環境価値を地域版エコポイントとして地域で流通する仕組みを構築する、というチャレンジングな企画が追加された。

本事業は、自治体単独で実現することは困難であり、おひさま進歩が従来までに培ってきたノウハウと、公益性の高い事業に対する飯田信用金庫の理解があって初めて実現できた事業であり、地域内のステークホルダーの連携という点でも先駆的である。

2012年の例

【設置メニュー】

2.5kW ⇒ 14,500円 3.3kW ⇒ 18,000円 4.4kW ⇒ 21,000円

（上記金額を元に、市町村ごとに補助金を適用）

$18,000 \times 12 \times 9 = 1,944,000$ 円

飯田市メガソーラー

飯田市は、一般家庭の住宅や公共施設の屋根などに太陽光発電システムの設置の推進をしてきたが、山かげなどの関係から太陽光発電の効率が低い場所も少なくない。そのような制約もあるなかで、地域内の電力消費を地域の中の再生可能エネルギーによって創生される電力でまかなって行きたいという理念を進める形で具体化したのが、発電出力1,000kW＝1メガワットの太陽光発電所「メガソーラーいいだ」である。同発電所は、同市と中部電力との協定事業跡地である市有地の小高い丘を整地し、建設された。1.8ヘクタールの敷地に（縦）：約1m65cm×（横）：約99cmのパネル（モジュール）が約4,700枚敷き詰められている。

高台の同所からは絶好の眺望も楽しめ、行政・議会関係の視察のほか、エネルギー教育とレクリエーションを

兼ねた子供連れの家族や学校関係の見学も多いようである。同発電所は、構想着手からは6か月弱の短期間で、11年1月末から営業運転を開始した。一般家庭約300戸分の年間使用電力に相当する発電量（想定年間発電量100万kWh）が見込まれており、設備稼働率も上々のようである。

同所で発電した電気は、中部電力との合いにより、遠方に送電するための超高圧送電線に連係されず、地元の変電所に送電され近隣地区で消費されるようになっている。市内の限定された地区での試みではあるが、再生可能エネルギー電気を地域分散型・地域自立的に生み出し活用していく歩みの一歩と言える。



※飯田市ホームページより

導入事例

明星保育園

市民出資の資金より
太陽光パネル（3kw）設置

また園児などへ環境意識向上のための環境パネルシアター



を実施。

精琴堂楽器

長野県飯田市の楽器店、音楽教室も開いている

市民出資の資金により
高効率省エネエアコン： 16 台
スパーモジュールマルチ(室外機)： 1 台
を導入

同店は老朽化の進んだガス吸収式空調から高効率コンに改修。
設備の導入および更新による二酸化炭素排出量の年間約 21 トン となり、年間ガス 6,157 m³ 削減。



省エネエア
削減効果は

湯ったり～な昼神

温泉施設

市民出資の資金により
太陽熱温水システムの設置：蓄熱槽 6 トン
空冷ヒートポンプの導入：加熱能力 126 k w
インバーター制御装置：空調機 6 台制御

同施設は、灯油ボイラーによる温泉施設の給湯熱温水システムを設置。空冷ヒートポンプに
ールの昇温や給湯を行った。さらにインバー
置を循環ポンプ等に導入、電力消費量を削減し
設備の導入および更新による二酸化炭素排出量
は年間 134 トンとなり、年間灯油 78 キロリットル削減した



などに太陽
よる温水プ
ター制御装
た。
の削減効果

バイオマスタウン

ねらい

飯田市は美しい自然環境と多様で豊かな文化を活かしながら、市民・事業者・行政など多様な主体の積極的な参加と行動によって、人も自然も輝く個性ある地域を築くため、長期的な目指す都市像として環境文化都市を掲げている。また、平成 21 年 1 月に選定を受けた環境モデル都市行動計画では、全市域の 84%を占める豊富な森林資源を中心に、バイオマス資源を有効利用してゆくことを掲げている。さらに、平成 20 年度に策定された飯田市中心間地域振興計画における地域活性化の視点からも、森林資源を中心としたバイオマス資源の有効利用は欠かせない。

このような将来的に目指すべき地域社会を実現するため、本構想を策定することにより、地域に賦存するバイオマス資源の利活用と、バイオマス資源の活用から地域経済と地域の環境保全が好循環する持続可能な循環型地域づくりを推進する。

地域のバイオマス利活用方法

【未利用バイオマス】

飯田市の面積のうち 84%が森林であり、間伐材や枝葉、林地残材等豊かな木質バイオマス資源を有している。一方、林業従事者の高齢化、担い手不足や、日本でも有数の急峻な地形により基盤整備が立ち後れ、間伐材の搬出 等も経費がかかることから困難な状況が続いており、林業を取り巻く状況は厳しい。また地域産材の利用促進においても、拠点となりうる製材施設の整備や地域産材の ブランド化などの課題も抱えている。現在、飯伊森林組合をはじめ、素材生産者、製材所、工務店、設計士、行政等の関係者が一体となって、「南信州木づかいネットワーク」を設立し、素材生産から木材製品加工流通、消費までの一貫した流れを再構築する取り組みが始まっている。また、木質ペレットについては、平成 16 年に民間事業者 5 社により、「南信バイオマス協同組合」が設立され、木質ペレットを製造して地域内外に供給している。このような状況を踏まえ、当地域では木質ペレットによるエネルギー利用の推進を中心として、未利用バイオマス資源の利活用を推進する。

【廃棄物系バイオマス】

循環型地域社会を形成する上で、生産、消費の拡大や生活様式の多様化に伴い、事業活動 や日常生活から排出される廃棄物の排出を抑制することが重要になってくる。「21世紀環境プラン」等の計画において推進する廃棄物の排出抑制施策と連携し、廃棄物の排出を可能な限り抑制するとともに、排出された廃棄物についてはできる限り再利用、再資源化を図る ことで、廃棄物系バイオマスの有効利用を推進する。

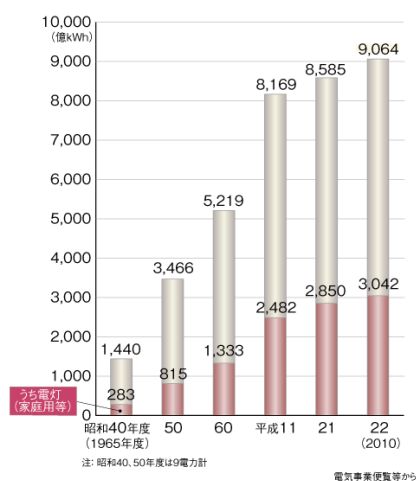
日本のエネルギー事情

日本の電力需要は、便利さを求めるライフスタイルの変戦後ほぼ一貫して伸び続けている。日本の電力消費量はこ（1970～2010 年度）で約 3.5 倍に増加し、アメリカ・中世界第三位の多さとなっている。また一人あたりの電力消費第四位となっている。

日本では、家庭での電気の消費量の伸びが近年著しく、の進展や高齢化の進行によって販売電力量全体の 3 割を電など）が占めている。

地球温暖化防止のために重要な発電方法であった原子力北の大震災で安全性が問題となった。原子力発電が普及して、燃料のウランが供給安定性に優れていたからである。入ができ、輸送や備蓄が容易で、使用済み燃料もリサイクルなどで、メリットが大きかった。しかし今回のような想定災害が起きた場合に、原発の大きな問題である、放射性物必要となる。しかし台風や地震などの災害が多い日本では、原子力発電は適切な方法といえるだろうか。

販売電力量の推移 [10電力計]



化もあり、
の 40 年間
国に次いで
費量でも世

情報化社会
灯（家庭用

発電は、東
た理由とし
安定して輸
ルできる点
外の大きな
質の対策が

再生可能エネルギー

改めて再生可能エネルギーとは、太陽光・風力・水力・地熱など永続的に利用することができるエネルギーのことである。石油や石炭、天然ガスなどの化石燃料と異なり枯渇する恐れもない。また海外からの輸入に頼ることなく、調達リスクなどが無い国産エネルギーで、エネルギー資源の 96%を海外から輸入に頼る日本エネルギーの向上にも繋がる。また発電時に CO₂を排出しないため環境への負荷も極めて少ないメリットがある。



※外務省HPより

エネルギー政策が好景気のカギとなる

日本はバブル崩壊後長く続く不況の状況にあり、この現状は「失われた 20 年」とも言われている。不況から抜け出すためには需要が必要である。過去の日本では高度経済成長と呼ばれる好景気があった。この頃は戦争によってすべてを失い、あらゆるところで需要が存在していた。しかしモノがあふれている現在では、需要がある

ところは限られている。世の中は共通資産である地球を守ろうと環境への取り組みが活発になっている。過去での石炭による蒸気機関、石油によるエンジンなど、エネルギー転換によって好景気を生み出していた。つまり再生可能エネルギーの転換によるエネルギー転換に伴う産業構造の改革で不況を抜け出していくことが可能であるだろう。

ここで注意しなければならないのが、政府が適切な役割を担う必要があることだ。小泉構造内閣では「痛みを伴う改革」で規制緩和を行い、新しい産業を生もうとした。しかし政府は市場の動きに任せたため、新しい産業が生まれることなく、既存の産業が衰退させてしまった。つまり、今回取り上げた飯田市が取り組んでいるように、政府が適切な役割を行う必要がある。

おわりに

飯田市がこれまで取り上げた環境政策を通じて最終的な目標としているのが、

帰ってこられる
「産業づくり」

住み続けたいと感じる
「地域づくり」

帰って来たいと考える
「人づくり」

この3つである。

地域の企業と共同で環境対策への製品開発や地域の電力会社と共同でメガソーラー発電所の建設を行うなど、地元企業との連携を通して、環境政策を行っている。

形としては環境への取り組みだが、環境を通して、飯田市の掲げる自立都市。自立度が上がれば、外に出て行かざるを得なかった子育て世代が、安心して飯田に住めるようになり、高齢者も安心して暮らせるようになり、美しいふるさとを守ること、地域文化の継承も可能となる。

東日本大震災は、故郷の自然、地域社会、人々の暮らしと命を一瞬にして破壊し、私たちに自然の猛威と人知の未熟さを痛感させた。私たちの生活は、普段は意識していなくても、母なる自然の営みの中にあり、多様な生命のつながりの中で営まれている。私たちは、人と自然との関わりの意味をこれまでとは違う重さで受け止め、日々の生活から産業活動までのすべての営みが自然と調和することの大切さを、改めて考える必要がある。今こそ、現在の経済社会システムや生活様式を見直していく「環境優先の時代」が到来しているといえる。環境問題の解決への道のりは、先は長く厳しいものがあるが、「環境」をすべての基本に置いて、持続可能な社会の構築を目指さなければなりません。そのためには、国、地方自治体はもとより、市民、事業者などの全ての主体が、公平に役割を分担し、絆を強め、環境を創るという段階に向かうべきなのである。飯田市は、リニア時代にふさわしい「小さな世界都市・多機能高付加価値都市圏」を目指し、新たな歩みを始めた。環境先進都市として評価されている現在の飯田市の取組みを更に発展させ、長期的な都市像である「環境文化都市」を目指したまちづくりから見習うことがあると感じた。

参考文献

飯田市ホームページ：

<http://www.city.iida.lg.jp/>

おひさまエネルギーファンド株式会社：

<http://www.ohisama-fund.net/>

おひさま進歩エネルギー株式会社：

<http://www.ohisama-energy.co.jp/>

経済産業省 資源エネルギー庁：

http://www.enecho.meti.go.jp/category/saving_and_new/saiene/renewable/outline/

南信州・飯田フィールドスタディを通じて

地域自治と公民館活動

飯田市は、分散行政施設と行政・自治体・公民館の三位一体のまちづくりを行う。

行政が中心のトップダウンだけではなく、地域住民の要求が通る、ボトムアップの推進が活発に行われている。つまり住民一人ひとりの意思が反映するまちづくりが特徴と言える。また公民館が住民同士話し合う場、団結力を高める場所として重要な位置であると感じた。

都市と農村の関係（ワーキングホリデー）

農家の繁忙期に人で不足が生じ、また都市での農作業を体験したいという両者の希望から、飯田市が仲介してこの事業を起こしている。援農は無償ボランティアではあるが、農家は宿泊、食事を提供する。設立時、受け入れるにあたり、家の掃除や食事の用意など、莫大な労力を使うということであることだ。またなかなか者が労力とならないこともあった。

反省会などを通じて、改良を重ね、10年くらいからうまくまわせるようになった。また指導の仕方もよくなり、就労者が労働力となるようになった。

就労側は、農業＝土いじりという印象があるが、農業は販売も含めて農業である。

ワーキングホリデーという機会を通じて、就労者に消費者の立場として意見が聞けるなどのメリットもある。

文化経済自立都市への挑戦

上村の保育園危機の際、牧野市長は潰さなかった。その理由として、上村には伝統的な祭りである「霜月まつり」や様々な文化が存在している。そういった文化を継承するためには、若い人材で代々と受け継ぐ必要がある。ここで保育園を閉園する形をとると、次に小学校が無くなり、やがて若い人が存在しない町となり、文化の継承ができなくなる。

上村では職員が1件1件ヒアリングを行い、実際の現地の要望を聞き、そこから閉園を逃れることができた。

公民館活動や、環境対策など活発になっているが、少子高齢化問題が解消できないでいる。これからの飯田市の課題としてあげられる。

人口減少時代における都市の再構築として、地域の将来を担う人材が確保できなければ、地域の持続は成し得ない。そのために①市外の大学へ出た学生が飯田に戻ってこられるような労働環境の整備として、帰ってこられる「産業づくり」。帰ってきたいと考える「人づくり」住み続けたいと感じる「地域づくり」といった長期的な「人材サイクル」が必要。

現状として、人材を形成していく過程において、小学校時代は地域との関わりが濃いですが、中学、高校と進むにつれて地域との関わりが薄くなってしまふ。とくに高校時代というのは地域の魅力を感じることができ、ふるさとの愛着などを学ぶことができる、良い時代ではあるが、部活動や塾などで、地域との関わりが少なくなってしまう、人材サイクルが構築できないでいる。そのため飯田市では高校時代において、地元のいいところ、特産品、またリヤカー販売などを通して教育する地域人教育や、大学生との関わりを多くする機会を設けるなど、一貫した人材育成が重要としている。その結果、地域に愛着と誇りを持っていれば、進学・就職で一度地域を離れていても、将来的に飯田に戻ってきて、地域を担う人材として活躍することができる。

実際僕の周りの友人も飯田に戻ってきたいという人は多くおり、こういった地域のつながりや学校教育を通じて、成果が出ていると感じている。

人形劇を通じたまちづくり

飯田市の伝統的な文化である人形劇を通じて、市を盛り上げる活動を行っている。人形劇フェスティバルでは行う場所として、地域の公民館、保育園など、飯田市全体で行うことにより、多くの人に親しみを持ってもらう

ことができる。また小学生が手作りの人形劇を演じ、今田人形や黒田人形など地元の伝統的な人形浄瑠璃を演じることにより、文化の継承を行う機会としても重要な役割を行っている。

選択（環境）

地域ぐるみ環境ISOの取り組み

環境問題は、事業所がそのサイト内で取り組んでも、本来の環境問題の解決にはならない。また中小企業や家計は環境へは取り組みにくい。このことから事業所から地域への地域単位で取り組む「ぐるみ運動」として行った。ISOの考え方が家計に伝われば、それはすべての基礎となることができる。また飯田市役所が取り組むことにより、より一層地域ぐるみということが明確となる。

しかしISOの取得は外部審査などで多額の費用となる。この結果、中小企業は取り組みにくい。そこで地域独自の認証で安く登録し、環境の意識を高める「いいむす21」という飯田版ISOを行った。こういった活動から事業所から地域へと広がり、全国へとアピールすることができれば、人やモノを飯田市周辺に呼び込むことができ、地域活性化にも繋がることができる。

おひさま進歩エネルギーの取り組みについて

「環境文化都市」を目指す飯田市を中心にした地域南信州、エネルギーの地産池消で循環社会構築のため、市民ができること、市民ではないとできないことがあるはずという動機でNPOを設立した。

市民出資による資金調達を行い、太陽光パネルの設置の増進を進める。印象に残っている点として、出資者が地域の範囲を超えて県外からの出資者も多く存在しておる点から、地域の金を回すことができていない。そのことから、地元に着している飯田信用金庫から融資を行い、地域の資金を回す役割を果たしている。

2015年の今年、一番初めに発行したファンドが満期を迎え、きちんと元本と利息を支払うことができています。

飯田市の太陽光発電の普及率は約12%と見込んでいます。全国的には3%にとどまっており、全国的からしても高い普及率を誇っている。飯田市ではおひさま進歩のようなNPO団体が数多くあり、実際に飯田市民がこのような活動について知らない人や詳しく理解していない人が多くいるというのが課題と言える。

市民活動

新しいまちづくりのカタチ

丘の上の中心市街地は以前のような賑わいは半減しており、かつての賑わいを取り戻そうとさまざまな活動を行っている。IIDAWAVEはこれらの思いを持った人たちが集まった市民グループである。音楽を通じた活動や、ウォーキングやサイクリングなどの運動、地元の野菜を使った、食事会などを行っている。

音楽活動をするにあたり、地域住民からの苦情も多々あったという。そこで音楽活動を行うにあたり、音楽家の熱い思いを地域住民に伝えることにより、地域住民からの同意をえることができ、お互いに推進できる環境づくりを行っている。

中心市街地活性化の取り組み

飯田の大火でかつての賑わいを失った。飯田東中学校の生徒の「りんごの木を植えた並木道を作りたい」という意見に答え、市も全面協力とその熱意に答えた。大火の経験を活かし市街地には防火用道路として裏界線を作った。大火のなか残った蔵をいかし、街の中のコミュニティの場として生かしている。

りんご並木の周辺では都市開発が行われている。商業面では、テナントを募集する際、地元の企業を誘致している。有名なチェーンを採用すれば、集客率が上がると感じたが、利益が上がらないとすぐ撤退する点と、地元

の発展を願って、地元の企業や、個人経営を採用している。

全体を通して

飯田市は公民館活動を中心に、市民同士協力して地域ぐるみで地元を活性化させようとするというのがとても印象に残っている。確かに私自身飯田市民として地域の活動が当たり前に感じていた。公民館活動を中心に市民の意見が通りやすい点などから、市民が主体となっていくことができ、集落ごとの課題や問題にも柔軟に対応することができる感じた。また以上のような点から地元を愛する気持ちが生まれてくるのではないかな。地方が活性化するためには地方交付金や市の予算に頼るのではなく、地域の産業でお金を生み出すことが大切である。

都市と農村

3年 経済学部経済学科

130321129

鳥本一樹

私は去年のゼミで人口の減少と経済活性化の関係について勉強していた。飯田市は全国よりも速いペースで人口の減少が進んでおり、そのことを市が重大な問題であると考えている。いままで勉強してきたことと飯田市が問題としている人口の減少をつなげてさまざまなことを考えてみたいと思い、このテーマを選んだ。

年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
総数	109,465	111,009	110,402	110,204	110,589	108,624	105,335
0～4歳	7,519	6,492	5,706	5,625	5,419	5,240	4,632
5～9歳	8,508	7,585	6,525	5,835	5,607	5,310	5,009
10～14歳	7,702	8,546	7,537	6,577	5,856	5,502	5,156
15～19歳	7,086	7,066	7,558	6,601	5,782	4,949	4,654
20～24歳	5,242	5,179	5,178	5,796	5,211	4,256	3,548
25～29歳	7,124	6,258	6,092	6,255	7,237	6,030	5,027
30～34歳	8,406	7,335	6,467	6,361	6,566	7,201	6,176
35～39歳	7,529	8,418	7,334	6,538	6,543	6,446	7,049
40～44歳	7,146	7,530	8,345	7,404	6,608	6,353	6,291
45～49歳	7,769	7,088	7,444	8,265	7,384	6,535	6,209
50～54歳	8,265	7,662	6,987	7,385	8,212	7,197	6,416
55～59歳	6,900	8,144	7,477	6,890	7,286	8,023	7,141
60～64歳	5,663	6,756	7,941	7,323	6,822	7,153	7,960
65～79歳	5,175	5,447	6,468	7,605	7,060	6,543	6,890
70～74歳	4,241	4,694	4,987	5,991	7,105	6,664	6,175
75～79歳	2,928	3,583	4,047	4,351	5,365	6,432	6,025
80～84歳	1,587	2,098	2,641	3,125	3,501	4,501	5,386
85歳以上	675	1,128	1,659	2,277	3,025	3,954	5,051
年齢不詳	0	0	9	0	0	335	540
年少人口	23,729	22,623	19,768	18,037	16,882	16,052	14,797
年少人口割合(%)	21.7	20.4	17.9	16.4	15.3	14.8	14.1
生産年齢人口	71,130	71,436	70,823	68,818	67,651	64,143	60,471
生産年齢人口割合(%)	65.0	64.4	64.2	62.4	61.2	59.2	57.7
老年人口	14,606	16,950	19,802	23,349	26,056	28,094	29,527
老年人口割合(%)	13.3	15.3	17.9	21.2	23.6	25.9	28.2
後期老年人口	5,190	6,809	8,347	9,753	11,891	14,887	16,462
後期老年人口割合(%)	4.7	6.1	7.6	8.8	10.8	13.7	15.7
年少人口指数	33.4	31.7	27.9	26.2	25.0	25.0	24.5
老年人口指数	20.5	23.7	28.0	33.9	38.5	43.8	48.8
従属人口指数	53.9	55.4	55.9	60.1	63.5	68.8	73.3
老年化指数	61.6	74.9	100.2	129.5	154.3	175.0	199.5

年代別飯田市人口年齢構成

このデータから年々老年人口が増えていき、それとは正反対に年少人口と出産年齢人口は減少していることがわかる。

この人口減少の原因として飯田市には4年制大学がないため、大学進学のために市外へ若者が出て行ってしまい

戻ってこないケースが多くある。

飯田から大学進学で出て行ってしまった若者をどうやって呼び戻すのか、また若者を市外へ出さずに囲い込むのか、という問題に重点を置きテーマとして考えていきたい。

飯田市内に大学を作れば若者の市外流出を防げると考えるのが一般的だと思うが、大学を作るとするのは莫大なお金と時間を要するので、実現するのは簡単なことではない。

ならば、若者が飯田市に住み続けたい、飯田市に戻って就職したい、と思うような政策が必要だ。

自分が考える有効な政策

飯田市に若者を引き留めておく、呼び戻すには若者が飯田市に何らかの魅力を感じさせなければならない。その方法として〇〇歳以下なら住宅費半額などの金銭面での支援や、飯田には高速道路が通っているので優良企業を誘致して飯田市で就職してもらい、戻ってきてもらうだけでなく、新規の若者も呼び寄せることにつながるのではないかと思う。

しかし、飯田市には「南信州ワーキングホリデーいいだ」という力を注いでいて、なおかつ具体的で効果的であるように感じさせる政策がある。

【南信州ワーキングホリデーいいだ】について

・目的

この事業は、農業や農村に関心を持ち真剣に農業をやりたい、就農を考えているが手探りで何もわからない方と繁忙期の手助けや後継者のほしい農家を結び、都市と農村住民双方が、お互いに足りないところを補い合うパートナーシップ事業である。

・背景

作物の南北限といわれ、ほぼすべての農作物が栽培可能で多品目が生産され、梨・小梅・ブルーベリー・りんごなどの果樹、キュウリ・アスパラ・トマト等の野菜、シクラメン等の花卉（観賞用の美しい花）、牛肉・やぎ・酪農・養豚等の畜産、養蚕、キノコのほか、市田柿といわれる干し柿は全国一のシェアである。

農家の高齢化が進んでおり、65歳以上の農業従事者は60%を超える。労力不足により、遊休荒廃地の増加が顕著となってきた。

一方、中山間部を中心に都市農村交流が盛んに行われていて、平成8年度より、飯田市としてグリーン・ツーリズム事業に取り組み、中学生中心の「体験教育旅行」を提案しつつ、一般向けの体験ツアーの開発も行ってきた。

平成11年には、「南信州子ども体験村」を実施し、地域資源（人・自然・文化）を活かしたツーリズムを推進してきた。「人との交流」をキーワードにした200の体験プログラムを、高齢農家をはじめとする市民インストラクターが担い、訪れる人に感動を与えるとともに、高齢者の生きがい政策と農業農村の保全に寄与している。

・基本的な考え方

○「観光」と明確に切り離す

「労力補完」がメインであり、「観光」ではないことを受入農家・参加者双方へ明確に情報発信する。

「観光」とは本質的に目的が異なるため、これらの要素を混在させると目的と期待に対するギャップを生じる。

○お互いに息切れしない関係づくり

受け入れ農家は農作業の手伝いのお礼として、農家の生活や農業を教えることを心がける。客として迎えるではなく、家族同様の普段の生活で滞在してもらう。

参加者は農作業と農生活の体験、農業技術や就農、定住等について、農家より直接話が聞けるというお互いにメリットが出る、あくまで対等な関係（パートナーシップに基づく「協働体」）づくりを目指す。

このため、金銭の授受（宿泊・体験代・賃金）を発生させないこととしている。

モデル作業例

4 月末～5 月初旬	りんご摘花、梨花粉付け
5 月中旬～6 月初旬	りんご摘果
6 月初旬～6 月中旬	梨袋かけ
9 月中旬～9 月下旬	梨、りんご収穫
10 月初旬～10 月中旬	りんご（ふじ）収穫

○作業の明確化と期間の明確化

労力補完が目的であることから、農家に負担のかかる受け入れはしない。

作業内容は素人が来て、直ちにできる作業を選定し、農家自身の作業能率が落ちることを避ける。時期や期間は農家の繁忙期に限り、労力補完が必要ない時期は受け入れをしない。

○飯田市流にこだわる

「ワーキングホリデー」という言葉は、もともと海外で一定期間働きながら滞在するという意味で査証等の発行便宜を図っているものであるが、「飯田市流ワーキングホリデー」は都市住民が休暇を使い、農家に滞在しながら農作業や林業作業、祭り等伝統行事等無報酬でサポートすることである。

都市住民にとって、本物の農家に滞在し農業の実際や農家との交流にその対価を感じ、農家にとっては繁忙期に無償で手伝ってくれる人材が滞在費の対価となる。

○リーディングは農家

受け入れはあくまで農家の主体性を持たせることにより、農家自身の積極性を喚起する。参加者と直接の結びつきも自由にし、責任も農家自身に感じさせながら、行政はバックサポートに移行していく。ただしボランティア保険や事故等の把握は行政として関知しなくてはならないので、農家との連絡体制を整備する必要がある。

・事業効果・波及効果

●農業振興効果

- ・農業労働力の確保により適期作業の能率が上がり生産性の向上と品質の向上が見られた。
- ・高齢農業従事者のモチベーションアップにより農業経営の維持継続が図られた。
- ・参加者と産直等の経済行為の発生が多く見られ、農家の所得アップが図られている。

●定住促進効果

- ・参加者の中から定住・新規就農者が現れる。

(定住/田舎暮らし)

40 代夫婦	50 代夫婦×2	30 代夫婦	50 代男性	60 代夫婦
20 代女性	(平成 10 年～平成 26 年)			

(新規就農)

30 代男性×6	30 代夫婦×6	50 代夫婦×2	20 代夫婦×4
40 代夫婦×2	40 代男性×4	(平成 11 年～平成 25 年)	

●後継者難（嫁・婿）に希望の火となる。

東京の 30 代男性（酪農家農家に婿養子）、名古屋 30 代男性（農家に婿養子）

神奈川の 30 代女性（農家に嫁入り）、埼玉の 20 代女性（農家に嫁入り）

京都の 20 代女性（農家に嫁入り）

※こうした例が他産業への UI ターンになり、よい・ほしい人材獲得ができつつある

・観光振興効果

現在、当然ながら波及効果に大きなものはないが、訪れるたびに近くの温泉による、お土産を買うといった状況や家族や友達連れで観光に訪れる傾向もあり、登録人数が拡大していくとともに、微々たる状況であっても、増加する傾向にある。

・過去の参加者実績

年度	人数	延べ日数
平成10年度	32名	96日
平成11年度	187名	888日
平成12年度	219名	909日
平成13年度	151名	618日
平成14年度	243名	980日
平成15年度	291名	1,409日
平成16年度	297名	1,357日
平成17年度	324名	1,536日
平成18年度	467名	2,181日
平成19年度	560名	2,578日
平成20年度	560名	2,572日
平成21年度	492名	2,211日
平成22年度	452名	1,981日
平成23年度	424名	1,897日
平成24年度	455名	1,880日
平成25年度	382名	1,638日

過去の参加者実績から見ても徐々にではあるが人数も増え、日数も長くなっていることがわかる。

・ワーキングホリデー飯田に対する自分の考え

これからより人口を増やしていくには農業は収入が安定するように不作の時はある程度の補償金ができるようにすることや、農業を始めるのに必要な農具を提供する、だれもつかっていない荒れた畑・田んぼを貸し出すなど、「収入面・はじめやすさ」に重点を置いて、この事業をアピールしていけばもっと人口が増えるのではないかと思う。

【飯田市上村で子育てを】

飯田市上村は少子高齢率が高い地域だが、霜月まつりなど、固有の文化が今でも受け継がれている。村は子供を

集めるためにこのような事業を行っている。

1.祝い金事業

結婚祝い金 10 万円 (1 組)

出生祝い金 10 万円 (1 児)

保育園入園祝い金 3 万円 (1 児)

小学校入学祝い金 3 万円 (1 児)

中学校入学祝い金 3 万円 (1 児)

2.病院通院費補助金事業

中学生以下と 65 歳以上の高齢者が地区外の病院へ通院する交通費の補助
600 円 (月 1 回)

3.高校生通学補助金事業

高校通学にかかる交通費の補助
3,000 円 (月額)

4.インフルエンザワクチン予防接種補助金事業

子供 4,000 円 (二度接種)

子供 2,000 円 (一度接種)

上記の保護者 2,000 円 (一人一回)

5.IU ターン歓迎補助金事業

地区外から転入した 50 歳未満の方への補助
50,000 円 (一人につき)

6.保育園児子育て支援事業

保育料支援 上限 30,000 円

市営住宅等居住支援 上限 10,000 円

通園支援 上限 10,000 円

＊上記の事業は上村地区のみ。

このような事業を行うことによって、U ターン・I ターンを狙っている。

これらの事業だけでなく上村には霜月まつりや伝統行事（民俗芸能など）、伝統食（そば、いも田楽、こんにゃく、栃餅、山肉など）もアピールしている。

・この事業に対する自分の考え

この事業は主に子供に対するものであるため子供のいる家庭を呼び寄せるには効果的だと思うが、将来のことを考えて子供のいない若い夫婦に対する事業も展開していければより大きな効果を得ることができるのではないかなと思う。

【飯田市全体として】

飯田市は長野県の中でも人口減少が最も大きい。

この大幅な人口減少によりさまざまな問題がおきている。

◆人口減少の大きい市町村(H12→H17)		
順位	市町村	人
1	飯田市	△ 1,961
2	岡谷市	△ 1,708
3	上田市	△ 1,690

飯田市の高校生は高校卒業後約 80%が市外または県外に出て行ってしまい、戻ってくるのは半分の約 40%しかない。



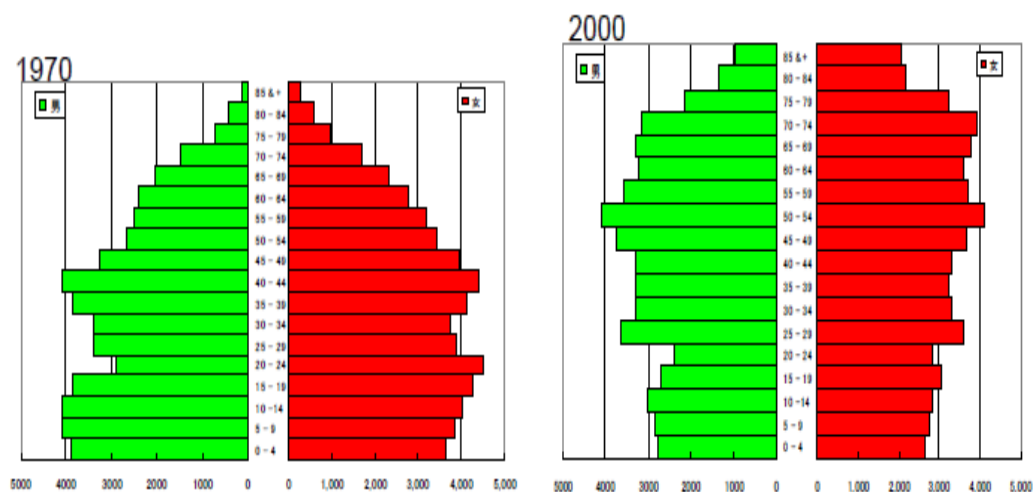
若者の市外県外への流出により少子高齢化が進む。
生産年齢人口の減少により子供も生まれない。

しかし、飯田市は全国的に見ても高レベルな有効求人倍率を誇っている。

	2005年12月	2006年6月	2006年12月	2007年6月	2007年12月
飯田	1.52	1.18	1.32	1.19	1.31
長野県	1.16	1.20	1.27	1.18	1.10
全国	1.03	1.08	1.08	1.07	0.98

飯田市と長野県と全国の有効求人倍率

飯田市には高速道路（中央道）が通っておりアクセスが容易にできるため、企業が集まりやすいからである。上の表を見てもわかるように近年は一度も求人倍率が1を割ったことがなく、働きたい人にとってとても恵まれた環境といえるだろう。しかし、働くことがあっても住みやすいところでないとは人は移住してこない。企業のほかにも商業施設を充実させたりして住みやすい飯田市をつくっていくことで人口減少に歯止めをかけることができると思う。



1970 年飯田市人口構成

2000 年飯田市人口構成

この人口ピラミッドを見てもわかるように 30 年前とは年齢構成は大きく変わってきている。1970 年は若者が多く老人が少ない。2000 年になると一気に逆転し、若者が少なく老人が多くなってきている。これは技術者・研究者の減少、農家の後継者不足、医者・看護師不足ということが将来もっと大きな問題になり、飯田市経済の低迷につながると思うので、絶対に解決していかないとはいけない。



飯田市は上記にあるように「地域活動」「仕事」「生活環境」という持続可能な地域社会の構築がある。「住み続けたいまち、住んでみたいまち、飯田人も自然も輝く、文化経済自立都市」という将来都市像をもっており、飯田市民全員が都市づくりを行っていくということを念頭においている。



地域の経済自立度を70%にするために産業界、市民、経済団体、行政がスクラムを組んで（地域ぐるみで）実施する事業を具体的に明示。

- ・ 現場主義の徹底により現場の改善から生み出される効果的な施策を立案、実施
- ・ 地域経済活性化プログラムは、産業界、市民を交えた評価、点検を行い、毎年プログラムを見直す。

まとめ

飯田市は「ワーキングホリデーいいだ」や上村の子育て支援などを行って、農家の後継者・担い手の定住を狙ってみたり、子供に対して補助金を出したりして移住を促したりしているが、人口が増えるどころか減少していつている。人口減少がすすむとモノを消費する数自体が減ってしまうため、経済が停滞する原因になりかねない。それゆえ、飯田市のように人口の増加を狙って、さまざまな政策を行っていくことはとてもよいことであると思う。さまざまな政策を行っていくことによって、どのような政策が有効なのか？どのような政策がダメなのか？ということがわかってくると、つぎに打ち出す政策が今までの積み重ねによってとても有効にはたらく可能性が大きくなる人口減少問題は飯田市だけの問題ではなく、今や日本全体の問題である。もし飯田市が人口減少に歯止めをかけることに有効な政策を発見し実行して効果を実証することができれば、日本政府がこの政策を行うことで日本全体が人口減少問題を解決することができる。人口減少問題に飯田市ほど積極的に取り組んでいるところを自分はあまり聞いたことがない。それは今まで人口減少問題に有効と思われる解決策が見つかっておらず、政策を行っても効果はないであろうという考えがあるのではないかと自分は思う。しかし、飯田市のように積極的に人口減少問題に取り組んでいかなければいつまでも解決策はでてこない。この人口減少問題を解決するために日本全体で取り組んでいく必要があると思う。数年後日本は人口の減少に悩まされる日が来ると思う。飯田市はそれを見越して、今から人口減少問題に積極的に取り組んでいる。飯田市は人口減少問題がさらに大きくなって手が付けられなくなる前に解決しようとしている。飯田市は常に未来のことを考え、この市をもっとより良いものにしようと行政が中心となって政策を打ち出している素晴らしいところであると思う。

南信州・飯田フィールドスタディー

経済学部経済学科

130321129

3年 鳥本一樹

地域自治と公民館活動

行政は縦系とし、地域は横系として考える。

行政は首長・職員によるリーダーシップとトップダウンの施策と柔軟な縦系で糸を繰り出す役割を持つ。

top.down→能率的に→規範の集中→リーダーシップ→目指す都市像・文化経済自立都市→柔軟な縦系

地域は住民の自主的実践によるボトムアップの推進と多彩な横系で糸を紡ぎだす役割を持つ。bottom.up→民主的に→組織の分散→自治能力→目指す地域像・十三の郷づくり→多彩な横系

公民館は社会教育の機関で住民の自治能力を育む《学びの場》と多彩な横系を紡ぎだす住民の自治能力を育む役割を持つ。支配に服さない→住民の自治を育む→紡ぎ織る力を→多彩な横系



飯田市は行政・自治区・公民館の三位一体のまちづくりに加えて、住民一人一人の意志が反映するまちづくりが特徴といえる。

都市と農村の関係（ワーキングホリデー）

農業や農村に関心を持ち真剣に農業がやりたい、就農を考えているが手探りで何もわからない方と繁忙期の手助けや後継者のほしい農家を結び、都市と農村住民双方が、お互いの足りないところを補い合うという目的で「南信州ワーキングホリデーいいだ」というパートナーシップ事業が行われている。

この事業はお互いに息切れしない関係づくりをするためにいくつかのルールがある。①受入農家は農作業の手伝

いのお礼として、農家の生活や農業を教えることを心がける。②客として迎えるのではなく、家族同様の普段の生活で滞在してもらう。③参加者は農作業と農村生活の体験、農業技術や就農、定住等について農家より直接話が聞けるというお互いにメリットが出る、あくまで対等な関係づくりを目指す。



この対等な関係を守るため、金銭の授受（宿泊・体験代・賃金）を発生させないこととしている。

地方創生に向けた人材サイクルの構築

日本全体の人口のピークは2008年であるが、飯田市の人口のピークは1945年である。飯田市の人口のピークが日本全体の人口のピークよりも早かったのは戦時中都市部からの疎開があったためである。飯田市では全国よりも早いペースで人口が減少しており、老年人口の割合も大きくなってきている。飯田市は人口減少時代の都市構築として中心拠点と地域拠点をバラバラにするのではなく、すべての拠点の結びつきが重要としている。

地域との関わりは小学校時代＞中学校時代＞高校時代というように薄くなっていく。飯田市の若者は約8割が進学や就職のため一度地域を離れる。この地元を離れて行った若者が将来的にも飯田に帰ってこないことにより地域を担う人材不足となり、活力の低下となる。これを防ぐため高校卒業までに、地域に愛着と誇りを持てる人材の育成を一貫して実施することにより一度地域を離れた若者が戻ってくることが重要である。

[上村について]

上村地区は人口462人、世帯数209戸、高齢化率51.73%という山間部にある村である。平成24年4月の園児数は3人だったが、平成25年4月には園児数1人となり、上村保育園は閉園の危機になった。しかし、市長が保育園を閉園させてしまうと地域の活力が低下してしまうという言葉から市役所職員が元園児たちを送迎するという条件などをつけて、呼び戻し園児数5人となった。上村地区では定住者を増加させるため、さまざまな補助金を出している。この補助金は飯田市特有の地域環境権というものをつかい、資金を生み出している。この地域環境権は再エネ資源を市民が優先的に活用して地域づくりをする権利のことであり、電気の全量買い取り制などを通じて資金を得ている。

人形劇を通じたまちづくり

飯田市の人形劇はおよそ300年前、人形浄瑠璃が伝えられてきたことがきっかけである。1979年自分たちのお祭りを創りたいという人形劇人の思いと、当時市長松沢氏の「まちづくり人・づくり」の思いが重なり「人形劇カーニバル飯田」がはじまった。1988年には「世界人形劇フェスティバルが開催」され、フランスのシャルルヴィル・メジェールとの友好都市提携が結ばれた。公演数、観客数とも上昇の一途をたどったが、1998年の世界大会を機に終了した。その後1年の間に市民によって新しい立ち上げが進められ、翌年には「いいだ人形劇フェスタ」として、市民による新しい人形劇の祭典がはじまった。

人形劇の位置づけとしては志向性（考え方）→市民が企画運営する市民参加型、表現性（デザイン性）→ポスター、ワッペンなどのデザインの募集の全国展開、情報伝達性（情報の発信）→各種媒体での確実な情報発信の実績、地域性（信州らしさ）→地域に伝承する人形浄瑠璃の文化に根ざしつつ、現代に通じる「人形劇のまち」としての魅力の創出、将来性（継続・発展）海外の研修生受け入れ、海外の作品の紹介等、国際性の確保と幅広い年齢を対象としている。

経済自立度向上に向けた取り組み

経済自立度とは「地域産業による波及所得額」÷「地域全体の必要所得額」で表すことができるもので、地域住民の生活費及び社会負担額を自分たちの地域産業力でどのくらい稼ぎ出しているのかということを知ることができるものである。飯田市の自立度は平成13年が46.2%、平成15年が43.5%、平成19年が54.9%、平成24年が47.2%となっている。当面の目標は自立度55%であり、最終的には70%を目指している。この自立度70%を達成するために飯田市は地域経済活性化プログラムという取り組みを行っている。このプログラムは地域ぐるみと現場主義ということに重点を置いている。これは、経済自立度を上げるためには、行政と民間がスクラムを組んで、現場で事業を企画し、実行することが必要という考えからきている。具体的な取り組み事例は、飯田航空宇宙プロジェクトがあり、今後成長が期待される航空機産業に着目し、「アジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区」へ参入した。そのほかにも市田柿をブランド化することにより、事業者の積極的なマーケティングもあつ

て高付加価値商品として改めて全国で認知された。

おひさま進歩エネルギーの取り組み

日本初の大規模な太陽光発電の市民出資「南信州おひさまファンド」というものからなる。このファンドの仕組みとしては、一般家庭に無料で太陽光パネルを設置するかわりに9年間は月々定額の料金を支払うこと、この料金は省エネを努力して売電すれば月々の負担が減らせる。しかも設置から10年目以降は太陽光パネルが譲渡となるため発電分すべてが収入となる。このシステムは環境貢献として設置したいが、貯金を取り崩したり、ローンを組んでまで設置に踏み切れない人々にとって太陽光パネル設置を後押しすることとなった。このシステムがなぜ確立できたのかというと、おひさまファンドと飯田市が売買電契約をしたからである。その契約とは22/kwhの買い取り契約であること、20年間の長期契約であること、建て替え・移転等があった場合契約が継続できるように配慮するという前例にとらわれない行政の決断からうまれた。

新しいまちづくりのカタチ

昭和22年の飯田大火後、飯田東中学校の生徒たちが植樹したりりんご並木は、幾多の試練を経験しながらも、並木に寄せる思いは変わることなく受け継がれ、“りんご並木のまち飯田”として全国に知られる存在になった。中心市街地の真ん中に立地するりんご並木は、動物園、四季の広場、再開発地区、桜並木と連続しており、今後の中心市街地の活性化、ひいては飯田市の貴重な地域資産としての魅力向上という点において、大きな可能性を持つ重要な存在である。再整備後10年が経とうとしている今、りんご並木を生かした事業等が掲載された「飯田市中心市街地活性化基本計画」が樹てられた。これから先、りんご並木に関わるまちづくり団体や組織、グループ、個人、行政等が力を結集させ、相互に連携協力のもとに、新たなりんご並木のまちづくりを推進することが求められている。このような思いから、りんご並木に関わるまちづくり団体や組織、グループ、個人、行政等がしなやかに連携協力しあう仕組みが今後の推進に大変意義のあるものである。

中心市街地活性化の取り組み

人通りが少なくなった中心市街地にもう一度人に住んでもらう。住んでもらうからには日常に必要なスーパーや非日常を演出するレストランなどの機能をもう一度揃え、子供からお年寄りまですべての人が楽しく快適に暮らすことが出来る街でなければならない。それらを解決するために進められたのが、トップヒルズほんまち、トップヒルズ第二、銀座堀端ビルの再開発やりんご並木三連蔵、アシストホームりんご、まちカンビル2002の整備などです。それらにより飯田市の中心市街地に、住宅、高齢者対応住宅、スーパー、レストラン、市の分庁舎、オフィス、人形美術館などが整備された。飯田市では、確かなコンセプトとそれを実施する地域団体が密接な連携のもとまちづくりを進めている。地域が更に一体となって益々魅力あるまちづくりに取り組み、全ての人が楽しく過ごすことが出来るまちになるものと期待される。

自分の出身地

自分の出身地は岐阜県揖斐郡大野町というところである。大野町はスーパーなど買い物をするとところが少ない、商店街など町の中心となるところはあるが寂れていて活気がない、優良企業が少なく就職するには町外へ出ていかなければならない、などいろいろな問題がある。今回飯田市へフィールドスタディーに行って、飯田市は大野町と似たような問題に直面し、その問題に対して行政と市民が連携して解決していくというスタイルをとっていることがわかった。大野町も飯田市のように町民と連携して問題を解決していけば、よりよい町となるのではないかと思った。町民と連携するには、どのようなシステムを構築していくのかということや、町民の意識の改革もしていかなければいけない。そのためには飯田市のように人材を育成して地元で愛着をもってもらうとよいと思う。

飯田市はリニアが開通することを活かすために、様々な策を練っている。大野町ももうすぐ高速道路のインターチェンジができる。これはなかなか無いチャンスととらえて、インターチェンジをうまく利用して、優良企業の誘致や観光客の増加を狙う政策を打ち出していくと町の活性化のきっかけになるかもしれない。これも行政だけに任せるのではなく、町民も協力してプロジェクトに取り組む姿勢が重要である。

はじめに

なぜ環境政策について選んだのか、飯田市は全国 23 の「環境モデル都市」の中の一つとして内閣府により選ばれている。選定基準としては以下の項目がある。

- 温室効果ガスの大幅な削減目標
- 先導性やモデル性
- 地域への適応性
- 実現の可能性が高い
- 取り組みに持続性がある

この 5 つの項目の中から私は、温室効果ガスについて興味を持った。現在、温室効果ガスの問題については世界規模で注目されている。CO₂ の排出量ランキングを見てみると（参照：外務省）、中国が 1 位、2 位アメリカ、5 位が日本となっている。数値こそほかの上位 4 か国に比べて低い、世界中で 5 本の指に入るということは、まだまだ削減できる余地があるということだと考える。

CO₂ という目に見えないものに関して、私たちは強く関心を持っているわけではない。しかし自分たちの未来

順位	国名	排出量(百万トン)(注)
1	中華人民共和国(中国)	7,954.5
2	アメリカ合衆国(米国)	5,287.2
3	インド	1,745.1
4	ロシア	1,653.2
5	日本	1,186.0
6	ドイツ	747.6
7	大韓民国(韓国)	587.7
8	カナダ	529.8

を考えれば早急に対処していく必要がある。そこで重要となってくるのが、国単位で動くことではなく小さい規模から徐々に広げていくことだと私は

考える。そこで、市町村という枠組みでどのような政策を提示して環境問題に取り組めば効果的に削減できるのかを学び生かしていきたいと考え環境政策について考察することにした。

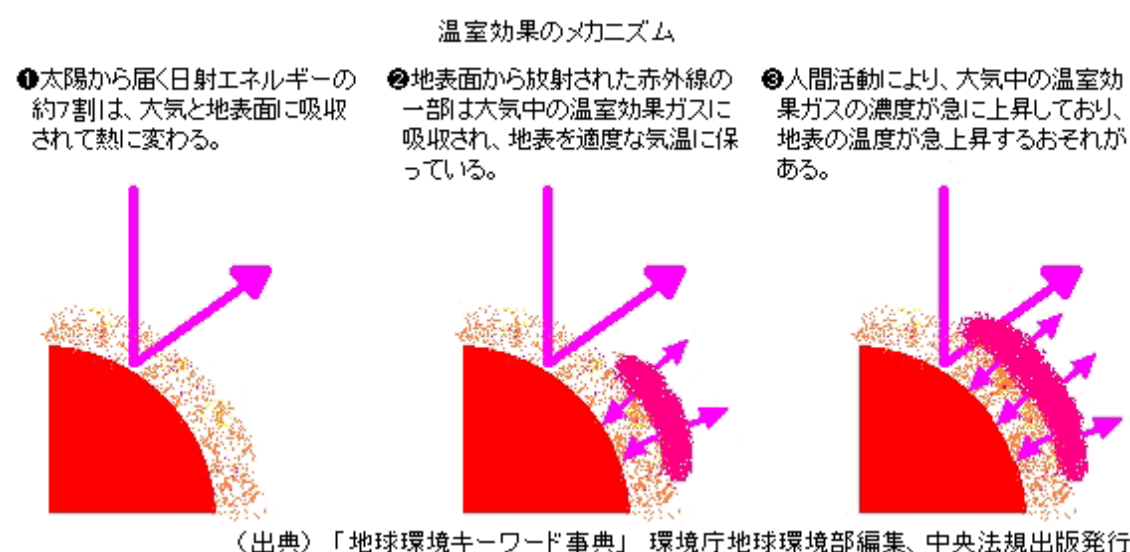
飯田市の地球温暖化への対策に入る前に、地球温暖化について考え、様々なデータから考察していきたい。

地球温暖化のメカニズム

地球温暖化とは、人間活動の拡大により二酸化炭素、メタン、亜酸化窒素などの温室効果ガスの大気中の濃度が増加し、地表面の温度が上昇することをいう。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の報告によれば、温室効果ガスの濃度が現在の増加率で推移した場合、21世紀末までに地球全体の平均気温が1.4～5.8℃上昇することがありうるとしている。

なぜ、地球温暖化は起こるのか。（下図参考）

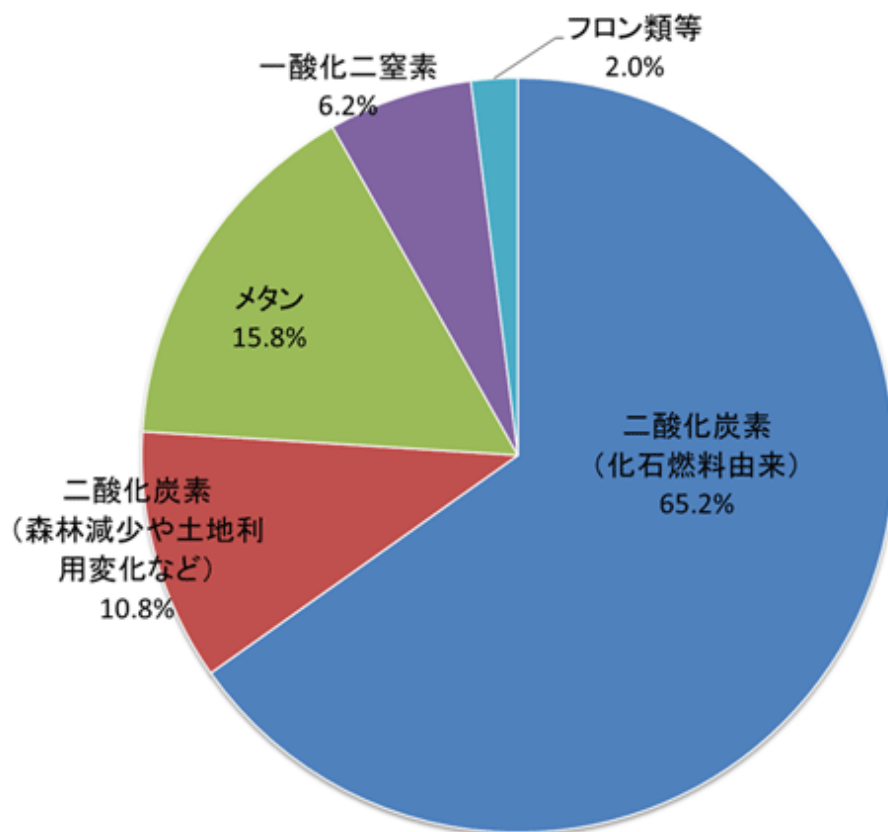
- ① 太陽から届く日射エネルギーの7割は、大気と地表面に吸収されて熱に変わる
- ② 地表面から放射された赤外線の一部は大気中の温室効果ガスに吸収され、地表を適度な温度に保っている。
- ③ 人間活動により、大気中の温室効果ガスの濃度が急激に上昇している。そのため、これまでのバランスを越えて赤外線が温室効果ガスに吸収され、その結果、地表の温度が上昇してしまう。



人間活動によって増加した主な温室効果ガスには、二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素、フロンガスがある。

二酸化炭素は地球温暖化に及ぼす影響がもっとも大きな温室効果ガスです。石炭や石油の消費、セメントの生産などにより大量の二酸化炭素が大気中に放出される。また、大気中の二酸化炭素の吸収源である森林が減少している。これらの結果として大気中の二酸化炭素は年々増加している。

メタンは二酸化炭素に次いで地球温暖化に及ぼす影響が大きな温室効果ガスです。メタンは、湿地や池、水田で枯れた植物が分解する際に発生します。家畜のげっぷにもメタンが含まれている。このほか、天然ガスを採掘する時にもメタンが発生する。



上の図は地球温暖化に悪影響を及ぼす温室効果ガスの寄与度である。この図からも分かるように、二酸化炭素における地球温暖化への寄与度は、約 6 割と大部分を占めていることがよく分かる。(参照：気象庁)

地球温暖化の影響

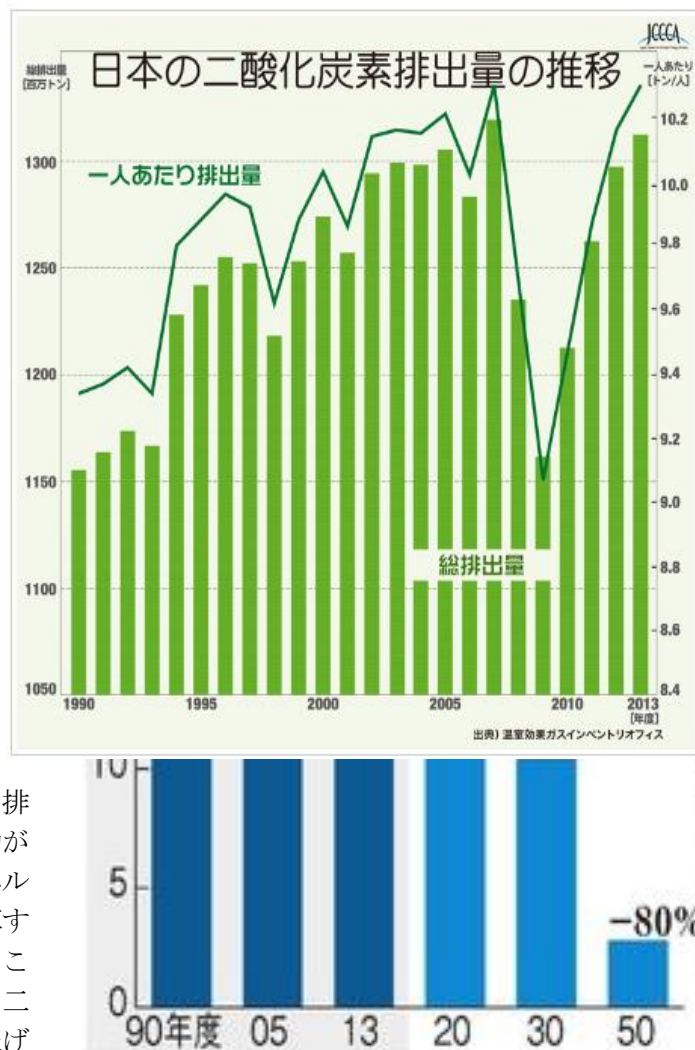
1. 海面が上昇する。
地球温暖化によって海水が膨張し、過去 100 年で世界の平均海水面は 17 センチ上昇しました。南太平洋の島国では浸水が進み、海岸線が内陸へ入り込んでいます。国によっては、国土全体が海に沈んでしまう危険も増大しています。
2. 水不足に陥る。
たくさんの方が、生活するための水を得にくくなります。特に、乾燥した地域に住む人や、氷河や雪に生活用水を頼っている人は被害を受けやすくなります。氷河や雪解け水から生活するための水を得ている人は、世界の人口の 6 分の 1 を占めます。
3. 災害が増える
嵐や大雨などの異常気象が増えるため、沿岸地域では洪水や浸水の水害がひどくなります。2080 年代までに、数百万人の人が洪水の被害を受ける可能性があります。
4. 生態系が変化する
生育に適した気温や降水量のある地域に育つ植物は、気温や降水量が変化すると、生育地域を変えざるを得なくなります。中には、気候の変化に適応できず、絶滅する植物も出てくるかもしれません。また、それに伴い、植物に依存して生きる動物も、生息域を変えなくてはならなくなり、変化に対応できない種が減少・絶滅する可能性があります。
5. 病気や飢餓が広がる
食料の生産性が下がると、病気にかかる人や、飢餓状態に陥る地域が増える可能性があります。特に食料の生産性が下がるアフリカ地域で影響がひどくなると予想されます。
6. 異常気象が発生する
異常気象による熱波・洪水・旱魃・森林火災などの自然災害が頻繁に起こり、被害に遭う人が増えると考えられています。

日本のCO2排出量の推移

このグラフから分かることとして、総排出量・一人当たり排出量と上昇をしていることがわかる。後からから急激に上昇している要火力発電の増加による影響が大きい。液化天然ガスよりも二酸化炭素排出量に近いものがある。東日本大震災、原子力発電の稼働について非上がり停止することとなった。結子力発電を停止した状態では火力しか方法がなくなり、CO2の排出量が増えたと考える。

日本の温室効果ガス排出量削減

政府は2015年4月23日に2030年までの削減目標として、現状からの削減を目指すことを発表した。また、2050年までに2005年度比で80%削減を提示した。前提となる30年の発電時に二酸化炭素を出さない再生エネルギーの合計で発電量の44%、排気ガスが27%、石炭火力が27%、石油火力が3%。これらにより、エネルギー二酸化炭素排出量は13年比で計算する程度の削減になる見込みである。この程度の削減を目指して、森林による二酸化炭素の吸収や代替フロン対策などを積み上げて調整すると発表した。



2010年かにも急激な2010年以降としては、石油は、出量が2倍の影響による難する声が果的に、原発に任せ出量増加に

目標

年の温室効果から25%程度、2050という目標電源構成は、再生エネルギーが26%、石炭火力が20%から25%削減することなど

ここまでは、日本や世界という大きな枠組みから見てきたが、今度は、本題でもある長野県飯田市について見ていく。

ここからは長野県飯田市について
飯田市の環境政策

環境モデル都市行動計画の概要

中期目標（2030 年まで）・・・地域全体の CO2 排出量を 2005 年の排出量から 40～50%の削減。

長期目標（2050 年まで）・・・地域全体の排出量を 2005 年の排出量から 70%削減します

上記のような目標を達成するために以下のような取り組みを行うとしている。

- 「おひさま」と「もり」のエネルギーを最大限活用
- 建築物の省エネ化
- 地球温暖化防止の視点を加えた森林整備、木材利用
- 環境にやさしい乗り物への乗り換え推進
- 産業界との連携
- 低炭素社会へ向かうための意識啓発

平成 25 年度の環境政策より温室効果ガス排出量を削減することはできているのかをみる。

平成 25 年度の環境施策の状況

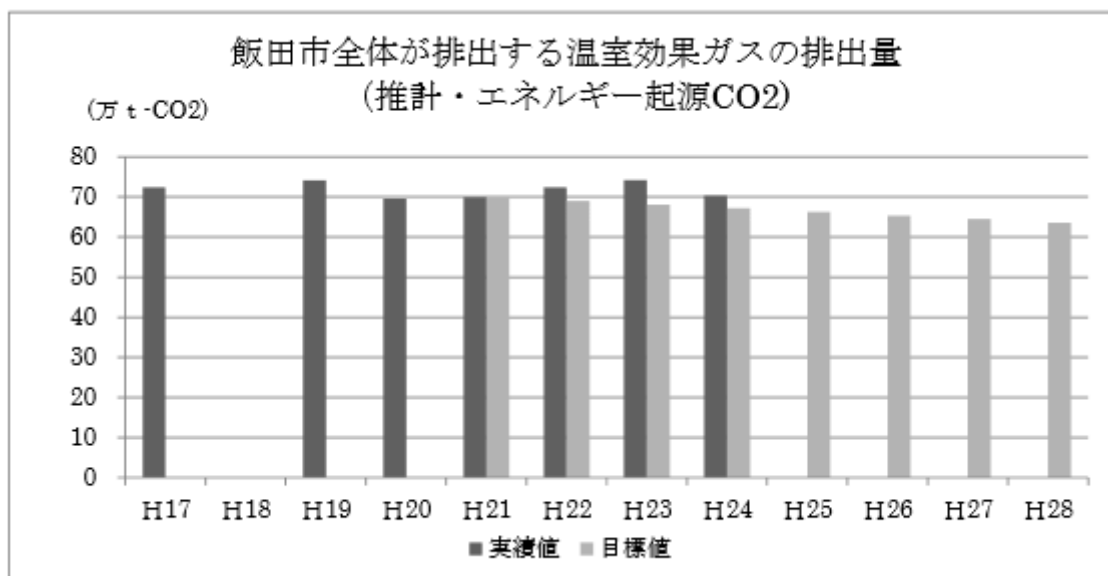
2 施策指標の達成状況

施策指標	単位	H22 年度 実績	H25 年度 実績	H28 年度 目標	達 成 状 況
飯田市全体が排出する温室効果ガスの排出量（推計） ※温室効果ガス排出量は、1 年遅れでの算出となる。	t-CO ₂	702,636 (H21)	703,261 (H24)	635,565	△
再生可能エネルギー利用（太陽光発電・太陽熱温水器・木質 バイオマス燃焼機器など）による温室効果ガス排出の削減量 （推計）	t-CO ₂	5,382	11,822	8,500	◎
家庭用再生可能エネルギー利用の発電量を世帯換算し た場合の世帯数に占める割合（推計）	%	3.7	10.9	10.0	◎

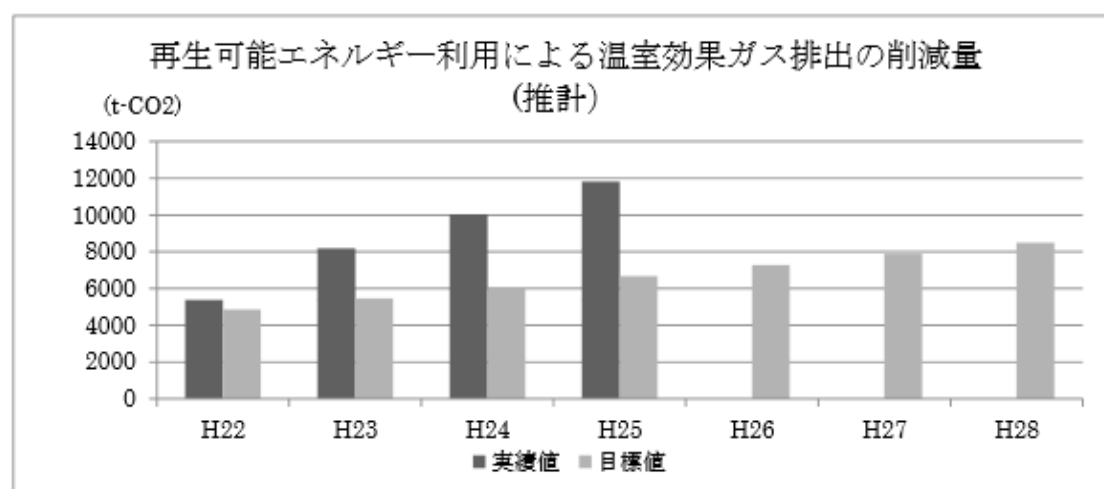
達成状況 ◎：目標達成で、改善傾向 ○：目標達成で、横ばい又は悪化傾向

△：目標未達成だが改善傾向 ×：目標未達成で、横ばい又は悪化傾向

平成 21 年から平成 23 年にかけて、エネルギー使用量は減少したが、震災の影響に伴う、火力発電所の稼働率上昇により、排出係数の悪化に伴い、温室効果ガス排出量は増加傾向にありました。



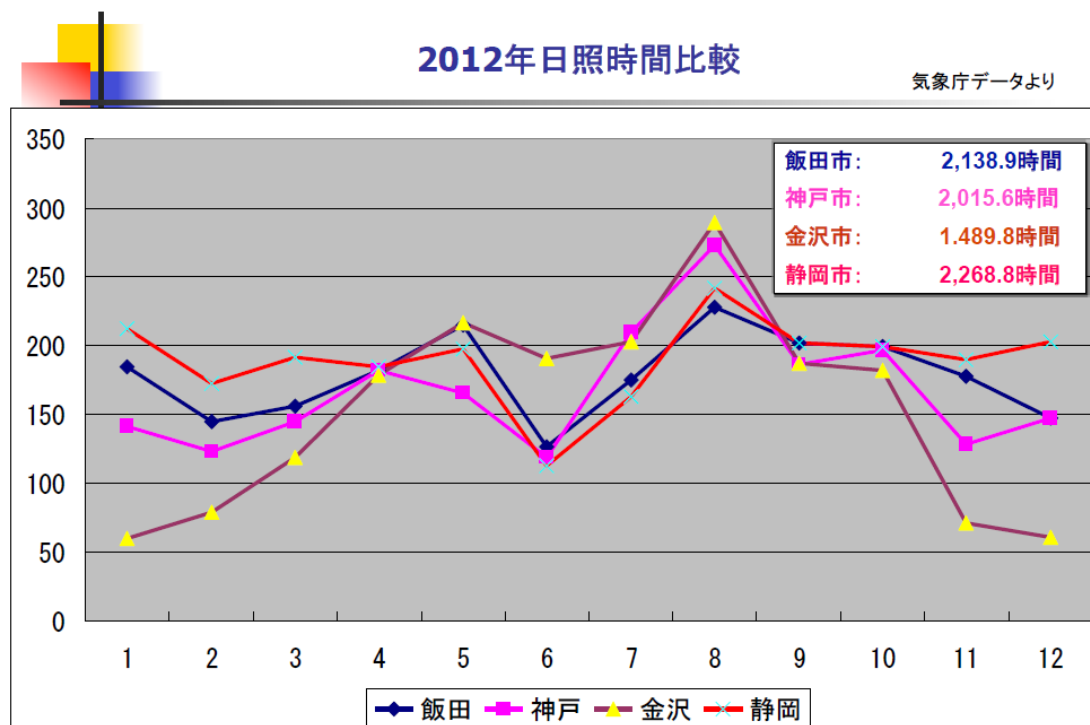
平成 24 年においては、排出量が微減しているが、これは前年度から人口の微減による影響が大きいとされている。



再生可能エネルギーの利用による温室効果ガス排出の削減量については、太陽光発電が想定以上のペースで進んだため、平成 28 年度の目標値を既に達している。

飯田市は日照時間が年間約 2000 時間と日本全国と比べても年間を通じて晴れた日が比較的多い県だと判断することができます。この恵まれた条件のもとで、年間 1 kw 当たり 1000～1100kw の発電が想定されている。上の

グラフの再生可能エネルギーの利用による温室効果ガス排出の削減量を見てもここ数年での成果はとても大きいと言える。その中でも飯田市といえば太陽光発電であり、貢献度はとても高いものと言える。



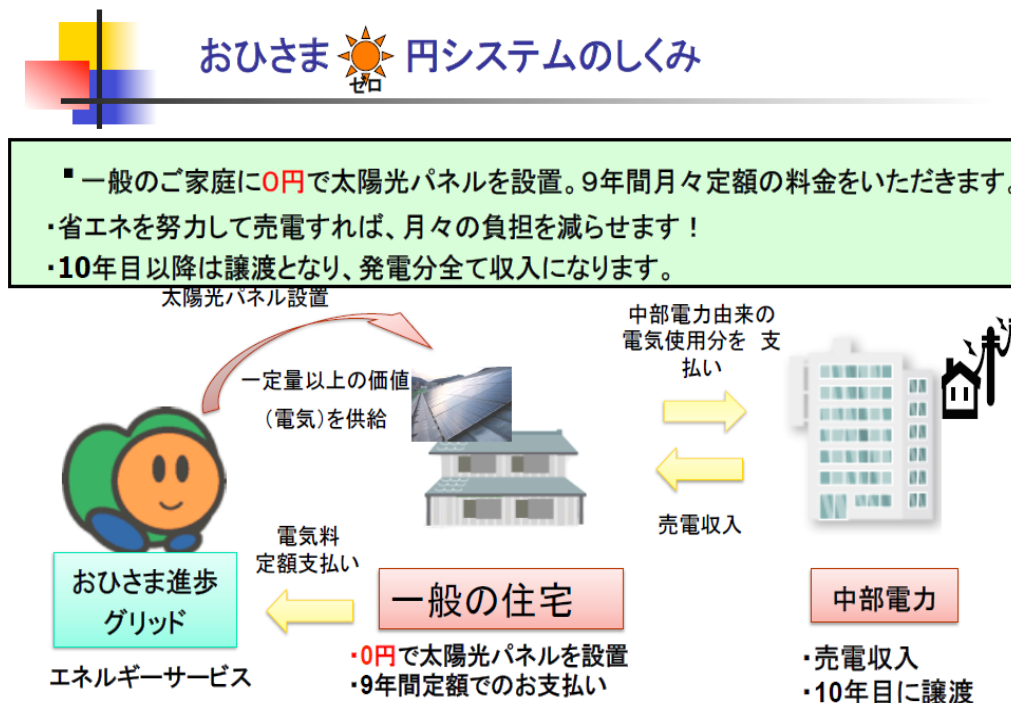
飯田市における太陽光発電普及率は5.86%となり、世帯数では38,321件（平成25年2月現在）と年々増加していることがわかる。

● おひさま 0 円システム

2009 年からこのシステムを導入し

一般の家庭に 0 円で太陽光パネルを設置し、9 年間月々定額の料金を支払う。

10 年目以降は譲渡する形になり、太陽光パネルから発電された電気は売電することができ、家庭の収入となる。



おひさま 0 円システムは毎年 30～50 件の家庭に設置している。これはとてもよい取り組みだと感じた。企業だけが温室効果ガス削減に対して取り組むだけでなく、市民にも積極的に取り組んでもらう。そうすることで、地球温暖化対策として市全体で取り組んでいると言える。それだけではなく、環境問題に自分自身もなにか行動をしているという自覚を持つことになる。これは大切なことであり、地球温暖化対策を促進するために必要なことだと考える。

また、2009 年に始まった余剰買取制度の開始に合わせてスタートしたことにより、関心が高まったと考える。

● いいだ環境プラン

飯田市の環境政策を総合的にかつ計画的に推進するための計画である・

内容としては、飯田市の政策を進める際の指針となるべき理念、そして、第5次飯田市基本構想後期基本計画の9つの政策のひとつである「人の営みと自然・環境が調和したまちづくり」の施策や事業などを具現化したものです・

基本理念・基本目標

- ① 情報の適切な提供と市民参加を通じた現在および将来の市民の健全で豊かな環境を恵沢する権利の実現
- ② 環境への負荷の少ない持続的発展の可能な社会の構築
- ③ 地球環境保全への取り組み
「人の営みと自然・環境が調和したまちづくり」

行動理念



① 社会の低炭素化の推進

これは、再生可能エネルギーの導入促進による地域発展の仕組みづくりや、環境にやさし交通社会の形成、また、省エネ・エコライフに普及啓発に努めるとある。

飯田市では二酸化炭素排出量の割合として、運輸部門が大変多くを占めている。この要因としては、飯田市の住民たちの移動手段が自動車によるものが大半だということが考えられる。そして、削減を行うなら運輸部門の割合を減らしていくことが効果的だと考えた。

具体的な施策としては、公共交通の利用者の増加を図ること。レンタルサイクルやイベントを通じて自転車利用の普及活動をする。そして、エコドライブや電気自動車の普及に努めることの3つが挙げられている。

② 緑の保全と創出

身近な存在としてある森林のもつ公益的機能の重要性と、森林整備計画をPRし、手入れを進めていく。そして、塩山事業への市民の関心を高めるために体験や見学の機会を増やすとともに、多様な主体により里山の手入れを行う仕組みを作る。

森林の資源を活用するための啓発活動を行い、また、研究、支援に取り組む。

この取組により、平成28年度には森林伐採面積を約150ha減少させ、森林面積の現状維持を目指している。

③ 廃棄物の減量と適正処理

3Rを推進することを図り、ごみのエネルギー利用について研究する。

また、社会の変化に対応した体制をごみ処理施設整備計画を踏まえ進め、不法投棄対策についても考えを進めていく。

これにより、不法投棄の減少を図り、ごみの収集量の削減を目指す

④ 環境汚染の防止

大気汚染の防止や水質の改善に引き続き取り組む。

放射性物質の監視は行い、情報公開に努める

⑤ 自然とのふれあいと環境学習の推進

市と学校等が協力して、地域特有の環境プログラムを整える。
それと同時に、将来を担う子どもたちに、よりよい状態で環境に対する学習が行えるよう体制を整える。

⑥ 日常的な環境負荷低減の展開

南信州いいむす 21 の取り組みを PR するとともに、新規事業へのフォローアップを行い、南信州いいむす 21 の取得者の増加をはかる。

考察

飯田市の環境政策を見る限り、有効に働いていると捉えることができた。

しかし世界的規模で見ると、日本の CO2 の排出寄与度はまだまだ大きく、先進国と呼ばれる国々の中でも上位につけていることが現状である。そして環境問題の深刻化は日を増すごとにひどくなっている。

私たちはどんなことを大切にする必要があるのか。私が考えるのは、まず先人たちがおこなってきている取り組みを引き継ぐこと、それに加えて今の環境の状態にあっている対策を考えること。

また環境的な側面だけを考慮するだけでは偏りが生じ、地域の発展や人口の過疎化など経済的側面の問題を出てきてしまうため、どんなことに対しても”つながり”という意識を持って取り組むことが必要だと考える。

次に、若年層への環境に対する考えの植え付けである。小学生になるまで難しいことを教えてもプラスに働く効果は小さいので、楽しんで考えることができるように校外学習を通して実際に体験をしたりして、早い段階で次世代への受け渡しスムーズに行えるようにする。

最後に、この地球に住んでいる全ての人に問題意識を強くもってもらうために、

私たちのような講義を通して学ぶことのほかに、メディアが大きく、それも頻繁に放映することや県や市でも取り組みを行っていることがあるのなら住民に知らせる機会を増やすこと。どんな小さいことでも今後の環境問題につながると思いながら行動をおこすことが重要だと考える。

現段階での私の考えは以上のようなものである。これがフィールドワークを通してどのように変化するのか、また深く考えることができるようになっているのか、自分自身に期待をもって、参加をしたいと思う。

南信州・飯田フィールドスタディ

2015 年 8 月 16 日

経済学部経済学科 3 年 130321127

富楽 京佑

飯田市とはどんな町なのか。「ムトス飯田」を合言葉に住民一人一人の意志が反映する町として住民の人たちは、どうすればもっと飯田をよくすることができるのかを多くの住民たちが考え行動に移すことのできる町だと感じた。

ここで一度考えてみる。住民たちがああしようこうしよう提案をしたとしても、行政との連携が取れていなくては、全く無意味になってしまう。行政と住民が一体となって提案をし、施策を生み出していく。この流れがなければ町の変革は望めない。

この流れが飯田市にはできていたのである。住民からのボトムアップと行政からのトップダウンが確立していたのである。ここが私の住んでいる地域とは違う大きな部分だと 4 日間で感じた。

りんご並木についても似たようなことが感じられた。中学生が育て始めたりんごの木であるが、当初は、何者かによって獲直前に盗まれてしまうといった事件はあったが、今では、とてもきれいなりんご並木として通っている。私たちのような県外の人たちにとってはまだまだ注目度は低いが、きっかけとしては、大きなものだったと感じる。

そのりんご並木を中心として行われる「飯田りんごん」は一度テレビ番組で取り上げられているのを見たことがある。実際に参加して感じたことは、飯田市に住んでいる人々の大半が参加し盛り上げていること、第三者として参加するのではなく、自分がやってやるという意識をもって参加していること。これには本当に驚いた。

祭り一つであれほどまでに夢中になることができる。そういった地域全体が集まる祭りは、地元にはない。なにかを始めるにあたり、飯田市にはいくつかの大事な基盤となるものをもっていると感じた。

少子高齢化が日本中で進行していく中でも、飯田市は他の地域と比べ進行スピードはとても早く、地域発展を成し遂げるために必要な若いものの力が欠けていた。そこでワーキングホリデーという海外で流行していた制度に注目をしたのである。

今でこそ、ワーキングホリデーという制度がうまく作用しているが、今に至るまでに農家さんたちには様々な苦悩があったという、いくつか挙げていくが、ありのままの農家の姿を見せてあげてくださいとの行政からの要望であったが、人と人との関係であるがために、精神的に参ってしまう。お客さんとして迎えているわけであり、美味しいご飯を用意する、観光場所を案内する。また、見ず知らずの他人と数日間、同じ一つ屋根の下で暮らさなければならない。当時の農家の感想は、「もうこれ以上ワーキングホリデーを続けたくない」という、とても現実的なものであった。

しかし、農家の高齢化が問題とされている状況であるため、簡単に諦めてしまうわけにはいかなかったと農家の川田さんは話していた。緑豊かな自然に囲まれている飯田市だからこそできることである。仮に、私の地元の三重県伊勢市でワーキングホリデーを試みるとする。田んぼが比較的多い伊勢市では、田植えから収穫までの期間この制度で若者を募集する。大きく分けて作業は年2回、4月頃の田植えと、10月頃の稲刈り。飯田市は4月～10月までの気温の高い時期全般を募集期間とする。こう見ると、飯田市がいかん土地をうまく活用しているかが分かるだろう。

ここからは、飯田市の太陽光発電について三重県伊勢市と比較して見ていく。

まずおひさま進歩エネルギー。これには本当に感心した、無料でソーラーパネルを設置し、一定の期間が経てば、発電量を自分のものにできる素晴らしいシステムであるが、

やはり高齢化が進んでいる町にとっては普及率を上げていくことは容易ではないことがわかった。ここで伊勢市にうまくこのシステムを利用することはできないかと考えてみる。2016年に伊勢志摩サミットが開かれることで最近有名になっていることによる旅行客の増加を見込み、太陽光パネルを搭載した旅館やホテルを建設する。ホテルなどは、高層階にパネルを設置することが見込まれ、その発電量は各家庭に設置した時よりも多くの発電量が見込めるだろう。また、環境面にも県を上げて取り組んでいるという印象を与えることができる。これにより、日本全体への良い刺激になるはずだと考える。

とても単純な考えであり、様々な問題点が挙げられることはわかっているが、こういった機会を利用しない手はない。

飯田市の普及率をあげるための低減であるが、現段階では、改善点を上げることは難しい。また、長い時間を掛けることにより結果がついてくることであるため、4、5年の我慢は必要であると感じた。

これもまた長い目で見ていかなくてはならないが、航空宇宙産業も飯田市にはある。未来産業の創出として新事業の育成として働く場をつくり人口減少に歯止めを掛けることになり、技術力向上と設備投資、人材の育成が望まれる。松島さんの話によると、こういった事業が光を浴びるまでには10年はかかるという。この事業が脚光を浴びれば、飯田市の活性化は一気に進むのではないかと考える。

ここで1日目の農家民泊についてであるが、実際に体験する前に、いくつかの確認事項というものを自分のなかで用意しておいた。まずは、ソーラーパネルは設置しているのか。電力はどのくらい使用しているのか。ゴミ問題に関してはどう感じているのか。

また、この飯田市の良くなるためには、何が必要なのか。という環境面と地域発展について話を聞くことができた。

ソーラーパネルは泊まらせていただいた家庭には設置してはいなかったが、4日間の移動の中で想像していた数を軽く超える設置数だった。よく見ると、比較的新築に多くついているのかと感じた。その通りであった。高齢者の過程であると、10年間という契約期間が過ぎるのを待たずに亡くなってしまい、子供に負担がかかってしまうなどの理由があるという。電力に関しては、太陽光で発電した電力を全て使い切ることはない。そのため高齢家庭にはおすすめであるのだが、なかなかうまく行かないのが現状である。

今後の展望としては、いかに高齢家庭の設置数を増やすか。おひさま進歩システムに、高齢者にも安心して設

置ることのできるシステムを考えていかなくてはならない。

そして、これは飯田市出身の学生に聞いたのであるが、飯田市に住んでいる高校生はこういった制度があることを知らないという。ということは、ほんのわずか一部の人にしか知らないのである。名前を知ってもらうところから始める必要があるのかもしれない。

これから各項目について関連させながらまとめていく。

まず飯田市には、住民と行政の間に強い絆があり、共同して発展させていこうという関係性がうまく構築されていること。ここが他の地域とは大きな違いである。そして、発展を遂げるための第1段階、第2段階はもうほぼ完成しているのである。つまり、あとは結果を待つだけ、こういう風に考える。私が、1番感じたことは道を歩いていて若い人たちと会うことがあまりなかったのである。農家さんやスーパーにいるのも高齢者の方、ゴミ収集をおこなっている方も高齢者の方なのである。

こういった所から、発展を望んでいる町は、まず名前を知ってもらうことから、始める必要があると感じた。近所の人たちだけで有名になっても仕方がない。テレビや雑誌を有効活用して、若い人たちを呼び込む。これに尽きると私は感じた。